注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
いきおいトリップ！

【作者名】
神山

【あらすじ】
ある日いつものようにフォールアウト3をしていた主人公の元にいきなり訪れた神様。なんだかんだで意気投合した神様がフォールアウト3と、途中別の神様に魔法を移植された似て非なる異世界にトリップさせてくれるというのでレッツラゴー！

にじふぁんからの移転です。長らくお待たせしましたが、ようやく再開です！

ぷろろーぐ

「くっ……！ラッドローチにＶ．Ａ．Ｔ．Ｓをやるとこうなるのか！今更気づいたわ！」

ゾワゾワと鳥肌が立つ身体をそのままに、テレビ画面を食い入る様に見てゲームしている男がいる。というか俺なんだけれども。

「ふぅ、ラッドローチは俺の天敵だ……」

俺は一旦ゲームを止めて一息つく。俺こと如月耕也は現在大学二年の二十歳だ。この二十年間で特に特筆すべきことは全くもってない。どこぞの小説の主人公の様に容姿がベラボウにいい訳でも、どこかの武術をやってる訳でも、波乱万丈の人生を送ってシリアスな心の傷を負ってる訳でもない。

本当に普通に過ごしてきた。そりゃ悲しい事や苦しい事もあったが、人並みであると自負している。とにかく、良くも悪くも普通な何処にでもいる人間というのが俺なわけで。

「で？あなた誰？」

「お？やっと区切りがついたかの」

真横でゲーム見てたダンブルな校長みたいなじいさんに知り合いはいないのだ。というかいつの間にか横にいたんだわ。何をするでもなくゲーム見てるだけだったから、とりあえずゲーム区切りが良いとこまでやろうとやってた。

「ふむ、いきなりじゃがワシはお主ら人間の言うところの神様での。たまたま下を見てみれば、何やら面白そうなゲームをやっとるお主がおるではないか」

「で、見に来たと？」

「うむ。そのゲームワシ持ってないし」

なんてこったい。神様ゲーマーですか……ってか神様という事を軽く信じてる自分にビックリだ。何で騒いだりしないんだろ。不法侵入だぞ？

「そこら辺は騒がれると面倒だから神様パワーで何とかしたわい。で？そのゲームは？」

「セコいな神様パワー……まぁいいや。このゲームはフォールアウト３と言ってだな」

神様パワーからか、長年の友人に説明する様に落ち着いて話し出す俺。

このゲームはもし全面核戦争が起きてたら？な世界だ。何処かの世紀末よろしく世界は核の炎に包まれ、荒廃したアメリカが舞台のかなりの自由度を誇るゲームである。その中で主人公は父を探すため、Ｖａｕｌｔ－Ｔｅｃ社が作った核シェルターの一つ。Ｖａｕｌｔ１０１から出る。ウェイストランドと呼ばれる血と暴力の蔓延し、放射能により変異した凶悪なモンスターと腐った人間達が多く存在する土地で、主人公はどう生きていくのか……。

「大体こんな感じかな？まぁ詳しくは説明書見て」

「む、むむむ……！欲しい！このゲーム欲しいぞ！」

ネタバレをなるべくせずにざっと説明し終えるといきなり吠え出す神様。気持ちはわからんでもないが……俺は軽く二年ハマり続けている。中毒性がヤバイですよ。お陰で武器防具アイテムや雑貨はあり得ない位の数をメガトンの家のロッカーに入れてある。

三週目にして問答無用で詰め込みまくったから特定の物を探すのが大変になるのがたまに傷だが。ちなみなカルマはＤＬコンテンツを含めたので善人プレイをしまくって救世主だ。

「じゃあ神様作れば？神様ならその位出きるんじゃね？」

俺の気持ちを抑え込む何てワケわからん事が出来てるし、何より神様だから出来るでしょ？お陰で抑揚の無い地の文だよ。

「馬鹿もん！こういうのは直接自分で買いに行ってこそ意味があるのじゃろうが！」

「わからいでか！」

まただが気持ちは物凄くわかる。買いに行くまでのワクワクと、買った帰りのワクワク……これに勝るものはない！やってみて自分に合わなかったらテンションがた落ちするが……。

「「……同志!!」」

俺と神様はガッチリと握手した。

◆◇◆◇◆◇◆◇

あれから俺達は和気あいあいとゲームショップに行き、フォールアウト3のソフト（もち新品）を買った。DLコンテンツに関しては本編をガッツリやってからやりたいとの事なので、追加のソフトも買った。そしてなんと、最近PS3が仕事しないからと、部下に破壊されたらしいのでどうせなら最新版を購入。

ここまで来ると、初めてのフォールアウト3パックとも言えるんじゃないかと思う。ちなみに神様金持って無かったので全額支払いました。そして今は家に戻って来た所。

「うぅむ……すまんのぅ。何から何まで。何とお礼を言えばよいやら……」

「いやいや、同志が増えたのは嬉しいし、いいよ」

このゲーム知り合いに知っているのが誰もいなかったので、これは素直に本音。だが、予想外の出費だし……今月ピンチだな。

「むっ！閃いたぞ！お主！異世界トリップしたくないかの？」

「え？マジで？」

神様の言葉にかなり驚いた……と言っても抑えられてるから微妙だが。……さっきは神様テンションヤバかったから一時的に外れたんだと思う。

「うむ。閃いた瞬間にお主の人生ざっと見たがの……普通過ぎて面白

味が欠けすぎてるわい！それに凄みと面白味を加えようではないか！お礼も兼ねるのでいろいろオマケ付けたるぞい！」

最後らへんは演説っぽく言ってくる神様。一度は夢見た異世界トリップ……やろうじゃないか！

「勿論行くに決まってるじゃないか」

声に抑揚が出ない！この心の奥底にあるテンションのヤバさが全く出ないよ！

「うむ！そう言うと思っておったぞ！ちなみに世界は……おぉ、良かったの。フォールアウト3に色々混ぜた似て非なる世界じゃ。馬鹿なワシより下の階級の神が他の世界の国々やら魔物やらを連れてきたようでの。舞台のアメリカ以外他の大陸がその影響で無くなっておる。すなわち……」

「すなわち……？」

神妙な顔つきをしだす神様に思わず息を飲む。

「……すなわち剣と魔法と銃の世界じゃな。それにスーパーミュータントやらは何故かそのまま健在じゃ」

マジかよ……それってヤバくね？銃じゃ魔法とかに役立たないっしょ？

「まぁ安心せい。元来その世界におったウェイストランドの血筋の人間は別だが、魔法界の人間は幸い科学が発展しとらん。しかも何故かミュータント共には魔法が効きにくいようでな。軽く捻り潰されておるわ」

うわぁ、パねぇな。ならフォールアウト対策しとけば何とかなるか？

「さて、耕也よ。願いを聞こうか」

「ん。ならまずは絶対に壊れなくて重量制限の無いＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００、それと中に俺の今まで集めてきた物を全部入れてくれ。使うための技術も頭にぶちこんどいて。あと肉体はゲームの俺のキャラに。スキルは全部マックスでＰｅｒｋは善と中立側のやつだけ全部くれ。カルマ下がるのはいらん。あ、あと魔法耐性と身体能力を結構上げといてくれ」

いや、何て言うか。我ながらチートですね？スキルとＰｅａｋだけで万能人間なのにね？

ちなみにＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００とは腕に付ける小型のコンピュータみたいなやつだ。どうやってか知らないが、いろいろ物を入れる事が出来る。しかもオートマッピング機能に時計、体調管理や武器等のニコイチ修理。終いにはラジオも聞けるというなんとも便利な道具だ。

「う、うむ。わかったぞ。肉体の方は向こうに行けば作り変わるから安心しなさい。そんでホレ、お主のＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００じゃ。中々に骨が折れたが、全部入れといたぞい。あと、家にあった医療キットやヌカ・コーラの販売機とかの器具も入れておいたから、向こうで家でも出来れば使うと良い。肉体の魔法耐性も上げておいたし、戦闘技術や生きるためのノウハウはお主のキャラクターが一番知っておったからそれを基盤に弄っておいた。少なくとも人間に負ける事はそう無いはずじゃ」

「わかった」

「うむ。では、送るからの。向こうで頑張ってこい。あ、詰まったら聞くからの～！」

Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００を腕に付け、その言葉を最後に、俺の意識はなくなった。

一話目

「む？」

パチリと目を開けると、目の前には荒廃した大地が広がっていた。って、うおぉぉぉ!!今まで画面越しに見ていた大地が目の前にいぃぃぃ!!しかも何か知らんが敵サーチとＡＰが頭に浮かんでくる！体力は出んが、残弾数とサーチが解るのはかなり良い！しかも背後にも何か出来てるし！これでミュータントとかに奇襲されるとかなくなったぜ！

「テンション上がるな」

……あれ？テンションほど言葉に抑揚が……出ない？まさか!?

――ピピピッ

「む？」

ヤベェヤベェと顔には一切出ずに思っていると、Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００から電子音が鳴る。こんな機能あったかな？と考えながらも弄ると、メモとかが入るとこに新着情報が追加されてる。

「えっと、神様から？」

――神様じゃ――

耕也や。ワシじゃワシ。神様じゃ。無事に行けて何よりじゃよ。

ところでの、お主にワシ感情を抑え込むために神様パワー使っといたじゃろ？それをのー、解除せずに送ってしまったのじゃよ。じゃからこのメモを開いた時点で解除するよう弄くったのじゃが……何でか知らんがお主の『驚き』という感情のみを取り去ってしまったのじゃ。しかもお主の発する言葉の中だけピンポイントでの。訳がわからんわい。まぁ奇襲とかで驚いて攻撃食らうとか、驚いて固まるとかがなくなるだけじゃ。他はちゃんと抑揚つくからの。安心せい。いずれは治るじゃろう。あとどうせならと、Ｖ．Ａ．Ｔ．Ｓ機能と索敵機能を付けといたからの。頑張ってこいよ～！

ぬぁんだってぇぇぇぇぇ!?それじゃあ敵が頑張って奇襲してきても「あ、来たか」って程度で、身体はキッチリ動くわけか！

「良いじゃないの！」

おぉ！やっと言葉に抑揚が……！何か感慨深いな……だがいつまでもこうして突っ立ってる訳にもいかない。ここはすでに異世界なんだから、しかもフォールアウトの化け物共に魔物やらもいるという死亡フラグ満載の場所だ。レイダーやタロン社の傭兵共はどうかは知らないが、居るとすれば尚更危険だし。

「えっと……とりあえずこのままじゃすぐ死ぬから……」

俺はＰｉｐ－Ｂｏｙ３０００の武器防具欄を弄る。いくら神様パワーで身体能力強化されてるからって、頭をぶち抜かれたら流石に死ぬだろうしね。

「Ｐｅｒｋは取ってるからパワーアーマーは着れるな……よし」

俺は普段着からリオンズプライド・パワーアーマーに変更する。この防具ならもし人と会っても、多分怪しまれる事はないと思う。エン

クレイブならヤバいだろうが、Ｂｒｏｔｈｅｒ　ｈｏｏｄ　ｏｆ　Ｓｔｅｅｌのエースチームのこれならちょい浮くだろうが、いきなり撃たれるとかは無い……はず。

ちなみにこの二つの勢力は敵対しており、しかもエンクレイブは従わない現地民を容赦なくぶっ殺していたりしたから受けが悪い。ウェイストランドのＢｒｏｔｈｅｒ　ｈｏｏｄ　ｏｆ　Ｓｔｅｅｌはなるたけ助けてた様だが、今現在どうかはわからない。結局どっちも似たような組織だったし……が、とりあえずその場しのぎって事で。急に会ったりした時用だし、防御力高いからね。

「さて、どうしようか……」

Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００には地図登録は一切無いし、今わかってるのは敵性反応は今のところ無し、そんで俺の真後ろ……と言っても遠いいが森がある。となると、適当に行くよりはそっちに行く方が良いかな？

「まずは、あそこからか……マッピングも出来るだろうし行くか」

俺はそう呟いて、Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００から念のために武器を取り出す。まず背中にクサンロング・アサルトライフルを出し、右足に高威力のマグナムで何故かホルスター付きのブラックホークを出す。ゲームじゃないので同時装備が出来るのは嬉しい。それに持った瞬間頭にそれの動作や使い方が流れてくる。まぁスキルマックスだし、平和なＶａｕｌｔ１０１から出てきてすぐなのに銃の修理や核爆弾の解除が出来る主人公だからな……まぁ俺の場合は神様パワーなんだが。

「よし、行くか」

俺は一度装備を確認し、背中のクサンロング・アサルトライフルを両手に持って森に向かって歩き出した。

二話目

あれから周りを警戒しながら進み、森に到着した。どんどん近づいていくにつれて土が変わっていき、今は一面栄養のある大地に変わっている。

ここまで歩いてきた訳だが、パワーアーマーを着ているにも関わらず全然疲れなかった。これは主人公のレベルマックスで、パワーアーマーは着なれているし、更には神様パワーがついているからだろう。

元の俺なら着ただけで崩れ落ちる自信がある。が、今はパワーアーマーが普段着の如く軽い。まだ日も落ちてないし、体力的にもしばらくは行けるはずだ。

「で、ここまで来たのはいいが……どうしようかな」

ここに来た事でＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００には地図登録され、名前がわかっている。その名も『ベルドアの森』。集中してサーチすると、奥の方で気配がした。

「とりあえず、行くしかないか。人なら町が何処か聞けるし」

俺はクサンロング・アサルトライフルを背負い、ホルスターからブラックホークを抜く。森だとうまく取り回しが出来ないだろうからな。ハンドガンタイプのが小回りが効く。でも……

「……もう一個出しとこ」

ビビリで悪いか!!

◇◆◇◆◇◆◇◆

「へっへっへ、持ってるもん全部置いてきな！」

「たっ、助けてください！」

「……何故こうなった？」

俺の目の前には小汚ない服を来て、剣を抜いて美人のお姉さんと気を失ってるらしい騎士っぽい甲冑を着たイケメンのお兄さんを縄でグルグル巻きにして人質に取ってるおっさん達がいる。その数六人。うち一人が後ろに隠れているが、サーチで丸わかりなので何の問題もない。

ことの始まりは少し前に遡る。俺が反応に向かって進んでいくと、そっちから悲鳴が聞こえてきたんだ。で、テンプレ展開？って思いながらも見捨てる訳にもいかないのでブラックホークと．４４口径マグナムを両手に持って行ってみると、丁度イケメン騎士が後ろから殴られて負けてるじゃないか！それで思わず

「テンプレ展開だっ！」

ってその事実にテンションが上がってわりかし大きめな声で言っ

てしまったのが運のつき。それで思いっきり気づかれて、今に至る訳だ。その時の驚きがホント怖いくらい顔や声に全く無かったのも記憶に新しい。

『あっ、いるじゃん。あれ？俺案外冷静？あ、そういえば驚きがねぇんだった。キメェ（笑）』ってなったからね？

「おいてめぇ！何とか言ったらどうだ!?」

「ん？」

おっと、思いの外時間が経ってたみたいだな。それにおっさん達は苛立ったのか、お姉さん達に剣を突き立てる。

「あんま嘗めたことしてるとこいつら殺すぞ！」

「ひっ！」

「む～ん……どうしたもんか」

ブラックホークを肩にトントンしながら考える。正直言えばこの人達知り合いじゃないし、人質にしても意味ないんだが……まぁこれも何かの縁か。助けといて損はないはずだ。

「そうと決まればやるしかないか」

ボソリと呟いてからV．A．T．S起動。このV．A．T．S機能はゲーム内ではポイントを消費して時間を止めて、撃つ箇所を決定してからボタン操作だけで撃てるというシューティング苦手な人でも出来るようにしたものだ。頭、胴、腕、足と選択でき、しかもそこに当たる命中率まで出ているというチート染みた機能である。使用

している間はそれ以外の行動が出来ないのが難点ではあるが……まぁ俺はＶ．Ａ．Ｔ．Ｓ用のＰｅｒｋｓも取ってるので、本来ポイントは使ったら自然回復するまで待たなくてはいけない所を、それで敵が倒せれば瞬時に回復出来る。よって連続使用が可能な訳だ。

俺はそれを使い、まずは人質にしている奴等を狙う。とりあえず可能なその二人の頭部を決定。九十五％なら確実だ。

まぁ……当たったらゴメンナサイということで。発砲！

「うげっ！」

「なぁっ！」

「なっ！こいつ！」

上手く当たり、頭部を弾き飛ばす。それに奴等は同様しているが、気にせず連続使用！フル回復だぜっ！今度は後ろの奴と人質に近い奴！

「ぐぇっ」

「がぁっ」

「あと二人っ！」

今は両手に持っているので腕を広げる形で両方で発砲、命中。神様パワーで身体能力強化されてる俺にはマグナムの反動なんて屁でもないのだよ！そんでまたフル回復！残った二人が今度は人質を盾にしようと動き出すが、こっちのが早い！

「ラストッ！」

ドンッ、と同時に発砲。見事に頭部が弾け飛んだ。ふー……周りがえらくスプラッタな状態になったな。それにしてもゲームみたいに頭ぶち抜かれても生きてるとか無くてよかったわ……まぁあれが異常なんだよね？

「あ、あの……助けて、くれたんですか？」

考えながらリロードしていると、お姉さんに話しかけられた。言葉が詰まっていることから動揺しているようだ。

「ん？あぁ……だって君が助けてって言ったじゃないか」

「そ、それはそうですけど……ひっ！」

カチャカチャとリロードが終わり、銃をホルスターに収める。返事をしてから顔を上げると、彼女の顔が真っ青になっていた。どうやらふと下を向いてしまったようで、彼女の目線の先にはおっさん達の下顎しかないスプラッタな頭部があった。しかもまだ痙攣してるし……いかん。女性にこういうの見せちゃいかんな。さっさと縄を解かないと。しかも彼女ドレス着てるから、結構裕福なとこの子女さんかもだから余計ヤバイ！

「あぅ」

「……気絶してしまった」

声をかける隙もなかったな……まぁいい。今は好都合か。

俺はおっさん達の死体に近づく。剥ぎ取りがゲームと同じなのか、

手作業なのかを見るためだ。で、結果から言えば大体ゲームと一緒だった。

Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００に自分の持ち物欄と相手の持ち物欄が表示される。見てみると、ロングソードと盗賊の服と書かれている。ぶっちゃけおっさんの服は欲しくないし、汚いのでロングソードだけ貰う。すると地面にあったロングソードが消えた。Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００を見るとちゃんと入ってるのがわかる。だが明らかに耐久値がすり減っていて、もう壊れそうだ。

なので他のやつらも同じのを持っていたため、それらを全て取る。同時に銀貨五枚と銅貨十枚を手に入れた。この世界の通貨なんだろうが価値がわからんので入れとくだけ入れとく。ついでにイケメン騎士にも試してみたが、出来なかった。どうやら生きている人間には無理なようだ。

そして六人分、つまり六本のロングソードが集まったのでＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００内でニコイチ修理する。ようは二つ使って一つにして耐久値をあげる訳だ。しかしこの六本じゃ足らなかったので、持っていた中国軍将校の剣が使えたのでそれも合わせる。というか腐るほどあるからいくらでもいけるんだわ。

「よし、でき……た？」

そして修理が完了したと思って見てみると、何故か名前が変わっていた。ただのロングソードで攻撃力も１０程度だった筈なのに、名前がミリタリーソードになり３０まではね上がっていた。気になって出してみると、さっきまで見ていたボロい粗末な剣ではなく、しっかりとした造りの新品同様の両刃剣が出来ていた。

「む～ん……持ってるものは掛け合わしてもならないのにな。こっち

の世界のと掛け合わすとなるのか？」

実際中国軍将校の剣を修理してみるが、変わらない。となるとそれしか浮かばないんだが……今現在試す物がない。後々試す事にしよう。

「とりあえず、こいつで二人の縄切るか」

俺は近づいて手に巻き付けられている縄を切っていく。お姉さんはそれだけだったが、お兄さんは体グルグル巻きにされていたので面倒だった。

「ふぅ」

俺は二人の縄を解いて、これからの事を考える。ちなみにミリタリーソードの切れ味は苦もなくわりと太めの木の枝を切り落とせる位高かった事に脳内だけで驚いていた。身体はさっさと剣を戻していたが。何とも変な感覚だが、こうなってしまったんだから慣れるしかないよな。

とりあえず、気絶したお姉さんをまた気絶させる訳にはいかないので、場所を移動するしかない。幸いここら周辺に敵対反応は無いので、二人を背負っていてもなんとかなるだろう。

「よっと……軽いな」

俺はお姉さんを肩に担ぎ、お兄さんを脇に抱える。お兄さんの甲冑がゴツゴツしてて痛いからパワーアーマーが脱げないので、お姉さんにはしばらく我慢して貰うしかない。と言っても気絶してるからわからんだろうが。

「うし、行くか」

俺はしっかりと二人を持ち、その場を後にした。

◇◆◇◆◇◆◇◆

しばらく進んでいくと、川を発見した。しかもそこは少し開けた場所なので、休むには最適だ。ここで良いだろう。

「よっと」

俺は二人を下ろす。日も暮れてきたので、今日は野宿だな。

「ならちゃちゃっと準備するかな」

俺はまず辺りに落ちている木の枝を広い集める。粗方集まったところで、体の覚えているサバイバル知識をもとに火をつけていく。身体が勝手に動くようで気持ちが悪いが、何度か失敗した後にようやくつけることが出来た。そうすることで違和感が少し減ったから、自分で体験すると会得出来るのだろうと思う。

「ふぅ……」

俺は未だに気絶している二人の横に腰を下ろす。しかしパワーアーマーは座りにくかったので装備をなんとなくレギュレーター・ロングコートに変える。被っている帽子は今は邪魔なので横に置き、Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００を弄って中からきれいな水を取り出し一息。水はあり得ん程あるが、食料が汚染されたのしかないのが痛い……早めに調達しないといけないな。試しにポークビーンズ食ってみるとなんか苦かった。

さて、暇なので二人の容姿を説明しよう。彼女の方は金髪の背中までのロングストレートで端正な顔立ち、それに白い高そうなドレスを身に纏っている。前述した様に身分の高い人間か、金持ちさんだろう。

イケメン騎士の方は銀の短髪に白が基調な甲冑。そしてやっぱりイケメン。イケメンなんて滅んでしまえ！

「んっ……？」

「お？起きたか？」

俺がイケメンへ嫉妬の炎を燃やしていると、金髪のお姉さんが目を覚ました。これでようやく話ができるな。

「あれ？えっと……どちら様でしょうか？それにここは？」

どうやら記憶が混濁しているようで、少し困惑しながらも警戒気味に聞いてくる。まぁ無理もないんだが……ちょっと悲しい。

「落ち着いて。俺はさっき捕まってた君たちを助けたものだ。あのままあそこに居させるわけにもいかなかったからここに連れてきた。安心してくれ、危害を加えるつもりはないから。ただ二、三聞きたい

ことがあるだけだ」

俺がパワーアーマーの頭用の装備を見せると、納得してくれたのか彼女は肩の力を抜いた。だが目線だけはきっちりとこちらに向けている所を見ると、ただのお世間知らずのお嬢様ってわけでもなさそうだな……。

「そうですか……助けていただいてありがとうございました。あの、私の他にもう一人いたと思うのですが……」

「その騎士君なら君の後ろでまだ気絶してるよ」

「えっ？」

俺が言いながら指をさすと、くるりと振り返る彼女。そして騎士君に気付くと、少し慌てた感じで彼をゆする。

「れ、レオナルド！起きて！」

「くっ……どうやら、無事のようだね……っ！」

「レオナルド！しっかりして！」

彼女がゆするとレオナルドというらしいイケメン騎士君が意識を戻した。ってか死にそうじゃんか。Ｖ．Ａ．Ｔ．Ｓで体力ゲージを見てみるとジリ貧だった。このままだと彼女がはたいただけでも死んでしまう！それは避けなくては！

「［ｓｐｅｅｃｈ１００％］君、彼から離れるんだ。このままでは彼は危険だ」

「[成功]はっはい！わかりました！でも……どうしてわかるんですか？」

ん？なんかスピーチ判定出たな……変なとこでゲームと一緒だ。肉体がゲームのキャラだからそういうのはそのまま出るのか？

「[ｍｅｄｉｃｉｎｅ]俺は医者でもある。運んでくる時は甲冑で気を失っていたからわからなかったが、今の彼の様子を見てわかったよ。だから、任せてくれないか？」

「お医者様なのですか!?なら、レオナルドをお願いします！」

正確にはスキルとＰｅｒｋを持ってる医者の息子なんですがね。でもそのおかげで医療の知識がガッツリ頭に入っているんだが……その知識とこの体の経験がこの患者はヤバいと告げている。

「お、お前は……」

「動くんじゃない。死ぬぞ？」

言いながらビクビクプルプルしている騎士君の甲冑を慎重に取り、下に着ていた服をＰｉｐ－Ｂｏｙ３０００から出したハサミで切る。そうして身体を見てみると、彼は肋骨と右腕が折れていて胸部の内出血がひどい状態だ。幸い肺には刺さったりはしていないようなので安心した。

「さて、ちょっとチクッとするぞ？」

俺はＰｉｐ－Ｂｏｙ３０００からスティムパックを五つ取り出し、内二つを腕に、三つを胸部に打ち込む。するとあら不思議、みるみる内に治っていくじゃあありませんか！骨折は両方とも元に戻り、内出

血も何故だか引いている。……ほんと何でだろう？

「くっ……？痛みが……!?」

「え？嘘……あんなに真っ青だったのに治ってる!?」

オペ終了！っつってもスティムパック刺しただけだけど。念のためもう一つ出してまた彼の身体に打ち込む。調べてみたが、もう大丈夫だ。完全回復！

「［ｍｅｄｉｃｉｎｅ］傷は大丈夫だ。体力も回復したしもう動けるだろうが、無理はするなよ？ほら、水だ」

「あぁ、すまない。ありがとう」

俺が結局飲んでいなかった水を渡すと、寝ていた身体を起こして受け取る上半身裸のマッチョイケメン騎士。そして一口飲んでそれを置いた瞬間

「レオナルドー！」

「うわぁっ!!」

彼女がレオナルドに向かって抱きついた。だから無理さすなっての。

「レオナルドレオナルドレオナルドォー!!」

「あ、あはははは……」

「……」

何故だか苦笑いしているレオナルド。後日談だが、もう離れない！とばかりに抱きついている彼女と嬉しそうなレオナルドを見て、俺の顔はひどく歪んでいたそうな。

三話目

「お恥ずかしい所をお見せしました……」

「俺は別に構わないんだが……レオナルドのためにもしばらくは我慢しろよ？」

「はい……」

あの後レオナルドが貧血で体が動かなくなったために正気に戻った彼女は、顔を真っ赤にして謝ってきた。流石のスティムパックでも血液は生成出来ないようだった。血液パックは清潔な注射針とかが無いから使わない。まぁあれだけでも十分凄い訳だが。

「わかってくれて何よりだ。そういえば、まだ名を聞いていなかったな？」

「あぁ、そういえばそうでしたね。私はバルムンク王国キュライアス公爵家の長女、サテラ・フォン・キュライアスと申します。そしてこちらが……」

「サテラの護衛をやってるレオナルド・カーリーだ。レオナルドと呼んでくれ」

彼女、サテラはまだ少し赤みの残った顔で、レオナルドは動けないため寝転がったまま自己紹介した。というか公爵家で長女……めちゃくちゃ身分高い人じゃん！助けて良かった！

「そうか。俺はコウヤ・キサラギ。しがない旅人だ。よろしくな」

「はい」

「あぁ」

名前が外国っぽかったのでそれっぽく名乗る。恐らく彼らは魔法を使える側の人間だろう。ウェイストランドにそんな国は無かったし、長い歴史の間で出来たとしても、スーパーミュータントとかの化け物共もいるんだ。ドレスを着て歩く馬鹿はいないはずだ。

「それにしても、何でこんなところにいたんだ？レオナルドはともかくサテラはそんな格好で……」

「あぁ、それはですね……」

「これは僕が話そう。いいね？サテラ？」

「あ、うん」

事情を聞こうとすると、サテラが少し俯いてしまうがレオナルドが引き継ぐ。なんかあったみたいだな。

「僕が彼女の護衛だって言ったよね？それで僕は彼女とだいたいいつも一緒にいるんだが、今日はちょっと離れた所に用があってね。その帰り道だったのさ。行きは出ても下級の魔物のワイルドドッグだったんだが……帰りは運悪く熊型の化け物に会ってしまってね。僕も攻撃を受けてしまい、仲間の護衛と馬車を犠牲にして命からがら逃げてきたんだ。それで森に逃げ込んだんだけど、あの連中に後ろから不意打ちされて、この様さ」

ふむ、下級の魔物の事はよくわからんがとにかく連続で襲われてヤバかった所で俺が来たと。ならベストタイミングだったわけか……それにしても熊型の化け物か。化け物がどんなのかわからないが、用心するべきか。まだ近くにいる可能性もあるし。

「そうか……大変だったな」

「あぁ……だが何にせよ、助かったよ。君には盗賊の事も含めて二度も助けられた。今は何もしてやれないが、バルムンクについたら何かしらお礼をさせてくれ」

「バルムンクの実家についたら、丁重におもてなしいたしますね？」

「アハハ……まぁ、貰えるなら貰っておくよ。まずはここから無事にそこに行ってからだがね」

苦笑いしながら返すと、向こうも同じようになった。しかしこれで町に行けるようになった。初めは現地民側に行きたかったが仕方がない。バッチリ情報を集めさせてもらおう。

「それでコウヤ、君はどうしてここに？」

「［ｓｐｅｅｃｈ１００％］あぁ……適当にぶらぶら旅をしていてな。そんで食料も尽きたから何かあるかと森に入ったんだ。そしたら叫び声が聞こえて、な？［嘘］」

「［成功］なるほどね」

我ながらこうまで綺麗に嘘をつけるとは思わなかった。スピーチ判定最高だな！それに食料に関しては二人を放射能汚染させるわけにはいかないので、無いと言っておく。何か起きてからじゃあ遅いか

らね。

「あ、そういえばコウヤさん凄い上手に遺物使ってましたよね？私はよく知らないんですが、とても高価で数もそれほど無くて使い手が少ないと聞いています。それを三つも持ってるなんて……」

「へぇ、そんなに凄いのかい？」

マジかよ……ただの銃が遺物？とかいうえらく大したもんになってやがる……そこんとこもちっと詳しく聞かないとな。

「遺物？」

「あぁ、君が今足に付けている小さいのと置いている大きいのがあるじゃないか。旧世界の遺物。僕もそんなに見たことはないから何とも言えないけど、そこまでの美品は見たことがないよ」

「そうか？これは貰い物だからよくわからん」

とりあえずポーカーフェイスと即答する事で誤魔化したが、いきなりしくじったか？遺物なんてたいそうな名前してるんだから、もう作れないかそれとも文明が遅れていて理解できていないだけなのか……どちらにせよ、今後は誰かいるときに迂闊に銃は使えないな。

「そう。くれた人はそれをとても大事にしていたようだね？」

基本、略奪物です。

「……あぁ、多分な。まぁ今日は終いだ。暗くなってきたし、見張りは大丈夫だから、ゆっくり休め」

「そうかい？ならお言葉に甘えるとするよ」

「何から何まで……本当にありがとうございます」

やや強引に話を終わらせ、さっさと寝させる。下手してボロを出すわけにはいかんからな。しばらく番をした後、二人が寝入ったのを確認して俺はサーチをかけたまま眠りに入る。これで敵対する奴が来ても一発でわかる。俺が寝ている間も作動するようで、とても便利だ。

とにかく、今日は寝て明日に備えよう。

◆◇◆◇◆◇◆◇

「きゃあぁぁぁ!!」

「……ん？」

翌朝、俺はサテラの元気の良い悲鳴で目が覚めた。と言ってもうつ伏せで寝てたからまだ目を開けていないんだがね。動体センサーにはなんの反応もないんだが……あれ？敵対してないけど増えてる？しかも目の前に？

「ん？」

「動くんじゃないコウヤ！……落ち着いて聞いてくれよ？今君の目の前に昨日話した熊型の化け物がいるんだ」

なんと……でも敵対してないからそこまでビビらなくてもよくないか？ちょっと獣臭いが。

「だから刺激しないようにゆっく「よしよし」とぉぉぉぉ!?」

起きてそいつを撫でるとレオナルドが何か言ってるが、無視。なんだ、ただのヤオグアイじゃないか。元々の熊の怪力を強化されてる少々厄介な奴だが、アニマルフレンドのＰｅｒｋを持っている俺にはただの友達さ！

「起きるまで待っててくれたのか？ありがとな」

「ガゥ」

俺の顔の所に顔があるから見つめあう感じになる。目が真っ白でちょっと怖いが、こうやって大人しくして撫でられるのに気持ち良さそうにしているのを見ると、なんだかとても可愛らしく思えてきた。だって、律儀に待ってくれてたんだよ!?何処の忠犬かっての！

「な、なついてる？何で……？」

「……これはまた。遺物を扱う戦闘能力といい、傷を即座に治す高い医療技術といい……中々どうして、君は規格外だな」

「まぁな。努力の賜物と考えてくれ」

俺がそう言うと、少し納得できない顔で頷くレオナルド。横のサテ

ラは呆然としている。つい昨日仲間を殺した奴が俺になついて擦りよってるんだから、そりゃそうか。

「よし、そろそろ行こうか。ここに長居するわけにもいかん。怪我人に対して衛生環境もよくないし、食料もないからレオナルドの血が中々生成されない。それに俺達も腹へるしな」

俺はヤオグアイをひとしきり可愛がってから、二人にそう言う。Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００で時間を見ればもう七時だ。天気も良いから行くっきゃない。

「あぁ、そうしよう。僕も君のお陰で何とか身体は起こせるようになったしね……まだ歩けないけど」

そう。スティムパックパワーか知らないが、レオナルドの奴身体が起こせる程度には回復したのだ。血が足りない癖に一日で。こいつの自然治癒力が高いのか、この世界の人間はみんなそうなのかは知らないが、医者として言うならば……こいつ化け物か。

「それは仕方ないさ。むしろそこまで動く事が凄い」

「そうなのですか？」

「あぁ。普通なら血が足りなくて昨日の状態のままか、起きてすらいない。まっ、俺が担いでいくから安心しろ」

「面目ない……」

何を言っても歩けないんだからしょうがない。幸い身体があり得ん程強いからね。さぁて、レギュレーター・ロングコートのままじゃ何かあったら心もとないな……パワーアーマーに着替えなきゃなら

んが、昨日の話だとＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００を使ってやるのは危険かもな。何処で情報が漏れるかわからん以上、適当に誤魔化しながらいくしかないか。昨日の水は横の川のお陰で、スティムパックはドタバタで何故かバレてないみたいだし。

「俺はコイツを放すついでに鎧に着替えてくるから、ちょっと待ってくれ」

「あ、はい」

まぁこう言っておけば覗いてくる事はないだろう。レオナルドは動けないから、サテラをこれで大丈夫だ。俺はさっさとついてくるヤオグアイと共に少し離れた木に隠れる。こいつどうしよ？

「なぁ、お前さんどうすんだ？」

俺はＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００を弄って昨日のリオンズパワーアーマーに着替えて、ヤオグアイにご飯としてバラモンステーキを十個出す。待っててくれたお礼と朝ごはんです。俺も食料が無いと言った手前堂々と食えないのでここで食べる。ミレルークケーキ、普通にケーキでうまかったです。でも放射能測定のガイガーカウンターがチキチキいってたのが怖かった。まだ全然大丈夫だけどさ。

「ガゥアゥッ！」

「いやそんなついてくぜっ！ってされても」

バラモンステーキを食いながら胸を張るヤオグアイ。何でかなー、アニマルフレンドのＰｅａｋのお陰か知らんけど、なんとなく言ってることがわかる。かなり便利だ。

「ガゥ……」

「え？奥さんに追い出されたからしばらく帰れない？それはまた……何したのさ？」

項垂れるヤオグアイ。何この意外な諸事情。

「ガァ……アゥッ！」

「えぇー、子育てを手伝うのを疎かにしてしまったと？そりゃお前が悪いよ」

「ガゥッ！」

「土産物かー、そうだよな。手ぶらじゃダメだよな。それじゃあ町で何か買ってやるから、あの人らの護衛してくんない？」

「ガゥゥゥーッ！」

交渉成立！なんだか凄く可哀想なので引き受ける事にします！報酬は果物と子供の遊び道具に野球のボールで良いそうだ。俺達は二人の所に戻ると、レオナルドはサテラに手伝ってもらって鎧を着ていた。

「着替えたんですね……ってまだなついてるんですか」

「いやさ、かくかくしかじかで……」

「ふむふむ」

――説明中――

「――という訳で、ボディーガードとしてついてきてくれるヤオグアイだ」

「ガゥッ！」

「何というか……化け物でもいろいろと諸事情があるんですね」

説明が終わると、サテラは驚いた様に、レオナルドは苦笑している。ちなみにレオナルドら護衛を蹴散らしたのは違うヤオグアイだったようで、こいつは本当に知らなかった。イラついた嫁さんの可能性も無きにしも非ずだそうだが、それは言わないでおいた。

「ハハハ……まぁ何にせよ彼が味方についてくれるなら百人力さ。それにしても、化け物と話せるなんてね……本当に、何者だい君は？」

「［ｓｐｅｅｃｈ１００％］昔からの体質か知らんが、特定の動物とは意志疎通出来る。こちらが手を出さない限り味方としてね。俺も良くわかってないんだ。まぁ気味悪がられるから内緒にしといてくれないか？［嘘］」

「［成功］そうか……君自身わからないなら仕方がない。あぁ、誰にも言わないし気味悪がる事もしないよ。君は命の恩人だし、何よりそれは素晴らしい能力だと思うしね？」

スピーチスキルの無駄使いの気も大いにするが、Ｐｅｒｋですとか言ってもわからんだろうしな。実際俺も何でこうなるのかわかってないから全部嘘ってわけでもない。

「えぇ、それはあなた自身の個性ですからね。それにヤオグアイ、でしたっけ？この子があなたになついているのを見ると何だか可愛く見

えてきましたし……私達は大丈夫ですよ」

「あぁ、ありがとう」

何故だか凄く優しいの目で見られている。あれか？気味悪がられる発言で俺が苦労していたとか勝手に思ってるのか？というかそうとしか思えない……まぁいいか。その方が都合が良い。スピーチスキル万歳！

「そうと決まれば行こうじゃないか。このヤオグアイのためにもね」

「ガゥッ！」

レオナルドがそう言ったので、鎧を着たのを確認してから担ぐ。クサンロング・アサルトライフルは運ぶときに邪魔なのでサテラに持ってもらった。見せてしまった手前、Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００にいれられないからな。とりあえずトリガーに指を入れない事だけ伝えておいた。

「バルムンクはどっちだ？」

「あぁ、そうでしたね。なら私が先導しますのでついてきて下さい」

道がわからないのでやりたくないがサテラを先頭にして歩く。だが何かあったらいけないのでヤオグアイをつけよう。

「ヤオグアイ、サテラの横についていてくれ。俺はコイツがあるから大丈夫だ」

「ガゥッ」

俺はホルスターからブラックホークを抜いてヤオグアイがサテラの横についたのを確認する。ちょっとサテラがビビってるが、まぁしばらくしたら慣れるだろ？多分。

四話目

レオナルドを担ぎ、案外すぐに仲良くなったサテラとヤオグアイを先頭にして歩き出してしばらく経った。サテラはヤオグアイの背中に乗って何処のものの姫？って感じなほど仲良くなっている。その間特に何が出てくる訳でもなく順調に進んでいる。途中でどのくらいかかるのかと聞くと、このまま何もなければ夜にはつけるらしい。意外と近場だったようで助かった。

「そういえば、コウヤはギルドに入ってるのかい？入っているなら、君ほどの力の持ち主だ。さぞ高ランクだろうがね」

レオナルドが聞いてきて勝手に自己完結。聞くなら普通に聞けよ。落としてやろうか？

「いや、何かとドタバタしていて入ってないんだ。だからそこらへんの知識も無い。バルムンクに着いたら入るつもりだから教えてくれないか？」

「ふむ、そういうことなら教えよう」

スピーチスキルのおかげか口が回る回る。でもおかげでうまく情報が聞き出せた。レオナルドによると、ギルドはこの世界の街には必ず一つはあり、そこで依頼の受注、ギルド員への掲示を行っているそうだ。それとなんともテンプレでランクがあり、下からＦⅠ、ＦⅡ、ＦⅢとアルファベット一つにつき三つに分かれている。それである程度ギルドに貢献、もしくは依頼を達成することで加算されるポイントをためることでランクが上がるらしい。そしてⅢまで上げてさらに貯まるとＦならＥへ、ＥならＤへと次のアルファベットに格上げされる。最大ランクはＡの二つ上のＸだ。それで上位の依頼が受けられ

るようになるらしいが、その分危険が増えるらしい。だが金の回りはいいようなので、資金集めにはもってこいだ。バルムンクに着き次第、入るだけ入っておこう。

「と、ざっとこんな感じだね。詳しいことは実際に行って聞くといい。僕も一応入ってて、ランクはBⅡだ。これでも頑張ったんだよ？」

「へぇ、すごいじゃないか。なら化け物共も結構な数を倒しているのか？」

「いや、さすがのギルドも化け物には手を焼いていてね……魔法も効きづらいし、なにより近接戦闘では向こうに分がありすぎる。例え依頼が出ていたとしても、受ける人は限りなく少ない。高ランクの者でも戦力差がありすぎる。だからほとんどの人は化け物の相手はせず、魔物を倒してランクを上げてるのさ。化け物が出た日には、ギルド員総動員で相手をしているよ」

「ふぅ～ん」

中々大変なことで……なら銃で普通に殺せることは黙っていた方がいいな。それと銃がべらぼうにあることも。バレたら絶対無理やり取り上げか、ずっと働かされるハメになりそうだ。こいつらと別れ次第銃は使っているところを見せないようにしてなるべく隠そう。

「あ、出口ですよ！これであと少し行けばバルムンクです！」

話しているうちに結構時間が経っていたようで、森の出口が見えてきた。思ったより早く出れたのはヤオグアイが周りに威嚇しまくっていたおかげだな。敵対反応はそこそこの数が出ていたが、ヤオグアイが威嚇すると逃げてったからね。

「無事に森を出れて良かったです。あとはこのまま一直線だから楽ですね！」

「そうだね。後少しだから、すまないけどよろしく頼むよ」

「任せろ」

森から出ると、周りはあの荒廃した土地よりは格段に良い道があった。そこを真っ直ぐに歩いていくと、遠目からでも大きいと思える街が見えてきた。おぉ……ファンタジー……！

「見えてきました！あれが私達の家があるバルムンク王国です！」

俺が内心感嘆していると、サテラがヤオグアイの背中で指をさしながらえらく嬉しそうに俺に言ってくる。レオナルドも苦笑してるじゃないか。

「ハハハ……彼女の言う通り、あれがバルムンクだ。中々に大きいだろう？」

「あぁ、正直驚いたよ」

周りはグルッと高い外壁に囲まれていて、更にその周りには堀がある。水は見えないから何かしらしてあるんだろう。そして俺達の行く真っ直ぐ先には門があり、堀に橋をかけている。時間毎に閉めたり開けたりするんだろうな。その付近には門番が立っていて……やっぱりなんてファンタジー！

「ところでさ。ヤオグアイを中に入れてやりたいんだが……」

外に待たせておいて何かあったら困るからな。殺されたりは無い

とは思うけど。勝手に入れたら入れたでパニックになるのは目に見えてるし。

「それは任せて下さい！公爵家の名にかけて、必ず入れてみせます！ねー、ヤーくん？」

「ガゥッ」

か、飼い慣らされてる……？こいつらの間に何があったのさ！

「あー……サテラは元々動物が好きでね。抱き癖があるから、ヤオグアイは丁度よかったんじゃないかな？君のお陰で大人しいし」

「なるほどなー」

サテラ最初とキャラが全然違うな。俺にガンガンに警戒していたあの時の凛々しいサテラは何処行った？

◇◆◇◆◇◆◇◆

で、歩きに歩いてやっとこさ着きましたよバルムンク。夜で暗いけど、近くで見るとやっぱり外壁デカイ。堀にあったのは木でできた先の鋭くなってる杭みたいなのだった。落ちたら死ぬな、こりゃ。

「バルムンク王国公爵家長女、サテラ・フォン・キュライアスです！門

を開けてください！」

俺が堀を観察していると、ヤオグアイから降りたサテラが門に向かって叫ぶ。サテラ曰く、普通なら朝方まで待つんだがヤオグアイを入れるからこのまま行くそうだ。パニックをなるたけ防ぐためにもコソコソ行くんだとさ。

――ギャリギャリギャリギャリ

返答は無かったが、サテラに気付いたようで鎖が擦れる音を響かせながら橋が降りてくる。橋兼門みたいだ。

「サテラ様！よくぞご無事で……って化け物⁉」

完全に開いた橋を渡ると恐らく責任者のダンディーなおっさんがサテラに話しかけるが、ヤオグアイに気付いて剣を抜いた。周りの兵達も同様だ。

どうしたもんかと考えていると、肩のレオナルドがもぞもぞ動いた。ん？

「ガリアス！兵に剣を納めさせろ！この化け物は大丈夫だ！」

せっかく止めてくれてるんだがなー……俺が担いでるからなんとも締まらん。

「なっ！レオナルド殿！どういうことですか⁉」

「説明は後でしっかりとする！まずは剣を納めろ！現に今この化け物は大人しくしているではないか！」

全員で見ると、わりとシリアス気味なこちらを他所にサテラとじゃれてます。サテラ？普通君も入るべきなんじゃない？

「……その様ですな。はぁ、なんだかこちらが警戒するのが馬鹿らしくなってきました。お前達！剣を納めろ！」

ガリアスというおっさんが言うと、周りを取り囲んでいた兵士達が剣を納めていく。その中で指示を出したガリアスさんがこちらに来た。

「一応下げさせましたが、あなたがその状態なのとこの御仁、それとあの化け物について詳しく教えていただけるのでしょうな？」

「あぁ、勿論だ。実は――」

「むむっ！なんと！」

――レオナルド肩に担がれて説明中――

「その様な事が……お二人ともご無事で何よりです。はぁ……しかし、サテラ様もいくら動物好きとはいえ化け物にあのように……」

説明が終わり、ガリアスさんが疲れたようにため息をつく。そんな気をよそに門の兵達はヤオグアイの周りに集まって観察していた。背中にサテラが乗ってるからまぁ下手につつくことはないだろう。

「まぁ、わかりました。ならば早く公爵家に戻ると良いでしょう。御仁、感謝する。よくぞお二人を助けてくれた」

「いや、たまたま通りがかっただからなー……」

寧ろ街の事やいろいろと教えてくれた事に感謝してる位だしね。

「それでもだ。お主がいなければお二人がここにいることは無かっただろうからな」

「はぁ……」

「まぁそういうことだ。それと公爵家へお二人を連れていってくれないか？こちらは門の警備を欠かすわけにはいかないからな。それに行けば何らかの報酬があるだろうし、なによりあの化け物を何とか出来るのはお主だけなのだろう？」

「多分な。まぁどちらにせよ行くつもりだったから行くよ」

「そうか。なら、頼んだぞ」

ガリアスさんはそう言うとレオナルドに一礼してからたむろってる兵達に喝を入れている。

「レオナルドって意外と上級職の人？」

「アハハ……騙すつもりはなかったんだけどね。僕はサテラの護衛兼この国の騎士なんだ。サテラはこの国の姫様と仲が良くてね。その姫様がサテラを心配して許嫁でもある僕に護衛を任せたのさ。わりと上の階級なんだよ？」

「へぇ」

俺の肩に担がれてるこいつがねぇ……それに姫様直々とは恐れ入る。

「……驚かないんだね？」

「だって俺が姫様と会うわけでも無いしさ。今更媚びへつらうつもりもないし」

「ハハハ！それもそうだね！今更敬語を使われても変なだけだ！」

レオナルドがひとしきり笑い終えた頃にようやくサテラとヤオグアイがこちらに来たので移動を開始する。何だかんだで少し騒ぎになったから人が見てくるのがうざったいけど、まぁ我慢するしかないか……。

五話目

「でか……」

あれから見せ物みたいにじろじろ見られながら進んでいき、目の前の公爵家についた。ヤバい、かなりでかい。

「やっと着きましたね。コウヤさん。これが私の家です」

サテラが笑顔でそう言うと、門番に門を開けさせていた。その際にヤオグアイにビビっていたが、サテラが説明したので問題ない。門が少し音をたてて開いていく。

「さぁ、コウヤ。中に入ろう。サテラも呼んでるしね」

「あぁ」

パワーアーマーからのくぐもった声で返事をして、サテラの後を追う。門から扉までの距離は広くなかったので助かった。

「只今戻りました」

ガチャリとサテラがヤオグアイから降りて扉を開ける。すると広がるデカイ空間、床は大理石で中央に同じ階段があり、二階には部屋がいくつも見れる。金持ちだー！

「おぉ！戻ったかサテラ！レオナルド！」

「よくぞ無事で……！」

俺があまりにもきらびやかな内装に圧倒されていると、階段からサテラと同じ金髪のモノクル付けたダンディーさんとサテラの髪を切って大きくしたような美人さんが下りてきて、サテラに抱きついていた。多分お袋さんだろうが……若すぎるだろ！

「お父様、お母様、私はこの通り大丈夫です」

「あぁ……よかった。レオナルド、よくぞ娘を守り通した。それでこそ私が認めた男だ」

「いえ、私はサテラの護衛として当然の事をしたまでです。それに、今私やサテラがここに居られるのは彼のお陰です」

空気になったので黙ってレオナルドを担いでいると、ようやくお声がかかる。というかパワーアーマー着てるやつを放置って……。

「おぉ！君がガリアスの言っていた旅人か！二人を助けてくれた事、心から感謝する」

「私からも、お礼を言わせてください」

「いえ、俺は偶々通りかかっただけですから。頭を上げてください。それよりも、レオナルドをお願いします」

頭を下げる二人にそう言って、レオナルドに視線を向ける。実際血の足りていないレオナルドのためにも早いとこ行動しないとな。

「［ｍｅｄｉｃｉｎｅ］私はこれでも医術を学んでおりまして、それでレオナルドも治療しましたがなにぶん血だけはどうすることも出来

なかったのです。なのでレオナルドには精のつく食事と念のためきちんとした設備のある医者に見てもらって下さい」

「わかった。だがもう医者は寝ているだろう。医者に見せるのは明日に回してまずは食事にしよう」

「そうだ。あなたもご一緒にどうですか？ねぇ、あなた？」

「おぉ！そうだな。貴殿は娘とその婚約者の恩人だ。泊まる宿も決まっていないのならばここにいる間は泊まっていくといい。部屋はいくらでもあるからな。どうだ？」

医療スキルを存分に使えばなにやら勝手に話が良い方向に。ぶっちゃけこの国や通貨もさっぱりなのでこれは有難い。素直に受け取ろう。

「ありがとうございます、公爵様。恥ずかしながら、田舎者でこの国の事はよくわからなかったので助かります。よろしいのでしたら、お言葉に甘えさせて頂きます」

「そうかそうか。なら早速食事を用意させよう。その間に二人は風呂に入ってきなさい。汚れているからな。レオナルドは動けないと報告を受けているが、どうする？」

俺はパワーアーマーでよくわからんだろうが、二人は土や植物で汚れている。進めるのは当然だ。そしてレオナルドは腕だけは動く。さっきガリアスさんに話すときに手も動いていたからな。でもま……身体を拭いてもらう程度で頼むか。傷口が開きましたーとか嫌だしな。スティムパックなら大丈夫だろうけど。何より俺が連れてけみたいになったら嫌だ。誰が好き好んで裸で野郎の世話をするかっ！

「レオナルドは一応身体を拭う程度にした方が良いんではないでしょうか。世話役の方か……サテラとか？」

「ふぇっ!?わわ私ですか!?」

「あら、それは良い考えですね？」

「お母様!?」

ノってくれるサテラのお母さんにサテラが抗議する。しかしどうにもそういうことが好きな人らしく聞く耳持たない。

「良いじゃないの。どうせ夫婦になるんだし、遅いか早いかの違いよ」

「俺がレオナルドを治療した時に飛び付いてたじゃないか」

「まぁ、案外大胆ね。サテラ。なら大丈夫じゃない？」

「おおおお母様ぁー！」

良い感じにサテラが壊れてきたのでサテラにレオナルドを押し付けて俺は親父さんの所へ。正直さっさと風呂に入って食事がしたい。

「ハッハッハ！君も中々面白い事をするな！サーシャはあぁなったら止まらんからな……おっとそういえば自己紹介がまだだったな。私はバルムンク王国公爵家当主、ライル・フォン・キュライアス。そして今君の話にノっているのが妻のサーシャ・フォン・キュライアスだ。君は娘の恩人だ。改めてよろしく頼む」

「俺はコウヤ・キサラギです。こちらこそ、よろしくお願いします」

俺はパワーアーマーのヘルメットを外して握手する。片手がレオナルドで塞がってたからどうにもならなかったが、今は外せるからな。せっかく挨拶してくれるんなら外すのが礼儀だろう。

「ほぅ……思っていたより若いな。いくつだね？」

「十九です」

実際のところ、ゲームキャラなので本当の年齢はわからんが、多分合ってるはずだ。それに今後年齢そんなに重要じゃないと思うしね。大体でいいさ。

「サテラとレオナルドと同い年か」

マジか！二人とも俺より年上だと思ってたのにな……元日本人目線だからか？

「ふむ、自己紹介も終わったことだ、ここは私が何とかしておくから先に風呂に行きなさい。案内はつける」

「ありがとうございます」

ライルさんがそう言うと執事の格好した人がこちらに来たのでついていくと、脱衣場に到着。

「では、洗濯物はこちらのカゴに入れて下さい」

「わかりました」

カゴを指差すと脱衣場から出ていった執事さん。帰るときは呼べ

ば良いのか……？

「とりあえず、何着か入れておくか……」

もう一度誰もいないのを確認してＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００を弄って戦前の服、ウェイストランド人の服、レギュレーター・ロングコート、戦前のビジネス服をカゴに入れる。どこにあったのかとかは適当に誤魔化せばいいだろう。スピーチスキルで。もしくは明日街に出る予定だから通貨を知るついでに何かしら袋を買えばいい。

「さて、風呂に入るか」

俺はパワーアーマーを脱いで適当な所に置いて、風呂に向かう。パワーアーマーや他の物も明日綺麗にしないと……全体的に汚れてるからなぁ。まぁなんにせよ一日ぶりの風呂だ。しっかり浸かろう！

◆◇◆◇◆◇◆◇

「ふぅ、さっぱりした」

風呂から上がり、置いてあったタオルを使って身体を拭いて来たときに着ていた服を着る。ぶっちゃけこれが一番綺麗だ。さっき出したやつもどこかしら汚れてたからせっかく身体を洗ったのに着たくはない。他のもそうだろう。ちょっと浮くが……仕方がない。これで明日買うものが増えた。後はちょこちょこ洗濯すればいいか……。

外に出ると執事さんがいたのでついていき部屋に通されると、すでにサテラ達は席に着いていたので急いで席につく。謝るとライルさんは笑って許してくれたので、食事を開始。次々に出てくる高そうな料理に舌を巻いたと言っておこう。その時にここまでの出来事等の説明とヤオグアイについてを門番のガリアスさんにしたように話して終了。

「そうか……君も疲れているだろう？部屋は用意したから今日はゆっくり休みなさい」

「ありがとうございます」

また同じ執事さんに案内されて豪勢な部屋に通された。ベッドがフカフカで俺はすぐに眠ってしまった。

六話目

次の日。メイドさんに起こされるというスペシャルな出来事に感動しつつ、昨日頼んでいた洗濯物がもう乾いたというので受け取る。何故こんなに早いのかと聞いてみると、ファンタジーらしい返答が返ってきた。

「当家では水の魔法石が組み込まれている洗濯機で洗浄し、風の魔法石が組み込まれている乾燥機を使っているので早いのです。両方とも凄く高く普通の家や宿には置いてないので驚かれるのも無理無いですね」

私も初めは驚きました。と笑顔で言ってくれるメイドさんに癒されつつ考える。昨日暗かったが家などを見てみると中世ヨーロッパな感じのこの魔法世界側。どうやらフォールアウトと混じって変なところで近代化しているようだ。と言っても電気の概念が無いから魔法石とかいう物を使ってるようだが。ゲーム風に考えるならその属性の力が込められている～とかいう感じなんだろう。

「昨日のお部屋にて朝食があります。私は部屋の外におりますので何かありましたらお声をかけてください」

そう言ってメイドさんは部屋から出ていった。それを確認して置いてある洗濯物を見ると、名称の始めに全部『綺麗な』がついていた。これで見分けがつくな。

「出来れば洗濯機と乾燥機欲しいなぁ……」

服を全部Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００に入れてその中からレギュレーター・ロングコートに着替えながらボソリ。ぶっちゃけＰｉｐ―Ｂｏ

ｙ３０００に入れておけるからいつでも使えるからな……服を綺麗にするためにも手に入れておきたい。そこら辺はギルドで稼ぐしかないか。

「ならさっさと行動あるのみだ」

部屋から出てメイドさんについていき、昨日の食事をした部屋につく。するとライルさんとサーシャさんが席について食事が運ばれていた。

「おはよう。よく眠れたかね？」

「おはようございます。お陰さまでぐっすり寝れました。サテラ達はまだ？」

「いや、部屋で朝食を取っているよ。レオナルドが歩けないだろう？それで本人はこちらに来るつもりだったようだが、昨日の事で吹っ切れたのかサテラがやたらと張り切っていてな。見事に世話女房になっているよ」

「昨日けしかけた甲斐があったってことね」

「アハハ、そうですね」

つまり、いちゃついてるという事ですね？わかります。ちなみに昨日結局サテラがレオナルドの身体を拭いて、心配だからとか何とか言って一緒に寝たのだ。けしかけといて何だが……このリア充めっ！

「時に、今日君はどうするつもりだね？サテラはレオナルドを医者に見せるのに付き合うようだしな」

朝食をパクつきながら考える。今日やるべき事は通貨の確認とギルド登録と出来れば依頼を確認、ヤオグアイのために新鮮な果物を買う事と金が余れば服の調達、そして有れば洗濯機と乾燥機の値段確認だ。

「とりあえずギルド登録をしておこうかと。何だかんだで登録出来ていないので」

「ふむ、そうか。なら昨日の賊討伐の事を言うと良い。昨日うちにガリアスに馬車の確認も兼ねて早馬を出してもらったんだが、どうやら少しは名の知れた盗賊共だったようでな。証明の手紙もあるからそれを持っていきなさい。報酬が出るはずだ」

「何から何まで……ありがとうございます」

「気にするな。君は娘の恩人だ。それに盗賊共の事は報告に上がった者が偶々そうだっただけだしな」

さも当たり前と言ってくれるライルさんに食事も終わって頭を下げる。それにしても昨日の今日でよくそこまで……ガリアスさんが頑張ったのかな？でもこれで資金が増えたことは嬉しい。どれだけかはわからんが、これで行動の幅が広がった。

「では、今から行かせて頂きますね。ご飯ごちそうさまでした」

「えぇ。行ってらっしゃい。あぁ……まだ私あのヤオグアイちゃんについて聞きたい事があるから、ちゃんと晩御飯までには帰ってきてね？」

「アハハ……わかりました。ライルさん、お世話になります」

「ハッハッハ！気にするな。サテラの動物好きはサーシャから来ているからな！ちゃんと戻ってこないとどうなっても知らんぞ？」

さいですか……まぁタダ飯に安全な寝床があるんだからそれくらい安いもんだ。昨日晩御飯中にヤオグァイについて話していると、その後サテラより早くヤオグァイと仲良くなってサテラと二人でヤオグァイを洗っていた。もののけ姫親子がいたのは記憶に新しい。

「では、また後ほど」

俺は一度頭を下げて部屋を出る。そして近くの執事さんが手紙を渡してくれたので受け取って、俺は公爵家から出た。すると横で寝転がっている毛がフサフサになったヤオグァイを発見。

「よぉ。綺麗になったじゃないか」

「ガゥ」

頭だけ起こしてこちらを見てくるので、門番さんが見ていない事を確認してＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００を弄って奇妙な肉を十個程出す。この奇妙な肉、要は人肉なんだが……俺は食いたくないのでヤオグァイへ。一気に食べたので誰にも見られてはいないだろう。

「今日お前の果物買ってくるから、大人しくしといてくれよ？まぁサーシャさんかサテラが絡んでくると思うが、子供と遊ぶ練習だと思ってくれ」

「ガゥッ」

俺は異様に綺麗になったヤオグァイに背を向けて門に向かう。と

りあえず門番さんに道聞いて歩きながら通貨の確認と、ギルド行って登録。地図があれば買うとするか。

七話目

「ありがとな兄ちゃん！」

果物屋のおじさんに手を振りながらその場から歩きだす。あれからブラブラと聞いたギルドへの道を行く間に売り物や宿屋の値段、その他諸々から情報を集めてようやく大体の通貨がわかった。この世界の通貨は白金貨一枚＝１００００００ギル、金貨一枚＝１０００００ギル、銀貨一枚＝１００ギル、銅貨一枚＝１０ギル、鉄貨一枚＝１ギルと分けられている。ＦＦと似たような感じだったのでいまいち価値観がわからなかったが、食事とかは銅貨と鉄貨があれば何とかなるのはわかった。

「さて、果物は買えたし……剣売るか」

俺はコートの中に果物の入ったカゴを入れて特に人目がない時に即座にＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００に入れる。ついでに初めから腰にあったようにコートに隠れる形でミリタリーソードを腰に差しておく。果物を買ったから現在所持金６００ギルから５００ギルに。一個５ギルだったから２０個ゲット。これでヤオグアイとの約束は果たした訳だが、やっぱり金が全然足らない。今はこの剣とギルドでの賊討伐の報酬に期待するしかないか……と考えているうちにギルドに到着。でかでかと看板があるから丸分かりだ。ちなみに字はちゃんと読めたり書けたり出来る。見たこと無い文字だが、恐らく神様パワーだろう。

「……ザ・ギルド！って感じだな」

入ってみれば木造の酒場で二階建て。このまま真っ直ぐに行けば受付のようで、金髪の女の子が他のギルド員と話していた。判子を押していたから依頼だろう。俺もそれに習って受付へ。

「あの、すいません。ギルド登録したいんですが」

「あ、はい。わかりました。ではこちらに必要事項、そしてこの承諾文にサインしてください」

受付についてその机の上に紙を置かれる。それに目を通していくと、その紙の上部に氏名と年齢、性別の欄があり、その下には承諾文。つまり利用規約だ。要約すれば、

1. 死んでもギルドは責任を負わない。

2. 依頼を受けるときに契約金として成功報酬の一割を払うこと(成功した場合は戻ってくる)。

3. 依頼を失敗した場合や破棄した場合、罰金として提示された額を支払う。この時支払っていた契約金は返ってこない。

4. 基本的に依頼を受けれるのは一つだけ。常時討伐依頼、緊急時、国からの要請、化け物退治の場合は別とする。

5. 簡単に命を捨てるべからず。死した命には例え魔物であっても最上級の礼儀を。

以上。大体こんな感じだ。とりあえず……最後のやつは感動したっ！いいね、うん。これ考えた人を抱き締めたい気分だわ。でも今はいくつか聞きたい事を聞いておかないと。

「この常時討伐依頼ってなんですか？」

「これはこの世界中で無限と言って良いくらいいくら狩っても出てくる魔物の討伐依頼の事ですね。これはその魔物を倒してその魔物の指定された部位とカードを二階にあるカウンターに持ってくる事で達成とみなします。設定された報酬は無く、倒した数だけポイントが増え、部位を持ってくれば報酬が増えるシステムです。登録された際に渡すカードにその数が自動的に加算されますし、それ以外にも倒した魔物等はカードに記録されていますのでご安心を。気になればいつでもギルドで確認出来ます。ですから群れに出くわして部位が持ちきれない等となっても、部位報酬は無いですがポイントは加算されます。そしてこの依頼は重複してもオーケーで、好きなときに達成報告が出来るのです。ですが、普通にそれ以外の魔物を倒して指定部位を持ってきて頂いても換金はするので初心者サービスみたいな感じが強いですね。ランクが上がれば皆さん受けるのが面倒で、部位だけ持ってきますし」

「ふむ、その指定された部位ってのはどこで確認が？」

「あちらの本棚に図鑑と常時討伐対象の本があるのでご覧ください。持ち出し厳禁ですからね？」

「わかりました……じゃあこれで」

指差された方を見れば本棚がドンッと設置してあった。それを確認して俺はサインする。後でしっかり確認しとこう。

「……はい。コウヤ・キサラギさんですね。カード申請してきますから、ちょっと待っててください」

受付の女の子はそう言うとカウンターの後ろの扉の中に入って

いったので、俺は先程言われた本棚へ直行。ざっと見てみれば、常時討伐対象の同じ本がいくつかあって、他にも図鑑がズラリ。とりあえず俺は常時討伐対象の本を手に取る。

「えっと……ワイルドドッグにブロートフライ、ってブロートフライは魔物に設定されてるのか……」

確かにデカイ虫で攻撃方法がなんか撃ってくるだけで体力もないが……ちゃんと放射能で変異した化け物なんだがな。んで部位は羽か。肉しか持ってないや。と、思いながらペラペラめくっていくと。

――メモが追加されました。

チンッとゲームみたいに音がして、頭の中に文字がよぎる。不思議に思って更に捲ると連続して音が鳴っていた。周りは気づいていないから……まさかここまでゲームと同じなのか？

「おぉ……ホントに追加されてる」

試しにＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００のメモ欄を見れば今まで捲っていたページの魔物情報が載っていた。いやはや便利すぎだろＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００。これでいつでもどこでも情報が手に入るわけだ。

「それなら片っ端から見ていくか」

パラパラ捲っていくだけで更新されていくので常時討伐対象の本はすぐに終わり、魔物図鑑に移行してまたパラパラ。それもすぐに終わって他の本を見てみると、一冊だけある化け物図鑑。情報が少ないのか、討伐数が同じく少ないのか凄く薄い。

「うーん、設定部位以外は全部知ってる事だらけだな……」

載っているのはミレルークにヤオグアイ、スーパーミュータント、デスクロー、アリ系だけだ。しかも絵と大まかな攻撃方法、そして部位しか載っていない。これでよく今まで攻撃耐えられたな……スーパーミュータントやミレルークに上位種がいるなんて言ったら皆どうなるんだ？それに部位報酬が他の魔物と比べて格段に高い。デスクローの腕がSランク、上から二番目と同義とか……どうしよう、いっぱい持ってら。

「コウヤさーん！」

「ん？」

化け物図鑑を収めて本気で売ろうか悩みながら受付に振り返ると、ちょうど出てきた所だったようで呼ばれのでそそくさと移動する。

「はい。これがコウヤさんのギルドカードです。無くしたら再発行にお金がかかるので注意してくださいね？」

「了解です」

カウンターに戻りカードを受け取る。名前とランクが刻まれている。あ、そういえば手紙を出さないといけないな……説明とかですっかり忘れてた。

「あの～、そういえば手紙もらってたんですがこれで討伐報酬もらえます？」

俺はポケットに入れていた手紙を出してお姉さんに渡す。

「えーっと、おぉ！公爵家の方の手紙ですか！どれどれ……え？」

手紙を開いて見終わると同時に目を見開いて俺を見る受付の女の子。何か変なことが書いてあったのか？

「どうしました？」

「あの、ここに書かれている盗賊なんですが……数は六人と少ないですが、魔法や接近戦闘も出来るからとCⅡランクなんですよ？」

マジですか！いや、でも強くは……あぁ、即行でぶっぱなしたんだった。そうでした。

「この手紙には頭が吹き飛んでいたって書いてありますが……どうやったんですか？人質があったともあるのに」

そこまで詳しく書かれてるのかよ！どうする？素直に教えて何かの拍子にしゃべってもらったら困る、

でもギルドで受付してるんだから変に誤魔化せる人じゃあ無いだろうしな……っ！こういうときのあのＰｅｒｋ！

「Ｌａｄｙ Ｋｉｌｌｅｒ」今はないが、その時は遺物を使ったんだ。しかし俺は遺物の事をあまり知られたくない。取り上げられたりしたらたまらないから……ね？」

正直使いたくは無かったが致し方ない！体と口が勝手に動いて彼女の手を取り、顔を耳元に近づけ囁くように言うこの身体。そして言い終わって彼女を目を見つめれば、なんと顔が真っ赤です！

「ひゃっ、ひゃいっ！わかりましゅたっ！でででではギルドカードを～っ！」

「はい」

「そそそれではちょっとお待ちを～っ！」

カードを渡すと先程入っていった扉に凄い勢いで入っていった。うーむ、案外初な人だったのか……悪いことしたか？このゲームキャラの顔は悪くないからな。今度何かお詫びにプレゼントしよう。絶対。

「お、お待たせしました。上位のランクの盗賊を討伐したことで一気にＦＩからＤＩに昇格です。それと、こちらが報酬の金貨七枚です」

「そんなにあるの？」

まだ赤みのある顔だが幾分落ち着きが出てきた彼女に、顔はＬａｄｙＫｉｌｌｅｒの笑顔のままで、内心かなり驚いた。ランクが一つ飛び越えた事もだが、Ｃランクでそんなに報酬貰えるもんなのか？

「い、いえ。本来報酬は金貨三枚だったのですが、公爵家と門番長の方から合わせてプラス四枚という指示が書かれていたので……」

飯や風呂、泊めてもらって更には服も洗ってもらったのにまだくれるんですか！ここまでしてもらうと逆になんだか申し訳ないな……。

「ん？なんで門番長が出してくれてるんだ？」

そういえば、と一言。これは多分ガリアスさんだろうが、あの人に金を出す義理はないはずだからな。ちなみに敬語はＬａｄｙＫｉｌｌｅｒを使ったから今更な感じがするので解除。

「あぁいう名の上がった盗賊関連の依頼は大体国から出ているんで

す。いつもはギルドに張り出すんですが、今回は特に集まらなかったので門番長のガリアスさんが兵を率いて討伐に行くように昨日言われてたんですよ。でも準備始めてたらコウヤさんがやっちゃったんで、ギルドの仲介料諸々と準備費用の余りがこちらに来たわけです。ちゃっかり準備費用は抜かれてますがね」

「なるほど……」

後で礼をライルさんに言っとかないといけないと思いながら、金貨七枚を受け取る。そしてそれを握りしめ、ポケットにその手を入れる。後でＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００に入れておこう。

「ふむ、説明ありがとう。えっと……」

「あ、私ミリア・カールと言います。よろしくお願いしますね」

「あぁ、よろしく……ん？カール？」

そういえば名前聞いてなかった事に気づき、詰まっていると彼女の方からしてくれた。これは素直に助かったが……カール、レオナルドと同じ名字じゃないか？

「なぁ、レオナルドって知ってる？」

「え？兄の事をご存知なんですかコウヤさん？」

兄……だと？まるで似てねぇ。いや、金髪で顔が整ってるのは同じだが。とにかく、俺はレオナルドとの事を話す。手紙に書いてなかったみたいだな。

「えぇー！この人質って兄とサテラさんだったんですか!?私一昨日か

らちょっとギルドで寝泊まりしてるから知らなかったです……」

やっぱり手紙に書いてなかったみたいだな。それにしても、こんな偶然ってあるんだなぁ……。

「まぁ、今は公爵家でサテラが付きっきりで看病してるし、身体の傷とかは治療したから大丈夫。後はしっかり休んで血を作ればいいだけだから。近いうちに見に行けばどうだ？」

「はい。そうすることにしますね。それと、兄を助けて頂きありがとうございました」

「気にするな。ただ通りすがりで偶然だったんだから」

この世界で何度目かのこのやりとりに同じように返す。

「さて、ちょっと長く話し込んじゃったな。ミリア、常時討伐依頼あるか？」

「はい。えーっと……どれにしますか？」

俺が言うと、彼女がカウンターの引き出しから何枚か紙を取り出して広げる。ふむ、さっき見た図鑑のやつだな。ならいっそのこと全部にしとくか。Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００のおかげで持ち運びに困ることは無いし。

「じゃあ全部やってくれ」

「わかりました。こちらは一度達成報告をすると、再度受注をする必要があるのでご注意を」

「わかった。じゃあ俺は行くよ。しばらくはこの街にいるから、何かあれば言ってくれ。これも何かの縁だしな」

ギルドカードを渡して、それを置いてある鑑賞用だと思ってた水晶にかざすとその水晶に俺のギルド情報が出る。うぅむ、パソコンみたいなものか？

「はい。その時はよろしくお願いします。これでカードに受注した事が記録されました。達成報告時にもカードを渡してくださいね？」

「あぁ。それじゃあ、また」

「お気をつけて～」

そう言って立ち上がると、元気に手を振ってくれるミリアに俺も返し、ギルドから出た。

八話目

ギルドから出た俺は真っ直ぐ目の前にある武具店に向かう。金は出来たには出来たが、多いに越したことはないし。それに普通の人達はどんな武器を使ってるのか見とくのも悪くない。

「いらっしゃいまぁせぇ～」

「……」

扉を開けて入ると、一番奥のカウンターにいる店員がなんとも気の抜けた挨拶をしてきてつられてこちらの力が抜けた。が、気を取り直して足を進める。建物の中はギルドと同じ二階建てで、他の冒険者や店員がちらほらいた。

「はぁい、今日はどんな御用ですかぁ？ナイフから遺物までぇ、幅広くありますよぉ？」

カウンターにつけば先程の良く言えば癒し系の声の眠そうな目をして臼緑色の髪のお姉さんがじっとこちらを見てくる。一つだけ言っておこう、デカイ！何がとは特に言う必要はないだろう……とにかくデカイ！

「？どうなさいましたぁ？」

「あぁ、いえ。えっと……これを売りたいんですが」

「わかりましたぁ。ちょぉっと、見せてくださいねぇ」

腰からミリタリーソードを抜いて彼女に渡す。思わずガン見して

た……危ない危ない。

「へぇ……結構良い剣ですねぇ。曲がりも刃こぼれもないしぃ、全体的に綺麗でぇ、なにより切れ味も良さそうですぅ」

剣を横にしてじっと見たり、軽く振っている彼女。声質は相変わらずだが、目は凄く真剣で、やっぱりこういう武具店にいるだけはあるんだなぁと感心した。というかそれだけでここまでわかるのは凄いな。他の店や店員さんこんなに即行でわかるものなんだろうか？

「う～ん、これなら１８００ギルでどうですかぁ？」

おぉう……思ってたより高いな。チラッと見たが、数打ちの大量生産の武器は大体５００ギルだからこれはそんだけ良い武器だったのか。

「結構良い値段するんですね？」

「はい～。重さも大きさのわりには軽いですしぃ、なにより状態が良いのですぐに売り出せますからねぇ」

なるほど、これで状態が悪かったらもうちょっと下がってたわけか。修理してて良かったな。

「じゃあそれでお願いします」

「はぁい。えっと、金貨一枚と銀貨八枚ですねぇ。ありがとうございましたぁ」

彼女の手から金を受け取り、そういえば遺物を扱ってると言っていた事を思い出して聞いてみる。

「そういえば、ここにある遺物って何があるんですか？」
「遺物ですかぁ？それならぁ、二階のマリネちゃんが管理してるのでぇ、行ってみてくださぁい。あ、でも気をつけてくださいねぇ」
「？わかりました」
礼を言って階段を使って二階に上がると、一階は重装備が多かったがここは軽装備のようだ。まぁ重装備を二階に持ってくるのは大変だしねぇ。
「えっと、遺物を扱ってると下の店員さんから聞いたんですが……」
キョロキョロ辺りを見回しながら進み、カウンターに濃い青の短髪の女性を発見。下の店員さんが言っていたマリネって人だろう。
「はい。私の趣味で数点遺物を取り扱っていますが……」
お前使う気か？みたいな目で見てくるマリネさん。周りを見ても無かったし……というか俺はぶっちゃけほとんどそれしか使えないです！それに趣味とか……なら交渉の余地は有るかもな。バラさないと決めたのに、さっそく二人に自分から言ってしまう事になるなぁ……まぁこの人がそのタイプの人なら大丈夫だろうけども。
「ざっと見て無かったので、どんなのがあるのかと思いまして。これでも遺物を扱う者でしてね」
「ホントですか!?」
先程とはうって変わってカウンターから身をのりだしながら俺に

詰め寄るマリネさん。下の店員さんが気をつけてって言った理由はこれか……ってか近いっ！

「はい。しかし少しお静かに。周りの方が驚いてますよ?……それに、こちらとしてもあまり知られたくないので」

「あ、はい。申し訳ありません……遺物を扱う方に会うのは初めてで。遺物を使う方は珍しいですし、これは高いから何かと慎重になりますよね」

乗り出していた身体を引っ込めて小さくなるマリネさん。それを見て周りの客も動き出した。ちなみに遺物部分は全部互いに小声で話してる。

「すいません。商品を見せてもらえますか？」

「わかりました。奥の部屋にあるのでついてきて下さい。カウンターお願いしまーす！」

「はーい！」

マリネさんがそう言いい他の店員さんが来たのを確認すると、カウンターの後ろの扉を開いて俺を手招きする。それについて入っていけば通路に幾つかドアがあって、『休憩室』、『在庫』等々、ここが関係者以外立ち入り禁止的な所だとわかった。

俺はその間にバレないようにＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００を弄り、コートで隠しながら１０ｍｍピストルをホルスターに入れたままの状態で足に装備する。その時にわかったのだが、Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００を弄ってる時にはゲーム同様時間が止まるみたいだ。それ以外の動作は出来なくなるが、これのお陰でゆっくり選択が出来る……なんて

チート。前までは誰も居ない所でしか使ったことなかったからな。ここで確認出来たことは行幸と言えるだろう。ちなみに１０ｍｍピストルを出したのは、ここで初期武器であるこれがどのくらいの値段がするのかを見てもらうためだ。弾薬もポケットに入れとくか……。

「さ、着きましたよ。ここに保管してあるので入ってください」

弾薬を３０発程ポケットに入れた所でマリネさんが一つのドアの前で振り向く。そのドアには『マリネちゃんのプライベートルーム』と書いてあった。仕事場にこんな部屋作って良いのか？

「わかりました」

そんな風に考えながら中に入る。するとそこにあるのはガラスケースに保管されていたり、壁に飾られている銃、銃、銃……数えると１０挺もあった。個人としては３挺でサテラに驚かれたが、武器屋ならこのくらいが普通なのだろうか？

「凄いでしょ？武器の研究とかなんとか言って頑張って集めたんだから！これだけの数はそこらの武器屋じゃお目にかかれないわ！」

俺がじっと銃について頭を巡らせていると、なにやら興奮して素に戻っているマリネさん。銃を見ると人が変わるタイプなのか？ゲーム内でもヌカ・コーラで似たような反応をした人がいたような……まぁ口調はそっちのがやりやすいからいいかな。俺も敬語やめるか。

「マリネさん、手に持って見ても？」

「良いけど、変な風に弄ったり壊さないでね？まぁ遺物を扱うんだから大丈夫だろうけど」

マリネさんの許しを得てから辺りを物色。調べてみると、大体耐久値は半分程度残っていて、種類はアサルトライフル２挺、３２口径ピストル３挺、ハンティングライフル１挺、ソードオブショットガン２挺、最後にレーザーピストル２挺だ。弾薬も少ないが確認。思ったより種類があるんだな。

「へぇ……結構種類があるんだ。これいくらするんだ？」

俺はアサルトライフルを手に持ってマリネさんに向き直る。持ってるから買うつもりはないが、値段確認。１０㎜ピストルはこの後で見せればいい。

「えっと、それなら白金貨３枚ね」

高っ！普通のアサルトライフルがこんなにするのか！ミリタリーソードが１８００ギルだったんだぞ⁉こっちの世界に来てから一日目にして白金貨の商品をみるとは……とりあえず壁に戻して、３２口径ピストルに持ち変える。

「そっちは白金貨１枚と金貨８枚ね」

「むぅ……」

やっぱ高ぇ。スーパーミュータント相手には厳しい武器なんだが……希少価値ってやつなんだろうな。こんだけあれば洗濯機と乾燥機買えるんじゃないか？

「今回は手持ちがないのでやめとくよ。そのかわりと言っちゃなんだがこれがいくらするか見てほしい。値段によっては売ろう」

「嘘⁉遺物売ってくれるの⁉しかもこれ私が見たことないタイプじゃ

ないの！」

俺が１０㎜ピストルを真ん中にある机に置くと、扉近くで待機していたマリネさんがすごい勢いでこっちに来る。しかもまた机に身を乗り出して。ちなみに１０㎜ピストルは完全に修理してあるのを出してます。

「すごい……小さいけどここまでの美品は見たことないわ。どうやって手に入れたかは仕事中だから聞かないけど使い方わかる？」

「あぁ。ここを――」

一応仕事中というのは覚えてたんだ、と考えつつマリネさんに１０㎜ピストルの使い方を教えていく。その際威力のことも聞かれたので、３２口径ピストルよりちょっと上ということも伝えておいた。

「――と、こんな感じ。どうだ？」

「んー……ざっと見積もって白金貨2枚と金貨2枚ってところね。装弾数があれより多いし、持ち運びもしやすい、威力もあれより高い。なにより私の見たことないタイプだから４０００ギルアップよ。どう？」

「３０発弾薬とホルスター付き」

「なら更にプラス４０００ギルで」

「よし売った」

俺はホルスターを外してポケットから弾薬を出す。金の支払いはカウンターでやるとのことなのでそれを置いたままカウンターまで

戻っていく。この時に洗濯機とかが売ってある雑貨店といい飯屋も教えてもらったので、洗濯機を買いに昼飯を食った後に行くとしよう。これだけあれば買えるとの事なので。

「じゃあ、はいこれ。また遺物が手に入ったら売らなくてもいいから見せに来なさいよ！」

上機嫌でそう言ってくるマリネさんに適当に返事をし、俺は店を出た。ふと目に入った鎧を全パーツ買いそろえるよりも今回の売値のが高かったのには驚いた。はたから見ればチラッと見ていたようにしか見えないが。

これで所持金５００ギルから３５３００ギルに。１日で増える量じゃないのは公爵家の人達には黙っておこうと思いながら、俺は昼飯を食べるため人混みの中を進んでいった。

九話目

あれからマリネさんに教えてもらった店に行き、飯を食っている。ここに来るのも教えてもらったからか、Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００のマップに記録されていたので楽々来れた。その間にＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００からお金もしっかり出している。しかもオススメするだけあって普通に美味い。料理は材料が違ったり使う生き物が違うからか、名前が変わっていたり、見た目がちょっと怖い感じになってはいるが。後特筆すべきは女将さんが豪気でいい人であると言うことだ。

「はいよ！ガラガラ鳥の唐揚げ定食！」

「いただきます」

目の前に出されたのはちょっと形が歪な鳥の唐揚げ。この世界には箸という概念がないため出されたフォークでいただきます。今度暇があったら造ろうと思う。ちなみに座ってるのはカウンター。

「ん？何だいそれは？」

「これはですね、うちの田舎でやっていた食事をする時の……言うなれば作法みたいなもんですよ。自らの血肉になってくれる食物に対しての感謝を込めてるんです。食事とは命を食ってるんですからね。んで、食べ終わったらごちそうさま。まぁ作ってくれた料理人の人達への感謝もありますが」

「へぇ！いいじゃないのそれ！今後うちも使おうかねぇ……最近の冒険者は命を軽んじてたりするけど、あんたは全然違うみたいだ。そうだあんた。名前何てんだい？」

この世界はやっぱりいただきますは無かったか。まぁ日本だけだしねこれは。元はアメリカなんだからあるわけないか。そんで冒険者とは多分ギルド員の事だろう。そんなに無謀なやつが多いのか？

「コウヤ・キサラギです。しがない旅人です。今後ともよろしく。女将さん」

「コウヤだね、覚えたよ。アタシはシエナ・リーフレット。ここを旦那と二人で切り盛りしてる。っと言ってもこっちはアタシの趣味みたいなもんだがね？そうだ、あんた旅人ならうちは宿屋もやってるから、決まってないなら来なよ？サービスしたげるからさ」

「アハハ！ありがとうございます。でも今日は決まってるんでまた今度」

「そうかい。そりゃ残念だ」

女将さん改めシエナさんと自己紹介。言われてみれば二階に続く階段があり、幾つかドアがある。公爵家から出たらここに来るのも良いかもしれない。

「お？シエナ、ご機嫌じゃないか。どうした？」

「あら、あんた。帰ってきたのかい？今日は早いねぇ」

それから二、三話を続けていると、後ろからいかつい身体のハゲて黒い尖った口髭をしているおっさん――多分旦那さん――がシエナさんに話しかけてくる。羽織の様な物を着て腰にトンカチとかをつけているから大工さんなんだろうが、杖を持って足を庇うようにして歩いていた。

「仕事が思ったより早く片付いてな。それで？こいつは？」

「この子はコウヤ・キサラギって言ってね。中々どうして、話してみれば楽しいし、いろいろと博識だったからつい話し込んでしまったのさ」

「ほぉ……シエナに気に入られるたぁ中々やるな坊主！こいつ人を見る目はすこぶる高いんだぞ？儂はザック・リーフレット。ここいらの大工を纏めて棟梁なんかやってるもんだ。ま、昔ヘマしちまって右足がこんなんになっちまったがな」

俺の横に座ってシエナさんから俺に向き直るザックさん。その際に自分の右足をじっと見つめてから切り替えるように俺に向いていた。ふむ、右足……骨が変な風にくっついてて神経が切れてる？スキルパワーで見ただけでレントゲン要らずの診断が下せるんだが……スティムパックで治せるっぽい？

「ヘマどころじゃないだろう？十年前に現場で落下するとか……アタシがどれだけ心配したか」

「ガハハハ！すまねぇシエナ！……ん？どした坊主？」

「んぐっ……少し、右足を診せてもらえませんか？」

俺はガラガラ鳥の唐揚げを一つ飲み込んでザックさんと向かい合うようにし直す。それにザックさんが怪訝な顔をしている。まぁこれも何かの縁だ。こういう技術は使うために有るんだからな。

「［ｍｅｄｉｃｉｎｅ］俺はこれでも医者ですからね。安心してください」

「こりゃたまげた！坊主医者だったのか……だがまだ若い。坊主がどうするのかは知らないが、診るだけならタダだしな。何処の医者もダメだったんだ。坊主が出来るとは思わんがね」

まるで信用されてないが、とりあえず足を診せてもらえた。ざっと診て、俺の医療スキルがもうちょっとマシに治療出来なかったのかと言っているが、もう過去の事なので無視。ここってばそんなに医療技術が悪いのか？それとも単にヤブ医者に当たったのか？

「はぁ……まぁいいや。ちょっとチクッとするかもですが、気にしないで下さいね」

「おっ、おい何をって！」

俺は即行でＰｉｐ－Ｂｏｙ３０００からスティムパックを３つ取り出して、有無を言わさず足に突き刺す。ちょっと痛がってたが、そこはご愛敬だ。

「てめぇ！いきなり何すん……だ？」

「あ、あんた！足が！」

俺に怒鳴ろうとしたのか、思わず立ち上がったザックさん。するとあら不思議！右足が治ってるじゃないの！スティムパック何処まで出来るのさ!?十年前に切れた神経治すとかどんだけだよ！

「［ｍｅｄｉｃｉｎｅ］これで右足は治りましたが、怪我をしたのが十年前ということでまずは感覚や歩き方のリハビリをしばらくは行なって下さいね。調子に乗って現場で働くとかは論外ですので「あんたっ！」……」

「シエナっ！足が！足が治ったぞ！」

俺の治療後についての説明を無視して抱き合う熟年夫婦。気持ちはわかるが、話を聞いてくれ。なんか惨めだから。

「おい坊主！いや、コウヤ！何と礼を言ったら良いのか……」

「ありがとうコウヤ！あんたは最高だ！」

「ぐむっ！」

礼を言うと同時に、興奮気味にシエナさんに抱きつかれる。しかし、意外と筋肉質で力が半端無い……！しかもカウンター越しで体勢がおかしくなってるから余計痛いッ！しばらくして腕を何度か叩いて解放してもらったが、めちゃくちゃ苦しかったぞ……。

「げほっ、げほっ……と、とにかくさっき言ったように安静にしといて下さいね？思ってる以上に身体が動かないとか今なら普通ですから。職場直行とかしてまた同じようになりたくないでしょ？」

「任せときな！アタシが責任を持ってこの人を動かさないようにしとくよ！わかったねアンタ？」

「お、おぅ！肝に命じとくぜ……またシエナに怒鳴られるのはごめんだからな」

咳き込みながらも今度は説明に成功し、テンション上がりっぱなしのシエナさんに対して顔がひきつるザックさん。痛かったのを思い出したというより、シエナさんに当時よっぽど怒られたんだろうな。

「ハハハ、なら心配いらないですね。あ、何かあれば訪ねてきて下さ

い。今日と明日の朝は確実に公爵家にいますから」

「公爵家だって？何でまたそんなとこに？」

喋りながら食事を再開し、念のために居場所を伝えておく。案の定聞かれるが、これは素直に答えてもかまわないだろう。別に悪いことしたわけじゃないんだし。と、考えて昨日あったことを伝える。ヤオグアイのことは伏せといたが。

「とまぁこんな感じで、家に居させてもらってるんですよ」

「ほぉ！よくやった！公爵様はこの国で平民や他種族の差別を行わない一番の貴族だからな！あそこの豪邸は俺が造ったんだぜ？まだサテラ嬢ちゃんもこんなだった時で――」

ザックさんが思い出話に浸っているのを聞きながら、飯を食べていく。差別……か。ウエイストランドでも奴隷とかがあったが、ここでも適用されてるかもだな。封建社会というやつか。それに他種族……ファンタジーで言えばエルフとか獣人とかだろうか？ここに来てからは見てないが、ザックさんが言うからにはいるんだろう。他種族には会ってみたい。が、どちらにせよ気をつけるにこしたことはない。気づいたら奴隷商人に捕まってたとか嫌だし。

「ふぅ。ごちそうさまでした。俺はこれから買い物に行かなきゃいけないのでこれで失礼します。足についての事は先程言った事を守って下さいね。不安なら一度この国の医者に行ってもらえればいいですし。治療代は今度ここに来たときにサービスしてもらえれば十分ですからね」

「良いのかい？なら次に来たときにうんとサービスさせてもらうよ

！」

「おぉともよ！あとこの国に住む気になったら声かけな！最高の家を造ってやるからよ！それとだ、雑貨屋に行くなら儂の名前出してみな！サービスしてくれるからよ！」

食事を終えて立ち上がり、カウンターに飯の料金３０ギルを置く。公爵家を出た後にお世話になるかもだからな。しっかりとコネを作っておこう。しかし家か……まぁまずはこの世界を見て回りたいから後で考えるとするかな。拠点作りはその時だ。それにしてもサービスしてくれるとか……顔広いなぁ。

「しかし、ここに来てからまるっきり医者だな俺……」

飯・宿屋リーフレット――外に出てから看板を見た――から出てからポツリ。まだこちらに来て二日目だが、よくよく考えればあの盗賊討伐以外治療行為か診察しかしてない気が……？まぁいいか。

「雑貨屋は……と。ここか」

ちょっとの間人混みの中を歩き、ようやく着きましたよリーフレット雑貨店……あれ？リーフレット？

「いらっしゃい！」

疑問に思いながらも店の真ん前に突っ立っていては迷惑がかかるので中に入ると、凄く威勢のいい声が響く。店内は武器屋を少し小さくして一階のみの様な感じで、商品が綺麗に並んでいる。簡易食料や毒消し、傷薬等々いろいろと置いてある。声の聞こえた所に目を向ければ、カウンターに茶色の短髪で筋骨隆々のお兄さんがいた。紹介がある事伝えて、洗濯機の前に食料を適当に見繕ってもらおうか。

「あの、武器屋のマリネさんとザック・リーフレットさんの紹介で来たんですが」

「お？マリネちゃんと親父にか？マリネちゃんもだが、親父からたぁ珍しいな」

「親父？」

「おぅよ！俺はザック・リーフレットとシエナ・リーフレットの次男坊のブラッド・リーフレットだ！こんなナリだが、雑貨店の店長やってる。よろしくな！」

なんと、息子さんでしたか。しかも次男坊ということは長男さんが居るわけか。大工の方を継いでるのかな？しかし、親父さん似だなぁ。

「で？何でまた親父に？あの堅物がそうそう人に自分の名前出させる事は無いんだが……」

「あぁ、とりあえずシエナさんに気に入られたみたいで話してて、ザックさんが足を怪我してたので治しただけです」

「なにっ！」

「ぐえっ！」

事の次第を伝えたらまたもやカウンター越しに、今度は肩を揺さぶられる。く、首が……！この家の人達は力が強すぎる！

「親父の！足を！治しただとぅぅぅ!?お前店見てろよ！親父ぃぃぃぃ

！」

「ぐ……ぁ……」

一頻り俺を揺さぶった後に叫びながら店を飛び出すブラッドさん。たまらず俺は脳が揺れてカウンターに突っ伏す。残った店の客の同情の目が痛い……。

「馬鹿野郎！店をほっぽりだして来るたぁどういう了見だ！」

「だ、だってよ親父ぃ～」

しばらくして俺も回復してきた頃に、ブラッドさんがザックさんと共に戻ってくる。何でまた連れてきたんだろうか？ザックさんは一応歩いているが、ちょっとぎこちない。たまに躓きそうになっている。

「ザックさん、俺安静にしてろって言いませんでした？」

「堅いこと言うなよ。リハビリだ、リハビリ。それにこのバカ息子が飛んできたんでな。渇入れながら来たわけよ」

来たわけよって……まぁいいか。そんな遠くないし、ブラッドさんも一緒だったんだからな。一人で来てたらシバいているが。つかシエナさん任せろって言ってたじゃないか。

「ちなみにシエナの目を掻い潜ってきたぜ！」

そんな誇らしげに言われても……後で連れてくか。シエナさん店もあるから離れられないだろうし。ザックさんの気持ちはわからんでもないが、今後もありそうで怖いな。

「しっかしコウヤ！親父から聞いたぜ？パパッと治しちまったんだってな！どんな秘薬を使ったのかは気になるが、まぁいい！さぁ欲しいもの言ってみな！サービスしてやるからよ！」

俺の背中をバッシンバッシン叩きながら豪快に言うブラッドさん。それを横で更に豪快に笑いながら見ているザックさん。この親ありてこの子あり、だな……。

「えっと、水はあるんで食料と全体地図と周辺地図を。あと洗濯機と乾燥機っていくら位します？」

「洗濯機と乾燥機？旅人のあんたに必要なのか？ちょいとでかいぜ？」

「［ｓｐｅｅｃｈ８５％］大丈夫ですよ。俺力持ちなんで」

「［成功］まぁいいか……一つ白金貨一枚だ。二つ買うなら白金貨二枚だな。食料はどのくらい必要なんだ？」

多少強引だったために成功確率が下がったが、なんとか成功。それにしても白金貨二枚か……１０ｍｍピストル分が全部吹っ飛ぶな。まぁ今後も使い続けるし、便利なんだからここで買っといて損はない。いざという時食料は放射能汚染された物があるが、出来れば食べたくないから多めにするか。ガイガーカウンターがチキチキいって怖いんだわ。

「とりあえず一ヶ月分で」

「おぅ、わかった。地図代は無しだ。親父の治療代代わりとしてくれや。食料もちょいとおまけしとくからよ。俺の気持ちだ。受け取っ

てくれ」

「ありがとうございます」

ブラッドさんの中で勝手に話が進み、俺が遠慮する間もなく押しきられた。まぁ貰えるんなら貰っとこう。とりあえず頼んだのはいいが、金が足りるか……？

「これ全部ひっくるめて合計で……２２０００ギルだ。大丈夫か？」

「えぇ。サービスのお陰で安くついたので、大丈夫ですよ」

「ガハハハ！ま、ここまでするのは今回だけだがな？毎度してたら店が潰れちまう。毎度あり！ちょいと準備してくるから待ってな！」

俺が白金貨二枚と金貨二枚を渡すと、ブラッドさんが店の奥に入っていった。これで残り６３００ギル。これだけ買ってこんだけ残れば行幸だろう。買わなかったら食料で放射能が無いのはブンガフルーツ位だしな。あとは、どうやってこれらをＰｉｐ－Ｂｏｙ３０００に入れるかだが……ザックさんがいたらどうにも誤魔化せんな。

「アンタぁ！」

「うぉっ！シエナ⁉何でここに⁉」

「ディーンが帰ってきたから店番頼んだのさ！まったく、コウヤにまで迷惑かけて！さっき安静にしとけって言われたばかりだろう！」

後ろを向けば般若の如く怒り狂ってるシエナさんがのしのしやって来て激怒。なんて好都合……！ご都合主義万歳！でもめちゃくちゃ怖いです！

「よいしょっと。ん？どしたんだこれ？」

「あぁ……シエナさんが迎えに来たようで」

しばらくそれを見ていると、奥からブラッドさんがでかい袋を持って戻ってくる。そして説明開始。

「……なるほど。あの状態のお袋には近寄らん方がいい。とばっちりを食らいかねん。さて、食料はこれだ。袋に詰めといたからこれ「ブラッド！アンタが父ちゃんを連れ出したんだって!?」……な？」

「あ、あはは……」

説明を遮ってのシエナさんの檄。それにやけに悟った様子で俺の肩を叩いてくるブラッドさん。なんぞこれ？

「じゃあそこの扉を入ったとこに洗濯機と乾燥機があるから、取ってけ。お前まで巻き込まれかねんから裏口から出ていくように」

まるで戦場に向かうかのような背中を俺に見せて、ゆっくりとした動作でシエナさんの前に正座するブラッドさん。俺はそこに漢を見たね。

俺はその場でザックさんに敬礼してからそそくさと袋を持ち扉を開けて、買ったもの全てをＰｉｐ－Ｂｏｙ３０００に入れて裏口から出ていった。

余談だが、この後二時間近く説教が行われ、ブラッドさんとザックさんは燃え尽きたらしい。その間二人しかいない店の従業員はてんやわんやだったとか。

十話目

裏口から脱出してトコトコ進む。食料も手に入れたし、値段確認だけと思っていた洗濯機と乾燥機が買えたので今日一日は行幸と言えるだろう。しかも金残ってるし……あ！

「パワーアーマーの磨き油買い忘れた……」

ミスったー！このままじゃ汚れたままのやつを着続けるはめになる。どうせならこちらも綺麗にしたいんだが……Ｐｉｐ－Ｂｏｙ３０００のマップを見れば今進んでるのは公爵家方面だし、なんだかんだで昼食は少し遅めだったから日も傾いてきたからなぁ。雑貨店には戻れないし、武器屋は遠い。

「しゃあない、明日にするか……」

はぁ、とため息をついてそのまま路地裏を進んでいく。表通りよりも薄暗くて鼠とかもチョロチョロ走っていたりするが、Ｐｉｐ－Ｂｏｙ３０００のライトをつけてるので問題ない。だがそれで見つかったのか、目の前に立ちふさがるヤンキーっぽい奴ら。

「よぉ、兄ちゃん。俺達ちょいと金がたりねぇんだわ」

「運が悪かったな？有り金全部置いてったら無事で済むかもよ？」

顔にやたらとピアスを付けてこちらに下卑た笑いを向けてくる。普通の人ならビビるかもだが、生憎と力の差が歴然とし過ぎているためなんてことはない。というかウザイだけ。

「さっさと失せな、雑魚共が。頭に風穴開けられたいか？」

「て、てめぇ……！おい！こいつを叩きのめしちまえ！」

そんな事を考えていると、この身体のお陰か、はたまたスピーチスキルか、自然と口が相手を貶してました。いやぁ……あの便利スキルがここで牙を向くとは。敵が増えて全員襲いかかってきましたよ！

「死ねやぁぁぁ！」

索敵サーチで見て、合計で１０人。こんな細い路地裏で、しかも俺一人になんて数を出すかね？まぁ、素手で勝てますがっと、目の前に来る拳に合わせて

「ふんっ！」

「ぎゃあぁぁぁ!!う、腕がぁぁぁ!!」

その拳を殴る！すると力負けしたヤンキーの手の中の骨がぐちゃりと粉砕され、更には腕が勢いよく吹っ飛んであらぬ方向にネジ曲がる。こちとらスーパーミュータントと素手で戦える身体をしとんじゃい！中坊ヤンキーに負けるか！逆に負けたら怖いわ！

「ふっ！」

「がぁぁぁ！」

「のぉぉぉ！」

「ぐふぇっ」

動体センサーで位置を割り出し、避けては殴り、拳ごと殴り……

スーパーフルボッコタイムを繰り広げることしばし。最初の粉砕した奴を除いて全員の身体の一部に全治半年程度の怪我を負わせ、いいストレス発散になったと思いながらその場を去る。やり過ぎ？いやいや、身体と技術がウェイストランド流だから殺さなかっただけマシさ。というか身体が殺す流れに動いてたから気づいてよかった。これは力加減も兼ねて今後鍛練の必要有りだな。

「ふぅ、やっと着いたぞ」

考え方が身体のせいか、いい感じにウェイストランドに染まってきたなぁと考えながら移動して、公爵家に到着。手ぶらじゃ怪しまれるのでＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００からヤオグアイ用の果物セットを取り出しておく。そしてまずは門番の兄ちゃんに近づいた。一応客人ということでそういう態度を取られるが、道を教えてくれたいい人だ。

「あぁ、コウヤ様お帰りなさいませ……って、大丈夫ですか⁉」

「ん？」

何やら慌てる門番の兄ちゃんが俺の手を見ているのにつられて見てみると、なんと右手から血が滴ってるじゃないの……あのヤンキーのやつか？

「あぁ、これはちょっと路地裏で絡まれてね。返り討ちにしたんだ。心配ないよ？」

手を一度ブンッと振って血を落とし、爽やかでいて世間話をするようににこやかに答える。ハッハッハ、なんてことはないさ！

「そ、そうですか。で、では門を開けますので少しお待ちを」

何故だか顔を青ざめさせて去っていき、門を開ける門番の兄ちゃん。はて？そんな怖いこと言っただろうか？それとも風邪か？まぁ開いたし通るか。

「おいおい、血が滴る程の返り討ちってなんだよ……」

「盗賊六人を瞬時に片付けた人だからな……その絡んだ奴等に同情するぜ」

俺が過ぎ去ってからそんな会話がされたらしいが、遠ざかった俺には聞こえなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「あ、コウヤさん。お帰りなさい」

「お帰りなさいコウヤさん」

「ガウッ」

門を過ぎて玄関まで進めば、声をかけてくれるサテラとサーシャさん。そしてその二人に撫でられまくって気持ちよさげにしているヤオグアイ。完璧にペットになってやがる……！

「只今戻りました……サテラ、レオナルドは？」

「レオナルドは今部屋で休んでいます。あの後医者が来たのですが、貧血と過労とだけ言われました。やっぱりコウヤさんの見立てに狂いは無かったですね！」

「まぁ前の状態を見ないとそれしかわからないよなぁ」

怪我や内出血はスティムパックで完全に治ってるし、意識もしっかりとある。動けないのは多少疑問が出るだろうが、特別外傷を負ってるわけじゃないので過労や貧血に収めるしかない。ま、何にせよ今はしっかりと食って血を作るのみだ。

「話は終わりました？さて、コウヤさんも帰ってきた事ですし、そろそろ食事の準備をさせましょうか。サテラ、行きますよ。コウヤさんもいろいろと準備があるでしょうが、早めに来てくださいね？」

「はい」

「わかりました」

サーシャさんがそう言ってサテラと共に一度ヤオグアイを一撫でしてから中に入っていく。それを見送って、俺はＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００からヤオグアイに飯を出す。今度は謎の肉だ。まぁ奇妙な肉と一緒で人肉なんだけど。

「言ってたやつは買ってきたからさ。明日、お前を送り届けるからな？男としてきっちり奥さんと話つけてこいよ？」

「ウゥゥゥ……ガウッ！」

「よし！お前なら出来る！じゃ、明日の夜出発な！」

「ガウッ！」

元気な返事を聞いて満足してから公爵家に入る。そして自分に用意された部屋に戻って偽装の為に果物を置き、パワーアーマー等がちゃんとあるのを確認して食事の部屋に向かった。ヤオグアイの移動を夜にしたのは人目を出来るだけ避けるためである。まぁ昼の間に買い忘れた磨き油を買いたいってのもあるんだけどさ。

「今日の買い物はちゃんと欲しいものが買えたかね？」

「はい、お陰様で。食料も無事調達出来ましたし、ヤオグアイ用の果物も手に入れました。まぁ買い忘れも有りましたが、明日昼に買いに行くつもりです」

レオナルドが動けないのでサーシャさんとライルさんとで食事を開始し、今日の事について報告。飯がヤバイくらい美味いです。

「そうか。それでは……」

「はい。明日の夜にヤオグアイを連れてここを出ます。お世話になりました」

食事を一旦止めて深々と頭を下げる。いやはや、恩人という形にはなったが見ず知らずの他人をこうしてもてなしてくれたのは凄く嬉しかった。感謝感謝です。

「頭を上げてくれ。感謝するのはこちらなのだからな。それにザックの足も治したそうじゃないか。街のゴロツキ共も魔法を使うから憲兵達が手を焼いていた者達だったようだし、君が来てからこちらは感謝しかしておらんのだ」

流石公爵家、仕事が早い！ゴロツキ共は俺が言った門番さん経由だろうが、ザックさんの事がきっちり耳に入ってるみたいだ。というか奴等は魔法使えたのか……なんか口をモゴモゴしてるうちに殴り飛ばしたからわかんなかったな。ハハハ、カルマが上がりまくりだ。

「そうよ。この国の貴族をやってるこちらとしては、もう少しもてなせればよかったんだけどね」

「あぁ、全くだ。馬車か何かを渡せればよかったんだが……この間壊れたのが最後でな。出来るのには5日ほどかかるようでどうにもならなかった。すまないな」

「いえ、こちらとしては温かいベッドで寝れて、風呂に入れて、美味い飯が食えただけで十分過ぎるほどですよ」

これホント。これに加えて馬車もらったりしたら、過剰謝礼だ。こういうことはきっちり分けないとな。俺はもらえるものはもらうタチだが、金までもらってるからこれ以上はだめだ。それに馬車なんて使い方わかんないし。

「そうか……ならば明日の夜まで精一杯もてなそう」

「ありがとうございます」

再度お礼を言って食事を再開。その際にやっぱりサーシャさんにヤオグアイについて聞かれたので答える。俺が知っていることだけになるが、ギルドでも情報が無かったんだからまぁ驚かれました。

「――と、まぁこんな感じですね。あと、あのヤオグアイは特別性格が温和だっただけですので、他のヤオグアイには近づかないように。即

行で食い殺されます」

「へぇ～……コウヤさんって博識なのね！」

「いや、博識というレベルを越えているのだが……国の学者共ですら知らないはずだぞ」

やべっ、調子にのってミスったか？ライルさんが仕事の顔になってる……。

「もうっ、そんなことはいいじゃないですかあなた」

「……まぁ、そうだな。すまない」

「いえ」

冷や汗をかきつつその後少しの間話し込み、昨日の様に風呂に入ってから今後はああいうヘマはしないようにしないとなぁと思いながら寝た。

十一話目

翌日。俺は朝飯をもらって少し話をしてから街に出ていった。昨日の道筋はＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００に記録されているため、今回はあえて別の道を通ってみる。遠回りになるが、今日でしばらく見納めになるんだから思いで作りみたいなもんだ。

「ん？……『グリノリィ鍛冶店』？」

大通りから少し逸れ、店の並びが少ない所にポツンと建っている一軒の店。少し広めに土地を取っていて、看板のかかっている店の後ろにあるもうもうと煙突から煙がたっているのが作業場だろう。

「ふむ……初めて見るな」

感嘆しつつそこから目を離して、入口に立て掛けられている宣伝用の看板を見る。そこには販売している武器防具等の名前がズラリと並んで、一言コメントも書いてあった。

『武器防具の修理、販売、作成、なんなりとお申し付け下さい！そして当店ではアクセサリーの修理、販売、作成も承っております！自分だけのオリジナルのアクセサリーはいかがですか？』

「アクセサリー……ねぇ」

それを読んでふと頭によぎるのはギルドの受付のミリア。ＬａｄｙＫｉｌｌｅｒのお詫びをしとくか……。幸いＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００にはエイリアンのＵＦＯから奪った宝石、エイリアン・クリスタルが大きい赤とそれより少し小さめな緑がいくつかある。これはゲーム内でもそんなに取れなかったから数は少ないが、まぁ緑の方な

ら加工すればネックレスかブレスレットにする事は出来るだろう。赤は拳大位あってでかすぎるからな。

「ポケットに……三つ入れとくか」

俺はＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００を弄ってエイリアン・クリスタル（小）を取り出す。つまりは緑の方なんだが、三つ出したのは金を出来れば残しておきたかったからだ。金の代わりに一個渡せば足りるだろうが、念のため出しておき店に入った。

「いらっしゃいませ！」

扉を開けると取り付けられていたベルが鳴り、商品を磨いていた女性店員がハキハキした声で振り返る。量は少ないが質の良さそうな武具がズラリと並び、アクセサリー専用のコーナーもある。こりゃ良いとこ来たかな？

「これをネックレスに加工してもらいたいんですが……」

「あ、はい。ちょっと見せてもらいますね～」

俺はその子にクリスタルを渡すと、彼女は小さな筒を取り出してじっくりと見始める。恐らく鑑定用の物だろう。

茶色い髪をバッサリと切っている彼女は見た限りではまだ顔に幼さが残っていて、実際１４、５歳だろう。だがその目は職人、プロの目である。俺がそうやって見ていると、彼女はへぇ、と感嘆した声をあげた。

「これは凄いですね。純度から何までかなり高いし、金で周りをグルッと囲んでるのも中々……そうそうお目にかかれない良い宝石で

す。こちらをネックレスにするんですね？」

「ええ。お願いします。代金の方はこれで足りますか？」

俺は一つクリスタルを取り出して彼女に見せる。まぁあの大きさならアミュレットになるかもだが、加工する手間賃を合わせて足りればいいが。

「大丈夫ですよ。むしろお釣りがくる位ですが……」

マジか。でもクリスタルは換金以外には使わないし、金はギルドで稼げるからなぁ……あ、磨き油とそれ用の布を付けてもらうか。

「じゃあ鎧用の磨き油と布、それと出来上がったら宅配してもらえますか？」

「宅配、ですか？」

俺は彼女にクリスタルを渡して頷く。俺は今日でここをしばらく離れるからな。釣りがくるならお願いしといていいだろ。

「はい。ギルドの受付のミリア・カールという女性に。この間お世話になったのでね」

「あら、ミリアちゃんにですか？ふふ、ハードル高いですよ？」

お世話になったと言っているにも関わらずカラカラ笑いながら勘違いする知り合いっぽい彼女。まぁ確かに美少女であったし、フラグが立てばガッツポーズものだがさ。ってかやっぱりそういう風に見られるか……ならちょっとノってみるか。レオナルドには悪いがね。

「ハハハ、ハードルが高くても越えるまでですよ……なんて、言っても今日でここをしばらく離れますが」

「残念。しばらく話に事欠かないと思ったのに」

そう軽口を叩きながらも作業を開始する彼女。すでに二つのクリスタルをカウンターに置いて、磨き油と布を棚から引っ張り出している。

「はい、これですね。磨き油が三つとそれ用の布が六枚です。宅配は出来上がり次第で？あとお釣りです」

「えぇ、お願いします。お釣りは手間賃で取っておいて下さい」

「じゃあ貰っておきますねぇ～」

ペンキ缶の様な大きさの丸い磨き油と白い他とは違うちょっとゴツめの布が置かれたのを重ねたりしてまとめて、返事をする。お釣りは銀貨六枚だったが、言うや否や即行で引き戻された。手間賃で、の部分でもう動いてたな……流石商人。

そう思いながら、デザインは俺のセンスが無いので彼女に一任することにして俺は磨き油と布を抱えて店を出た。即座にＰｉｐ－Ｂｏｙ３０００に入れたのは言うまでもないだろう。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

あれから特にやることも無くなった俺は公爵家に戻り、部屋で洗濯機と乾燥機を出していた。勿論、今のうちに洗濯しときたいからだ。

「えっと……上手く洗えるかわからんが、まぁいけるか」

大きさは両方共に１ｍ２０ｃｍ程で、ドラム式。魔法石で動いているので機械を入れていないから容量も少し多くなっていた。金属製のそれらの上部には洗濯機には青色の宝石、乾燥機には緑色の宝石がつけられており、これが魔法石とやらだろう。そのすぐ下には小型の時間表示のディスプレイと開始と停止のボタンがついていた。

俺はそれに変な感じを覚えつつ、Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００からＣＮＤ（コンディション・耐久値）最大の傭兵服アドベンチャーと傭兵服チャーム、傭兵服トラブルメーカー、ウェイストランドレジェンドの服、トレーダーの服をぶちこんでスイッチオン。すると不思議な事にどこからともなく水が出てきて普通に洗濯しだした。

「なんとまぁ……魔法ってば便利なもんだな。それに２０分しかかからないのか」

無駄にそこだけハイテクなディスプレイに表示されているのは２０の数字。排水とかどうしてるんだとめちゃくちゃ思うが、そこら辺は魔法だからということだろうと自己完結。深く考えても進まないしね。

その間に俺は落ち着いて見ていなかったＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００を弄って中身確認。ラジオが聞けないのは勿論のこと、他にもゲーム内でやっていたクエストは全て消去。マップも切り替わり、メモも神様からの手紙とギルドでの魔物と化け物情報以外には無い。手持ち

のアイテムは無駄に集めまくったゴミみたいなのもあり得ない位所持している。水はきれいな水とアクア・ピューラ、ヌカ・コーラがあるので問題なし。ヌカ・コーラは1RADしか上がらないから気兼ねなく飲める。

現に今飲んでるんだが普通に美味い。ウェイストランドにヌカ・コーラが普及してた理由がよくわかる。流石にヌカ・コーラクアンタムには怖くて手をつけられないが……だってあれは放射能を直のみしてるもんなんだからな。飲んだ後に尿が光るらしい。

「お？終わったか」

飲んでいたヌカ・コーラを置いて洗濯機から中身を出す。うん。大丈夫だ。あとは同じ作りの乾燥機に入れて、再び開始。その際に同じまだ持ってる服を洗濯機に入れておく。傭兵服シリーズはレギュレーター・ロングコートと同じくここの世界じゃ別段不思議がられない服装だから今のうちに準備しとかないと。それほどひどく汚れている訳じゃないが、今までそういうのを着て過ごすことはまず無い生活だったのでなんか嫌だからな。

「あ、パワー・アーマー磨かないと……」

そういえばと思い出した俺は、せっせとパワー・アーマーシリーズを順番に磨くのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「もう、行くのかい？」

「あぁ……ライルさん、サーシャさん。お世話になりました」

時間は飛んで一気に深夜。俺はヤオグアイと一緒に公爵家一家とレオナルドに見送られる形で門の前に立っていた。時間が経つのが早いのは気にしないでほしい。ちなみに今俺はここに来たときと同じ装備で綺麗になったパワー・アーマーを着込み、ヤオグアイには果物の籠を持たせている。なるたけ怪しまれない様にしたいからな。

「いや、こちらとしてはもう少しもてなしてやれればよかったんだがな……」

「ホント、それにヤオグアイちゃんと会えなくなるのは寂しいわ」

「ハハハ、ありがとうございます」

サーシャさんが他のヤオグアイに突撃しないかひどく心配になりながら、もう何度目になるかのやりとりをし、俺は二人に頭を下げてサテラとレオナルドに向き直る。時間は短かったが、思えばこちらの世界での初めての同年代の友人になるからな。

「コウヤ、しつこい様だが改めて礼を言わせてくれ。ありがとう」

「またバルムンクにいらっしゃる事があれば立ち寄って下さいね？」

「あぁ。その時はまた、顔を出すとするよ。そうだ、結婚式には是非とも呼んでくれよ？」

「コ、コウヤ！」

「ふふふっ、勿論です」

別れの挨拶がてらからかうと、顔を赤くするレオナルドと同じく顔を赤くしているが素直に頷くサテラ。うぅむ……何か吹っ切れた感じが否めないな。やっぱり俺のせい？

「では、また会う日まで」

「ガルル」

そして二、三言話してから、特別に開けてもらった門をくぐって俺達は外に出た。さらばバルムンク！そしてようこそ未知なる世界！

十二話目

あれから外に出て一晩過ごし、森に向かって進んでいった。ぶっちゃけた話、この身体は食事と水さえあれば一週間はぶっ続けで歩いていけるんだが、そこは元が俺だからということで。

「なんとも短い旅だったが……ここでお別れだな」

「ガゥ……」

そして魔物とかもヤオグアイのおかげで出てくる事なくトコトコ進み、ベルドアの森に到着。森の入口で別れるためにヤオグアイにそう告げると、頭を下げて悲しそうな鳴き声を出す。俺としても短い間だったが楽しかったし愛着沸いたが……こいつには家族がいるからな。

「そう悲しそうにするな。生きてればまた会えるさ。ほれ、これが頼まれてた分だ」

俺はヤオグアイの頭を一撫でしてＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００から野球のボールをヤオグアイがくわえている果物の籠に入れる。少し大きめの籠なのですんなり入った。

「また会おう。今度近くに来たら寄ってみるから、その時は見つけてくれな？」

「ガゥ！」

俺がそう言ってヤオグアイの背中をポンッと叩くと、ノソノソと歩き始める。そして森の中に入っていく直前に、こちらに一鳴きしてか

ら森に駆けていった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「さて……これで初依頼は終了、か。次は何処に行こうかね？」

俺は肩に掛けて結局使わなかったクサンロング・アサルトライフルをＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００に入れ、代わりにパフォレーターを出す。これはサプレッサー付きのアサルトライフルで遺物という特性上、銃声を常に響き渡らせるのは良くないと思ったからだ。そして．４４口径スコープ付きマグナムも装弾数の面から見て消音器付き１０ｍｍピストルに変えた。まぁ足に付けたままのブラック・ホークについては攻撃力というのもあるが、俺の趣味というのがでかいがね。

「えっと……ここから近い所は、っと」

Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００を起動して地図を買ったために更新されたのを確認して、周辺地図の方を見る。現在地は『ベルドアの森』。その前に俺の位置を示すマーカーがあり、後ろにはバルムンクが記されている。ざっと見た限りでも周辺には村や街が点在しているのがわかる。更に言えば、このままっすぐ行き続ければ国境を越えてヴィシュニア帝国があり、東にいくつか村や街を越えればフェルナンド魔法学院都市、かなり遠くて一切村などがないが西に行けばメガトンが……ってメガトン!?

「ふむ、まだ残ってたのか？」

声にはやっぱり出ないが、心臓バクバクでめちゃくちゃ興奮してる。まさかまだちゃんと残ってるとは……！

メガトン……それは原作にて主人公がキャピタル・ウェイストランドに出て最初に行き着く街だ。元は主人公のいたＶａｕｌｔ１０１に行けなかった人達が集落を作った事から始まる。街の中心に核爆弾の不発弾があるため、皮肉もこめてメガトンだ。これはある程度集落と化した時には不発弾を中心にして広がってしまったために取り除けなくなり、更には解除も出来る人がいなかったというのも挙げられる。

ゲーム内では、安全、食事、水、住居もあり、少し住民本位だが素晴らしい場所だった。しかもゲーム内で核爆弾は解除だけはしているので、ロケットランチャーやヌカ・ランチャー（小型核弾頭発射装置）をぶちこまない限りはそれに関して言えば大丈夫な場所である。俺、というか主人公の家は流石に無いだろうが……キャラ達の子孫とかがいるんだろうか？めちゃくちゃ気になる！

「でも、遠すぎるな……」

思わずため息が出てしまうが、本当にそうなのだからタチが悪い。ここから行けば間に村も何もないために危険がかなり増すだろう。それに食糧面でも確実に足らなくなる距離だ。徒歩で俺の足だと１ヶ月以上はかかるだろう。放射能汚染されたものを食うのも別に大丈夫なんだが、俺的には風呂に入れないのが死活問題となる。一週間程度なら耐えられるだろうけど、それ以上はちょっとまだ……元来の風呂好きも相まってこの世界では未だ現代人思考の外れていないのは少し考えないといけないが、こればっかりは譲れん！

「なら、距離的に見てもフェルナンド魔法学院都市か？」

一番近いのがそれで、帝国は少しばかり遠い。しかもフェルナンドから帝国に回っていった方がやや近いのだ。まずはそこに行って食料を補充し、そこのギルドで何か護衛とかの帝国行きの依頼でも受ければより早く付けるだろう。道中魔物も出るだろうからそれの素材を売りさばけば金もなんとかなるし。それに魔法というのを少し学んでくるのもいいかもしれない。メガトンを後回しにしてしまうのは後ろ髪が引かれる思いではあるけど、冷静に考えればそもそも身体は別にして旅の初心者たる俺がそんな長距離を歩いて行くのは愚の骨頂なので頭を切り替える。

「よし、まずは東だ！」

自分を鼓舞する意味も込めて声を出し、マップにある方角を見る。進む方向は森の影響か、岩山と草原が広がっていた。そして途中何か出てくるだろうことは明らかなので、パフォレーターを両手に持ち、俺は気を引き締めて足を進めていった。

十三話目

あれからトコトコと進む事しばし。未だ手にはパフォレーターを持ちつつも、何が現れるでもなく順調に進んでいった。

そこで思った事は、やっぱりこのは身体凄いということ。パワーアーマーフル装備に加えて両足に銃をぶら下げて、更にはアサルトライフルと同系統のパフォレーターを持ったまま小走りで舗装も何もされてない道を行き続けるなんて軍隊の人でもキツイはずだ。しかも俺はまだまだ全然余裕があるんだから、もう凄いとしか言いようがないです。

「……ん？」

そんな事を考えながらペースを落とさずに進んでいると、動体センサーに幾つか敵性反応が出る。そして俺はそれらに見つかる訳にはいかないので身を屈めてしゃがみながら進む。これで俺はスキルによって敵に見つかりにくくなったはずだ。しかもスニーク・ランニングというＰｅｒｋｓによって、この状態で小走りになっても足音がたつことはない。まずはどんな敵なのかを見るべきだからな。

「あれは……」

少し進み、敵が目視できる所まで迫ってきた所で岩があったのでそこに身を隠しつつ様子を見ると、少し大きめの犬みたいなのを数匹発見する。向こうはこちらに気付いていないので、Ｐｉｐ－Ｂｏｙ３００で情報を確認すると。

『ワイルドドッグ：世界で最もよく見かけるとされる魔物。黒い大型犬の様な風貌でギルドでもランクが下ということもあって軽視され

がちだが、犬よりも優れた知能と力を持つために一般人には討伐は難しい。防御面では普通の犬と変わらないものの、その牙は動物の皮の防具程度ならば容易く噛みちぎる。

ワイルドドッグは基本的に群れを成して行動する。単体ではさほど問題ないが、群れを成すことで危険度は何倍にも膨れ上がる。大きいものではリーダー格の存在が確認されているため、初心者には最初の難関になるだろう。しかしその毛皮と牙はギルドランクの低い間は貴重な収入源として重宝される。ギルドとしても、これらの素材は常時必要なので、是非とも頑張ってもらいたい。

報酬部位：毛皮×１＝５ギル　牙×１＝２ギル

常時討伐対象也』

情報を確認してＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００から目を離す。未だこちらは見つかってはいない。周囲を注意して見ても、動体センサーにはワイルドドッグ以外感知されないのでそちらに集中出来る。俺はゆっくりと岩陰から少し身体を出して、パフォレーターを構える。改めて見てみると、数は５匹。目視とセンサー両方で確認したので間違いない。

今回俺はＶ．Ａ．Ｔ．Ｓ．を使う気はない。Ｖ．Ａ．Ｔ．Ｓ．は便利だが、外したり仕留めきれなかったりしてポイントが無くなれば使えなくなるからな。経験や技能は身体に染み込んでいるものの、俺としての射撃を経験しとくのも悪くない。パフォレーターはフルオートだが、素早く引き金を戻す事で発射する弾数を少なく出来る。なので俺はパフォレーターをボケッと突っ立っているワイルドドッグの頭に標準を合わせて、引き金を引いた。

「ギャウンッ！」

一体目の頭に無事クリティカルヒットしたのを見て即座に照準を切り替える。少し距離があるのでほんの少しばかり先をずらすだけでいい。俺は騒ぎだした近場の奴らを二匹目、三匹目と決定していき、乾いた音と共に頭をぶち抜いていく。

「ギャンッ」

「キャウンッ」

「ガッ」

次々に片付けていき、四匹目の脳髄をぶちまけていく。我ながらナイスショットだ。しかし、なんとまぁ柔らかいことで。大概一発でなんとかなってるな。

「ワォォォンッ!!」

「ちっ、バレたか」

しかし最後の一匹というところで場所を知られてしまった。俺は愚痴を溢しつつも冷静に銃身をずらしてまっすぐに駆けてくるワイルドドッグのこめかみに照準を合わす。流石にこの位のレベルの奴だと、銃がどういう攻撃をしてくるのかわからないようだ。Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００の情報を見れば初心者の登竜門的な事が書いてあったから、剣とかは避けたりするんだろうがね。

「じゃあな」

パスパスパスッ、という軽く乾いた音と共にワイルドドッグの頭が血を撒き散らしながら縦に潰れる。俺は一応周りを動体センサーで

確認するが、何もない。

「ふぅ……ま、こんなもんかね？」

多少先が熱を帯びているがＣＮＤに影響の無い事を確認してパフォレーターを背中に背負い、倒れたワイルドドッグに近づいていく。

頭をぶち抜いているために目玉が飛び出て辺りに血と脳みそが散らばっている。やっぱりフルオートなためにどうしても数発出てしまう時があるんだが、今回こいつの時のみそうだった。そのせいで頭のみ大変な事になっている。まぁ銃器に対する耐性が無いタイプだし、ゲームのスカベンジャードッグ位でもなければこうなるか。

「さて、どう取れるか……」

そんな事を考えながら素材を取るためにＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００を起動。見てみると、選択肢にワイルドドッグの毛皮とワイルドドッグの牙、あとはやっぱりドッグミートが表示される。しかしこのドッグミートには放射能汚染が無いタイプなので、焼けば食えるだろうから取っておこう。

「うっ……こうなるのか、やっぱり」

Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００で全て取るを選択すると、やっぱりゲームと現実は違うわけで。毛皮部分と牙を根こそぎマルッと取って、一部の肉が無い状態のワイルドドッグがいきなし目の前に……エグイっす！

「まぁ、仕方ないか……」

これもお金と食事のためだ、とワイルドドッグに感謝して次々に部位を剥いでいく。５匹殺すと３５ギルか……本当に初心者仕様だな。ギルドからすればチュートリアル的存在だろう。もっとも、ここで死ぬやつもいるようだがね。

「うし、次いくか」

声を出し、Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００のマップを見て進みだす。ついでに小腹が空いたのでヘルメットを外し、雑貨店で買った食糧の干し肉を出して食べる。ここで言っておくと、あの雑貨店で買った食糧は干し肉しか入っていなかった。いや、長持ちするのはわかるが、栄養バランスどうするか……放射能汚染が無いとなると、果物で放射能を下げる効果のあるブンガフルーツしかないんだが。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

それから二日程進んでいくと、ようやく初めの村が見えた。俺は即座にＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００を起動して、パワーアーマーから傭兵服チャームに着替える。パフォレーターも村では邪魔なので入れておく。一応ね。

ここまで来るのにワイルドドッグを合計１５匹とブロードフライを８匹狩った。ブロードフライは身体が小さいから狙いにくくて大変だった……まぁ胴体を貫いてやったがね！あと、ブロードフライの羽（３ギル）もしっかり手に入れた。これは両羽ペアで一組らしい。

「到着、と」

装備を切り替えた位に村に到着。Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００のマップによれば『ボルドー村』だそうだ。まぁざっと見た感じ、特に目立った所はないな。少し綺麗な普通の農村ってとこだろう。

「ギルドは……ここか」

村に入ってトコトコ進み、ギルドの看板を発見。バルムンクのギルドよりはかなり小さいが、そこそこ繁盛しているようだ。ちなみに道中の出店で１２０ｃｍ程度の縦長の革袋（１５ギル）を買った。Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００を使って目の前で出す訳にもいかないからな。とりあえず袋に手を突っ込んで報酬部位を入れといた。

「おーい！酒まだかぁ～？」

「はい！ただいまー！」

袋を背負って中に入ると、料理と酒の匂いがたちこめてくる。ガヤガヤとした喧騒も特に気にならない程度で落ち着いている。どうやらこの村のギルドは酒場も兼ねているようだ。

「これ、常時討伐依頼として換金お願いします」

「あ、はーい。わかりました。少し待ってくださいね」

俺はそんな店内を歩き、ギルド受付の女性に袋とギルドカードを渡す。すると彼女はギルドカードを横に置いてある水晶に翳してから袋を開いた。

「コウヤ・キサラギ様ですね。これでポイントが溜まりました。あとは部位ですが……っと、これは凄い綺麗に取りましたね。中々こうまで綺麗なのはないんですよ？」

「まぁ、生まれつき手先が器用なもので」

めちゃくちゃ綺麗に剥ぎ取った毛皮や羽を見て心底驚いた様に口を開く受付さん。適当に誤魔化したが、剣とか魔法とかなら普通何らかの傷や痛みが出るからな……まぁ大丈夫だろう。向こうも綺麗に剥ぎ取れてて文句は無いだろうし。

「えっと、これが報酬の１２９ギルです。それと常時討伐依頼は今回ので二つ達成ということになりましたが、再度受注されますか？」

「お願いします」

報酬を受け取って依頼の続行を告げると、受付さんは手早く水晶を使ってカードに登録を済ませる。何やら弄ってるみたいだが、どういう仕組みか魔法を知らない俺にはさっぱりだ。これについても学院都市に着いたら調べてみるか……この受付さんに聞くのも有りだろうが、もしこれらの動作が世間一般での常識中の常識なんて事になったら目も当てられんからな。ここでは魔法が主流なんだからあり得ない話ではない。

「はい。ではこれで登録されましたので、頑張って下さいね」

ギルドカードを返されたので、俺は礼を言ってから受付から離れる。向かうは依頼の張り出されている掲示板だ。ここで学院都市行きの護衛や配達依頼を受けられればいいんだが……そうすれば向こうに着くなり金も入るから色々と安心出来る。

「ん～……無い、か」

時間が少し経って人が増えたために強くなった喧騒を聞き流して掲示板を見るが、希望の依頼は無かった。有るのはバルムンク行きの物が大半で、他は帝国行きや周辺の村へのお使い程度の依頼だけ。俺としてはバルムンクは勿論のこと、魔法をよく知っときたいから帝国行きはダメだ。となると、周辺の村への配達しか残ってない。

「ベガルタへの荷物の配達、報酬３００ギル……これでいいか」

Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００のマップと照らし合わせながら見て、方向の合致したその依頼の紙を取って受付に戻って紙を渡す。Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００にはベガルタとだけ書かれているからよくわからないが、まぁ着いてギルドに荷物渡すだけだ。Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００もあるし、なんとかなるだろ。

「この依頼ですね……はい。これでカードに登録されました。荷物はこちらです。荷物を破損、紛失した場合は依頼の失敗による罰金及び荷物の料金と慰謝料が請求されますのでご注意下さい。あ、あとは勝手に中身を見ないこと。その場合もきっちり罰金取りますからね」

「りょ、了解です」

どこからともなく引っ張り出された５０ｃｍ四方の四角い箱と共ににこやかに言われた注意に思わず口元がひきつるのを感じながらも返事を返す。簡単な仕事だと思ってたけど、罰則やべぇな。当たり前っちゃ当たり前だが、こうなった俺はしょうがないと思う。

そしてそれを受け取って抱えながらギルドから出る。そして即行で人目の無い所に行ってＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００に入れたのは言うまでもない。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

それからしばらく宿探しと食糧買い込みをし続けた。食糧は野菜と果物を買い込んだ。あとは調味料を少しづつ。合計で１２００ギル程で、ざっと見ても２ヶ月は保つだろう。

それというのも俺が出店や雑貨店を次々練り歩き、Ｂａｒｔｅｒスキルとｓｐｅｅｃｈスキルを駆使して値切りまくったからだ。多少傷のある物だったり、量を買うから安くしろとか言ってみたりでなんとも大収穫。まぁその代わりに恐らくこの村で買い物がもう出来ないかもだが、来ることも無いだろうから大丈夫なはずだ。なのでそそくさと見つけた宿に向かうことにする。

「いらっしゃい」

中に入ると一階は軽い酒場の様になっていて、階段が見えた。二階が部屋になるんだろう。木造でしっかりとした造りの店だ。

「泊まりかい？」

「えぇ。夕飯と朝食、あと風呂付きでお願いします」

ここの宿はメニューで追加式になっていたので泊まるだけの基本

にそれらを追加して頼む。料金は１２０ギルだ。

「あいよ。これが部屋の鍵だ。飯の時間はすぐだが、どうする？」

「ならお願いします。少ししたら降りてきますね」

その後俺は即行で夕飯を済ませて風呂に入った。なんとも言えない清々しい気分だったと言っておこう。そして風呂から出た俺は、すぐにベッドにダイブして眠りについた。

十四話目

そして次の日。朝食を済ませた後すぐに村を出た俺は防具をパワーアーマーに切り替えてパフォレーターを取り出していた。ベガルタまではＰｉｐ－Ｂｏｙ３０００を見る限りそんなに遠くないのですぐにつくだろうが、油断は禁物だ。

「……ん？」

そしてしばらく小走りで進んでいくと動体センサーに反応が出てくる。少し距離があり、目視で確認も出来ない。その周辺を見てみれば少し大きめな岩がいくつかあるのでそこにいるんだろう。俺は一旦パフォレーターを背中に担ぎ、ブラックホークを抜く。鉢合わせになってしまったらこちらの方が小回りが効くからな。

「さぁて、何が出るかな？」

俺はブラックホークを両手で持ち、静かに進んでいった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

それからしばし。バレないようにゆっくりと身を屈めスニークランニングのＰｅｒｋｓを使ってその岩場まで進んでいくのに成功した。うん。したにはしたんだ。

「……」

「……」

岩影に一度背を向けて岩越しに向こうを見れば、丁度こちらに向き直っていた、ヤツ。やや濃いめの肌色の筋肉質な肌に鋭い爪、悪魔を彷彿させる顔つき、尖った牙に前にせり出している短めの角、そして小さな棘つきの尻尾とくれば――

「……グルルァ」

「――何でこんな所で、デスクロー？」

愚痴が溢れながらも互いに動かずにらみ合い。向こうからすれば、俺はまさに飛んで火に入る夏の虫といった所だろう。みすみす食われてやるつもりは無いが……パワーアーマーもコイツの前じゃ心許ないぞ。

「グルルァァァッ!!」

「ちぃっ!!」

どうやら向こうさんは短期なようで、俺の頭の中が一段落した瞬間にこちらに駆けてくる、って速いッ!?

「ガァァァッ！」

「うおっ!?」

一気に距離を積めてきたデスクローに、俺は即座に身体を起こして

ブラックホークを構えようとするが、向こうの方が速く、すでに目の前まで来られてしまい、爪で斬りかかってくる。それを俺はのけ反る事で回避し、横に飛んで距離を取ろうとする。

「って連撃はキツイ！」

しかしデスクローは腕を振って勢いをそのままに身体を回転させて尻尾を振ってくる。それも何とか四つん這いから獣の様に飛んで回避する。それと同時に二発デスクローの胴体に撃ち込んでやる。

「ガァァァッ!?」

当たり所を見れば弾が腹筋を抉るだけに止まっており、致命傷には程遠い。しかし恐らくこの世界ではろくに傷つくということが無かったんだろう。めちゃくちゃ驚いている。まぁ通常の魔物程度じゃあ傷付きもしないし、魔法も効きづらいらしいからなコイツは。

「オォォォォッ!!」

我ながら恥ずかしい雄叫びを上げながら次々にブラックホークを撃ち込んでいく。あの厄介な機動力を奪うために足に風穴を開けて、リロード。時折それでも攻撃してくるのを避け、それをなんとかするために両肩をぶち抜き、リロード。そして俺は動けなくなったデスクローに近づき。

「お前は運が悪かったと同時に、相手が悪かったな」

――ドンッ

ブラックホーク特有の重量感ある発砲音と共に、ド近距離で頭を撃ち抜いた。見事に脳天に風穴が空いている。流石に後頭部は弾けと

んだ脳みそで散らかってるが、少しアーマーに血がついた程度で何て事はない。

「勝てた、か……」

はぁぁぁ、と盛大に息をついて座り込む。いや、正直威圧感が半端なかった。ゲームでも色んな意味で怖かったのに、現実になれば尚更だった。途中で痛みに怯んでくれなかったらどうなってたことやら……まったく、せっかくのこの身体を上手く使いきれていないな。次にどう動けば容易く倒せるかが理解は出来ても行動に移せなかった。要練習だな。

「さて、剥ぎ取り剥ぎ取り」

一人脳内反省会を終えてＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００を起動。デスクローに近づいて剥ぎ取りだ。ぶっちゃけギルドカードの記録機能でギルドで何か言われるだろうが、仕方がない。まだ静かに放浪の旅をしたかったんだがな……こうなりゃ遺物使いとしてのしあがってみるか？ある程度の魔物と化け物専門の。

「えっと？デスクロー……？」

Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００の画面を見れば、手とかじゃなく、デスクローと表示される。これはまさか……全部持ってけと？疑問に思ってギルドの化け物図鑑を見てみると、報酬部位自体は腕なんだが出来れば死体全部と書いてある。研究するとかそういうのだろうか？

「……まぁいいか。金がもらえれば」

俺はギルドランクがどれくらい上がるのかなぁ、などと暢気に考えながらＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００にデスクローの死体を入れる。換金

の時には出さなきゃいけないんだが、Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００は見せたくないな……魔法学院都市に着いたら出してひこずってくしかないか。かなり目立つのは確実だろうけど、Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００に目が向けられるよりはいい。まぁいずれはバレるかもだがな。

とりあえず、Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００に入ってる荷物を届けるのが先か。その時にデスクローがバレないことを祈ろう。

十五話目

デスクローを倒してから数日。あれからデスクローに出会うことは無かったものの、結構な数の魔物と戦う羽目になった。その中には今までのワイルドドッグやブロードフライもいたが、今回は新種とも数種遭遇している。

まず初めに１３０ｃｍ程度の緑の身体をした醜悪な顔つきのゴブリン。これは出っ張った下顎についてる牙が報酬部位だ。これに関しては道中丁度森から出てきた２０匹の集団と鉢合わせになってしまい、戦闘になったんだがパフォレーターをランボーの如く一斉掃射するとすぐに勝てた。ランクが低いのもあるだろうけど、やっぱり人型のやつとかは銃弾に弱いみたいだ。簡単に貫けたのが何よりの証拠と言えるだろう。

そして次に、ゴブリンが２ｍを越えてる位のサイズになってデカイ棍棒を携えたＣⅡランクのオーク一匹。コイツはゴブリンよりかは知能が高いそうで、スーパーミュータント・マスターの如く身体に木の鎧みたいなのをつけていた。まぁ銃を持ってる俺からすれば意味の無い装備だったために近寄られる前に心臓に集中的に撃ち込んで倒した。報酬部位はオークの首だったからさ。そんで何故かＰｉｐ－Ｂｏｙ３０００に入れると首が布袋に入っていたのは嬉しかった。

まぁ他にも何匹かいたが、代表的なのはこのくらい。何度か物理攻撃もくらったものの、パワーアーマーとこの身体に勝てるはずもなく、突っ込んできて逆にふらついてるやつもいた。若干イラついたので、力を込めてアッパーで殴りつけた途端、風を切る音と共に俺の拳が魔物に命中。同時に首から上が前方３０ｍに綺麗なアーチを描きながら飛んでいったのは記憶に新しい。パワーアーマーの装甲とスキル、Ｐｅｒｋｓマックス及び神様補正の力は伊達じゃないと身を

もって実感。同時に一般市民には絶対に使えないのも。

敵の攻撃に関しては、少し身体が下がって衝撃は来たけど大したことはない。一応体力は減っているのでスティムパックで回復はしておいたがね。他のやつらもパフォレーターの一斉掃射でなんとかなった。弾薬の心配は無いため、しばらくはこんな感じでやっていけるだろう。

で、現在ベガルタの村のギルドにいる。部位報酬はここで精算するつもりはない。あくまで依頼の達成のみが目的だ。どうせ驚かれるならデカイ場所で、と開き直ってみたり。

「よっと、荷物の確認お願いします」

「はい。えっと……うん。何の不備も無いですね。お疲れ様でした。こちらが報酬ですね」

荷物を受付のお姉さんに渡し、報酬を受け取る。幸いな事にギルドカードはポイントを付加する為に水晶に翳しただけだったためデスクローとかに気づかれる事はなかった。こういうのは自己申請的なものなんだろうな。

「ふぅ……魔法学院都市まであと少し、か」

特に依頼も良いのが無かったためギルドから出る。そしてＰｉｐ－Ｂｏｙ３０００の地図に登録されたこのベガルタは、現在の目標の魔法学院都市にかなり近い。まぁ疲れ知らずの身体に加えて駆け足で来てるからこそすぐに着ける距離なんだが。

「ま、今日はゆっくり風呂に入るかな」

放浪の旅も始まったばかり。まだまだ食料も余裕があるし、こうやって人のいる休憩地に入ることで初めての旅にしては精神的にも余裕がある。やっぱり初っぱなからメガトンに突っ走るなんて馬鹿をしないでよかった。さて、今日はもう夕方だし宿とって寝るか……。

十六話目

また飛んで数日後。俺はようやく魔法学院都市に到着した。え？飛ばしすぎ？道中大した魔物も出ずに前回と同じやつらを延々殺しまくるだけなのが聞きたいと？変わった事と言えば着ているパワーアーマーをエンクレイブ・ヘルファイヤーアーマーに切り替えた事くらい。理由は気分転換だ。それに、そういえばバルムンクでパワーアーマー着込んだまま入ったのに何も言われなかったのを思い出したからさ。流石にメガトンじゃ前のに変えるけど、コッチにいる間は防御力と耐火性能のあるコイツにしようと思うんだ。

で、現在俺はエンクレイブ・ヘルファイヤーアーマーを着たまま学院都市を練り歩いている。確かに多少住人や生徒とおぼしき子供達の視線はあるものの、そこまでじゃない。パフォレーターもＰｉｐ－Ｂｏｙ３０００に戻してるから銃は足に付いてる二つだけ。それでもこちらでは十分凄いんだろうけどさ。

このフェルナンド魔法学院都市はメガトンのようにフェルナンド魔法学院を中心として様々な人々が集まって出来たものだ。そして五本ある大通りにそれぞれ種類の違う商店が立ち並んでいる。一般的な日常製品を扱うコーシャル通り。ギルドがあり、それに関連して武具店や冒険者用のアイテムを扱う、まんまの名前のギルド通り。冒険者や他の土地から来た者用のホテルや宿屋があるレスト通り。クラスや学年によって違う学生の寮があるドミトリィ通り。最後に役所とかの公的機関などがあるゴーヴァン通り。そして今俺がいるのがギルド通りだ。

そしてそれらの店や家を魔物等から守るためにぐるっと一周高い城壁に囲まれている。これらの情報は魔法具を扱う出店をやっていたおっちゃんに聞いた話で、ｓｐｅｅｃｈスキルで聞き上げた。この

都市の通りの名前が全体的に英語が崩れた感じの名前になっているのはよくわからん。

さらに！なんとその際に収納用の魔法具を発見することができた！性能はＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００よりかなり劣っているものの、これで誤魔化しが効くようになったのは嬉しいことだ。まぁ何か言われても、死んだ両親から譲り受けた形見の高性能な魔法具とでも言っとけば、まっとうな良心を持つ人間ならばそんな聞いてくることはないだろうし。もし奪いにくるなら殺すだけだ。ついでに言えば、そこでは何も買わずに冷やかし同然ですぐに離れた。確かに俺にとっては珍しい物ばかりで、ゲームでも収集家と化していた俺としては手にいれたかったが、生憎と金もないし効果も俺には必要ない物ばかりだったからな。

「ギルドはここか……広すぎだぞ学院都市」

そして店同士の激しい喧騒と冒険者達や生徒の行き交うギルド通りを進むことしばらく。俺はようやくギルドを発見する事が出来た。大きさはバルムンクと良い勝負という所だが、生徒が多いからだろうか。中は向こうよりも綺麗になっている。と言っても元が酒場なので向こうに比べて、というものだが。

「っと、部位を袋に入れて……デスクローは後で出せばいいか」

Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００からあの袋を出して今まで狩ってきた物の部位を詰めていく。結局５体狩ったオークの首袋は腰にぶら下げている状態で出てきたのは有難い。まぁ動きずらいことこの上ないが、ちょっとの間だけなので問題は無いだろう。一応これは人目につかないギルド横の路地でやった。

「よっと、入るとするか」

路地から出ると、通りすがりの冒険者や店の人の目が一気に集まる。しかも立ち止まって。やっぱり目立つか……思わず俺まで立ち止まってしまったが、無視しよう。俺はそれらを無視してギルドに入った。

「でよぉ！そ……」

「あん？どうし……」

俺が扉を開けて中に入った瞬間、今までガヤガヤしていたギルドが静まり返った。更に固まって皆俺を見つめる。何だこれ？苛めか？

「……換金をお願いしたい」

「……え？あ、ははは い！では部位の提出をお願いします！」

俺に集まる視線を無視し、同じく放心していた受付に換金を頼み、腰にぶら下げていた首袋と袋に入れていた小型の物等を出していく。

「こ、こんなに……」

「まだまだあるぞ」

「「「えっ!?」」」

ギルド内の冒険者のいきなりの驚き声に内心ビックリしながらも、呆けている受付の女性にＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００から次々に魔物の部位を出していく。結局入りきらなかったからな。今回は群れとの遭遇が頻発したし、前の村で換金してないから多いこと多いこと。大小含めて１００体以上は軽く狩ってる。

「ちょ、ちょっと待ってて下さいね！マスター!!」

一気に出すと溢れかえってしまうのでちょこちょこと出していると、放心状態から復活した受付の女性が奥の扉の中に駆けていく。マスター……誰？

「おいおい、まだ出るのかよ……」

「あいつ、何者だ？」

「オークを5体も……しかもバグベアまで」

「他にも色々あるぞ。こりゃあフェリカちゃんがマスター呼ぶのも仕方ないな」

黙々とＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００から部位を出していく途中で後ろから他の冒険者の声が聞こえてきた。あの人フェリカっていうのか。耳が尖ってる金髪美人だったが……あれが亜人というものだろうか。

ちなみにバグベアというのは図鑑によるとＢⅡランクの熊がでかくなって無駄に俊敏性の上がった魔物だ。ヤオグアイより格段に弱いがね。と言っても、中々強かった。速い身体の動きで銃弾は避けられたりして、その強固な筋肉のせいでパフォレーターの弾が突き抜ける事はなかった。まぁこれで余計にダメージが与えられたんだが。

そんな感じでパフォレーターで奇襲からの乱射、止めにブラックホークを撃ち込んで合計3体倒した。報酬部位は牙と毛皮と腕。肉は勿論Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００の中にまだある。熊肉は普通に美味しく頂けました。

「おいおいフェリカ、何をそんな……成る程、そういうことね」

「うん？」

俺がデスクロー以外の魔物の素材として最後にゴブリンの牙をぶちまけると同時に先程の扉からフェリカという女性と共に黒いコートを着た赤い短髪のイケメンが出てくる。この人がマスターとかいう人か？

「いや失礼。この子はバイトでね。これから先はギルドマスターの俺が対応しよう」

「わかりました」

ギルドマスターか……こりゃあいきなりかなりのお偉いさんが出てきたな。多分ここのトップなはずだからな。でも何でこう……重要なポストにいる人はイケメンか美人なんだろうか？

「それにしても凄い数だな。苦労しただろう？」

「まぁ、そうですね。何故か群ればかりに遭遇しまして」

「ははは っ、そりゃ運がない……っと、種類別に分けてくれていたから数えやすかったぞ。これが報酬だ。俺も昔似たようなことをしたもんだが、こんだけ狩りゃあしばらくここ周辺は安泰だ」

じゃらり、と革袋に入った報酬がカウンターに置かれる。素材は次々に片付けられていき、奥の扉に消えていく。まだデスクローが残ってるんだが……。

「あの、まだもう一匹だけあるんですけど……」

「うん？まだあったのか……今度は何だ？またバグベアか？それともミニドラゴンでも出てくるか？」

ひやかした様に言ってくるのを無視して俺はＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００に報酬をいれ、デスクローに選択肢を合わせる。ちなみに図鑑情報によればミニドラゴンとはその名の通り小型のドラゴンでＢⅡランクの魔物らしい。このクソイケメンめ……目に物見せてやるわ！

「いえいえ、そんなちゃちなものではなく――」

「なっ!?」

「うそっ!?」

「「「「えぇぇぇぇ!!」」」」

ピッ、とボタンを押してデスクローの死体をギルドマスターの目の前に落とす。正直この呆けた顔が面白くてしょうがないが、話を進めないとな。

「――デスクローです。換金を」

「「「「……」」」」

先程までの皮肉はどこへやら。ギルドマスターは目と鼻の先にあるデスクローに固まっている。ちなみにこの沈黙はしばらくして俺がギルドマスターを殴ることで終結した。

「っつぅぅぅ……容赦ねぇのな、お前」

「話を進めないそちらが悪い」

悶絶しているギルドマスターにもう敬語を使わずに話す。なんかこの人軽そうだし、いい加減面倒になってきたからな。

「オーケー、そりゃ悪かった。でもな？コイツを見せられたらこうなるのも許してくれや……本当にお前が狩ったんだよな？」

「勿論。ギルドカードを見たらわかるだろ？」

やっぱり信じきれないのか訝しげな顔をするギルドマスターにギルドカードを渡す。それを受け取り、水晶にかざすと彼は観念したように両手を上げてやれやれ、といった様子で俺にカードを返してきた。

「オーケー、俺の負けだ。とりあえず、お見事と言っておこうか」

「そいつはどうも」

「それにしてもお前、ランクがＤＩだったのかよ。今回の常時討伐依頼の分でＣＩになったが、それでもまさかデスクローを狩ってくるとはな……コイツ公ではＳＩとか言われてるが、実質倒せる奴はＸかＳⅢって言われてるんだぞ？」

デスクローを興味深気に眺めたり触ったりするギルドマスターの言葉に内心かなり驚いた。なんだよそれ、詐欺じゃないか……それにしてもやっぱりデスクロースゲー。

「これが依頼だったらお前は一気に上がってＣⅢは確実、下手したらＡⅡ位まで上がってたんじゃないか？」

勿体ねー、とぶつぶつ言うギルドマスター。俺自身も少なからずそう思う。でも今のランクじゃあ受けれないし、まぁ掴みとしては上々かな？金も結構手に入るし。

「まぁいいか。さて、これから報酬を渡すわけだが……額が額だ。それにコイツを中に入れておきたい。そいつを持って、ついてきてくれ。俺は持つのがだるい」

「……」

そう言ってそそくさと出てきたドアに向かうギルドマスター。こいつ……本当に責任者か？

十七話目

ギルドマスターについていき、いかにも職員用の通路を突き進んでいった一番奥の部屋。俺はそこにデスクローの死体と共に通されて、長テーブルを挟んだ高そうなソファーに腰掛けていた。デスクローの死体はその長テーブルに仰向けで置かれており、向かいの席にギルドマスターが座るのだろう。

「さて、部屋に入ったわけだが……紅茶とコーヒー、どっちにする？」

「コーヒーで」

「お前はコーヒー派か……おーい！コーヒーと紅茶持ってきてくれ！」

ギルドマスターが扉を開けて声を張り上げると、はーい！、という元気の良い返事がわりと近くから聞こえてきた。ってか部屋に両方用意できるのがあるのに……どんだけ面倒くさがりだこの人。

「少ししたら来るだろうから、先に話を進めておくか。じゃあ改めて自己紹介だ。俺はこのフェルナンド魔法学院都市支部のギルドマスター、アイザック・ザクレブだ。ランクはSⅢ、ちなみにコイツは一度だけ他のギルドマスターと共になんとか二体倒した事がある。お前は？」

SⅢて……やっぱりギルドマスターともなるとランクの格が違うな。しかし、それでもデスクロー二体か。同時に出たんだろうけど、デスクローどんだけさ。

「俺はコウヤ・キサラギ。ギルドランクCIのしがない旅人さ。この

都市には魔法を知るために来た。何か良いところがあれば教えてくれ」

礼儀としてヘルメットを脱いで横に置き、自己紹介。仕様なのかどうかわからないが、外した時に銀色オールバックの髪がペチャンコになったりしないのは有難い。色の調整が大変だったのはいい思い出だ。

「魔法をねぇ。ま、後で幾つか教えてやるよ。それにしても……思ってたより若いのな。いくつだこのくそイケメン？」

「１９だ。アイザック、お前は喧嘩売ってるのか？」

「まさか、俺はただ「失礼します。お持ちしまし……」おぉ、来たか」

追求しようとしたら丁度の所で職員の男性が入ってきてアイザックに二つを渡し、デスクローを見て顔をひきつらせながら去っていった。ちっ、逃がしたか。

「そんじゃ、自己紹介も終わった所だし本題にいきますか」

アイザックは俺の前にコーヒーを置いてソファーに座り、紅茶を一口飲んでから口を開いた。俺も一口……あ、美味いな。

「俺は立場上幾つか質問せにゃならん。化け物、特にコイツの討伐者へはギルドマスターがこれをしないと駄目なんだとよ。この上なく面倒くさいがな」

「何でだ？他にも強いのはいるだろうに」

「討伐数が絶対的に少ないんだよ。それに、生態も良くわかってない。

加えて死体はどうしても広域殲滅魔法とか威力の高すぎる魔法使うからぐちゃぐちゃになるんだよ。だから解剖も出来ない。まぁ倒せるの俺達ギルドマスター位だからな」

コイツ強すぎだからなー、と呟いたアイザック。さらっと自慢を入れてくる辺りがイラッとくる。

「で、そんな中お前はこんな綺麗な死体持ってきたからな。尚更質問しないといけなくなった。コイツは学院のレベル高い研究室に回されるから、そこで初めて色々解剖される予定だ。学者共ひっくり返るぞこりゃ」

ケタケタ笑うアイザックに、俺としては少しばかり不安になる。その学者共や他の連中がこぞって寄ってきたりしたら面倒な事になりかねない。そうしたのは自分な訳だが……嫌なものは嫌なんだ。イラッときて引き金をパンッとしかねん。

「まぁ安心しろ。ここで質問に答えてくれれば後はギルドがなんとかする。詳細を聞くことがあるかもしれんが、それらはしっかりとギルドを通してからする。ギルドとしてもコイツを倒せる貴重な人材を取られるわけにゃいかんからな」

「そいつは助かった」

思わずふぅ、と息を吐いてしまう。ここにきて初めてアイザックが頼もしく思えた。まぁデスクローの難易度がそこまでスゴいならギルドが守ってくれるのもあながち間違いではないはずだ。中立の立場とはいえ、依頼をこなせる戦力は欲しいはずだしな。

「大船に乗った気持ちでいればいい。で、あっと……まず一つ目は本当に討伐したのかの確認だが、これは向こうで確認したから飛ばそ

う。次に、武器は何を使った？」

いつの間にか紙とペンを持ったアイザックが確認について紙と記入してから俺に向き直る。ここで下手に隠したら絶対面倒な事になるので素直にブラックホークをホルスターから引き抜いた。

「これだ。従来の物よりも威力が高い。これでドタマをぶち抜いた」

「ほぉ、遺物か？珍しいもん使ってるな。まぁいいか、強い遺物っと」

カキカキと紙に書き込んでいくアイザックに、そんな報告でいいのかと思ってしまう。別に俺が何か言われる訳じゃないんだが、元の世界でキチッと書いていた自分からすれば、なんだかなーという感じがしないでもない。他の人に怒られてもしらんぞ。

「で、次は――」

それからしばらく細かな質問から大雑把なものまで、小一時間色んな質問に答えていった。腕のＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００については事前に考えていた形見作戦でなんとかなった。深く聞いてこなかった事については、こういう性格のやつで良かったと思う。

「――よし、これで終りだ。それと、ギルドの規約でコイツを倒して情報提供したお前は２ランクアップで今日からＣⅢだ。良かったな～？」

「上がることは嬉しいが……良いのかそれって？」

「良いも何も、そうやって決まってるんだよ。Ｂランク以下のやつが化け物に分類されるものを倒してキチンと情報提供してくれれば、２ランクアップになる。流石にＢランク以上のやつはランクアップ出

来ないが、お前はCランクだ。Bランクからは化け物の依頼もちょくちょく入ってくるからな。適材適所ってやつさ。と言っても、お前はまだギリギリCランクだからもう一回デスクローでも狩ってくればまた2ランクアップが出来るがな？」

二回2ランクアップとかせこい気もするが……まぁ確かに、化け物と呼ばれる奴等を倒せる実力があるのにその依頼を受注出来ないというのは、ギルドとしても依頼が捌けないからこういう引き上げは必要なんだろう。特にレオナルド曰く、化け物についてはギルド総出で相手しないといけない位らしいから、余計にそうせざるを得ないんだろうな。

「まぁ楽に行くか地道に行くかはお前次第だ。ギルドとしては、早いとこランクアップして欲しいがな。俺個人としては、どっちでも構わん。あ、そういえばお前、パーティ組んでたりするのか？」

「パーティ？」

「なんだ、知らねぇのか？まぁ確かに最初の説明じゃ言わねぇからな」

心底どうでもよさげな顔をしながら紙とペンを机の残り少ないスペースに置き、ドッカリとソファーに凭れたアイザックは片手をヒラヒラさせながら説明を開始する。

「パーティってのは、依頼をこなすために一緒になって行動するギルド員、もしくはその猟団を指す。つまりは皆でワイワイ協力プレイってことさ。それは一時的なものでもいいし、誰かを団長にして気に入った奴等と永続的に組む猟団を立ち上げるのもいい。後者はギルドの仲介の後に申請してメンバー登録を一々しなきゃならんが、利点は多い」

それから更に聞いていけば、猟団では金さえ払えばその団員とだけ通信の取れる特殊な魔法具が買えるとか。そして人数が多いために名前が知られれば一定期間の商隊の護衛等の依頼が名指しで来たりするために、団員全員が依頼と金に困ることはほとんど無くなる。

更に個人とは別に猟団自体にもランクがあり、立ち上げた時点から団員のこなした依頼分だけ自動的にコツコツ貯まり、間隔は広いもののランクアップする。そしてそのランクがＡ以上になればその猟団用の拠点がギルドから支給されるらしい。そこまでいくのはかなり限られたやつららしいけど、現在拠点持ちの猟団は１０団体位だそうだ。それすらも最近は人員不足に頭を抱えている様だが……まぁ俺には関係ない。

「猟団ねぇ……立ち上げてみるのも、また一興か」

「まっ、そんときゃ俺が推薦してやるよ。俺の名前出せば連絡がくるからな」

カラカラと笑いながら紅茶を一気に飲み干し、空になったカップを机に置いたアイザックは紙とペンを持って立ち上がり、執務用――ぽっと見校長先生の机――と思われる木製の机の引き出しの中に入れソファーに足を組んで座り直す。しかし、どうしてそこまでしてくれるのか不思議でならないんだが……。

「ん？あぁ、ここまでするのは個人的にお前が気に入ったんだよ。話してると中々どうして、面白いじゃないかお前」

「……顔に出てたか？」

「いんや、俺様位になると雰囲気でわかるのさぁ！まぁ、その中でもお前はかなり読みづらいけどな。どんだけ場数踏んでんだよコウヤ」

「黙秘権を行使します」

「つれないねぇ」

くくっ、と二人で笑いあい、俺は冷めてしまったコーヒーを飲み干した。

十八話目

あれからしばらく二人で話し、なんだかんだで仲良くなった俺達はアイザックの部屋から出て通路を歩いていた。

「受付から報酬を貰うと良い。他の職員は……丁度休み時間か。まぁフェリカがいるから遠慮なく貰っとけ。デスクロー分は勿論追加しとく」

「わかった。じゃあ俺は今日の宿でも探しに行くとするよ。明日、魔法について聞きに来る」

「おぅ」

腕時計を見ているアイザックの返事を聞いてから俺はヘルメットを被って扉に手をかける。すると後ろのアイザックがそういえば、とポンッと手を叩いて俺を止めた。

「俺イチオシの宿があるんだが……そこの一泊タダ券をお前にやろうとして部屋に忘れてた。期限が今月いっぱいで、俺は休みが取れそうにない。勿体ねぇから使ってくれや」

「あぁ、悪いな」

「中々面白い話が聞けたからよ。その代金って事で。取ってくるからちょいと待っててくれ」

「了解。依頼見てるか、フェリカちゃんと話してるよ」

ナンパすんなよ〜、と手をヒラヒラさせながら戻っていくアイザッ

クにやれやれと思いながら扉を開くと、ちょうど他の冒険者の依頼を整理し終えたフェリカちゃんが座っていた。うぅむ、耳が長いからエルフでいいんだろうか？

「あ、戻られたんですね。マスターから聞いてます。報酬はこれです」

後ろにいるのもなんなのでカウンターの前まで行くと、フェリカちゃんが両手で恐る恐るといった具合に報酬を差し出してきた。はて？

「え、えっと、これがデスクロー分の白金貨２０枚、２０万ゼニーです……はわわ、あんな大金初めて持ったよ」

俺としてもビックリな額を俺も恐る恐る手に取って数えた後に、即行でＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００に入れる。今はパワーアーマーだからポケットないし、落とすとかなったら洒落にならないからな……小声のフェリカちゃんの発言に軽く萌えたのは秘密だ。

「それと、こちらが部位報酬と常時討伐依頼分の白金貨３枚と金貨８枚、そして銀貨６枚と銅貨５枚に鉄貨７枚の３８６５７ゼニーです。お、お疲れ様でした！」

「あぁ、ありがとう」

今度はまぁ上位種も含めてあれだけ狩ればいくだろう金額だったので、変に安心しながら金をＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００に入れる。何だか一気に金持ちになったな……こないだまでの微妙に金の無い生活とこうも早くおさらばするとは。収入と支出のバランスがまるでなってなかったから、今回のは非常に嬉しい。変に高価な買い物をしない限りは一年はまず遊んで暮らせるぞ。

「じゃあとりあえず、達成した分の常時討伐依頼をまた受注しておいてくれないか？」

「あ、はい。わかりました」

フェリカちゃんにギルドカードを渡して水晶に翳してもらい、依頼をカードに読み込ませる。そしてカードを返してもらい、やっぱり水晶について気になったので思い切って聞いてみる事にした。アイザックには田舎者と言ってるから、なんとかなるか……な？

「なぁ、フェリカちゃん。毎度疑問に思ってたんだが、その水晶って何なんだ？」

「え？あぁ、これですか？これはですね、ヴィスタという魔水晶です。世界中の各ギルドの情報がここに詰まってるんです。例えばギルド員の皆さんの情報とか依頼とか諸々。それはこの水晶の特性で、登録されているギルドの物は常に最新の情報を共有出来るのです。どうしてなのかは未だにわかってないらしいですけど」

ふぅ、と一気に喋ったからか一息ついて、良いですかとの確認に頷き、戻ってきたギルドカードをＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００に入れた。まぁ要はパソコンみたいな物だろう。というか、コレ無しだと本当に大変な事になりそうだな。

「そういうのだったのか……ふむ。ありがとうな」

「い、いえいえそんな……私はお仕事しただけですからー」

ブンブンと首を振りながらお礼なんて～とつっかえながらも妙に間延びした声で遠慮してくるフェリカちゃん。そこまでされると何だかな……感謝されなれてないとかか？

と、それからしばらくフェリカちゃんの可愛らしい対応に癒されながら話していると、急に何やら騒がしい集団がギルドに入ってきた。人数は……八人？

「だーかーらー！ついてくるなっていってるでしょ！」

バンッと勢い良く開いた扉の方へ向くと、赤い髪を肩まで伸ばして制服らしき物を着こんだ少女が横にいる気障ったらしい金髪のイケメン君に怒鳴っていた。残りの六人は半分がイケメン側でニヤニヤしてて、もう半分が怒りを込めた目でそいつらを睨んでいた。なんか大体の展開が読めた気がする。

「相変わらず恥ずかしがり屋だね、ララ君。このナルシィ男爵家三男の僕が！一年生の中でも実力がトップ２０の僕が！こんなに君を好きだというのに！あぁ、僕は君を――」

ララというらしい少女に向かってやけに芝居がかった風に家名と実力？を強調し、一人話を続けるナルシィ男爵家の三男くん。実際そんな凄そうに感じないのは気のせいか……？いや、確かにトップ２０というのは凄いんだろうけども。なんだかなー。最初に会ったのが公爵家だったからなー。それにララとかいう子とその友達、無視して依頼の掲示板に行ってるからなー。

「フェリカちゃん、何だあのウザったいのは。学生だよな？」

「あはは……あれは私と同じクラスの一年生の子達です。課題でギルドの依頼をこなすのがあったのでそれだと思います。あ、私は勿論もう終わってますよ？」

「へぇ～、っていうかフェリカちゃん一年生だったのか。もうちょい

上かと思ってたぞ」

「むっ、コウヤさんそれってどういうことですか？」

「［ＬａｄｙＫｉｌｌｅｒ］フェリカちゃんが魅力的な大人の女性ってことさ。少なくとも俺はそう感じた」

「［成功］はわわわ、み、魅力的だなんて……」

受付のカウンターに寄っ掛かりながらフェリカちゃんと話す。するとフェリカちゃんが顔を真っ赤にして、テンパりだした。あれ？スキルが勝手に……俺今もしかしなくてもアイザックが言った通りの事をしてるか？ちなみに今ヘルメットは外して話してます。女性と話すのにフルフェイスヘルメットは駄目だろう？

「フェリカ～、課題で来たんだけど……って、何してるのよ？」

やっちまったと思っていると、先程のララが依頼の紙を持って受付のフェリカちゃんに差し出していた。しかしフェリカちゃんは顔に両手を当てていやんいやんと口に出しながら首を振っており、聞いていない。それを見たララちゃんが、いきなりフェリカちゃんにチョップした。うむ、手慣れた感じだったな。

「いたっ！もうっ、何するんですか！」

「あんたがクネクネしてるからでしょうがっ」

「へっ？あ、ララ……」

ため息をつきながら言うララちゃんに、フェリカちゃんの顔がより赤くなる。しかし仕事は忘れてない様で、手慣れた手つきで依頼の受

注をこなしていく。

「お？フェリカもようやくこの仕事に慣れたって感じだな？」

「うん、お陰様で。ガリバー君やマイルズ君、それにララやルーシーが何度も来てくれたからだよ」

「最初は見るに耐えなかったからねぇ。対応はガチガチ、カードは落とすしコーヒーをマスターの頭にひっくり返すなんてのもあったね」

「こらマイルズ、あんまりフェリカをからかうんじゃないの」

緑色のツンツンした短髪のガタイの良いイケメンがガリバー、空色の髪をウルフカットにして細マッチョなイケメンがマイルズ、そして紫色の艶やかな髪を腰までのポニーテールにして極めて女性的な体型をしている美人がルーシーのようだ。その点で言えばララは小柄でぺったんこだが美少女といえる。フェリカちゃんが一人一人を順番に見てから言っていたので間違いないだろう。本当に、この世界のイケメン・美女率はなんて高いんだろうか。

「じゃあフェリカちゃん、俺はそこらに座っておくとするよ。アイザックが来たら教えてくれ」

「あ、はい。わかりました。マスターが来たらお呼びします」

せっかく友人がいるのに俺がこのままいるのもどうかと思うのでその場から離れて空いた席に向かう……と、その前に横の酒場のカウンターで昼飯でも頼むか。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

Ｓｉｄｅ三人称

コウヤが背を預けていたカウンターを去り、酒場のカウンターに昼食の注文をしに行ったのをなんとなく見届けたララ達は、フェリカからララをパーティリーダーとしたカードを受け取りながら質問をした。

「ねぇ、フェリカ？なんだか随分仲良さげだったけど、あの人誰なの？」

「それにうちのボケ兄貴を呼び捨てにしてたみたいだし……」

ルーシーが可愛らしく人差し指を顎につけ、うーんと考える仕草をしながらフェリカに問えば、ララも続けてフェリカを見た。実はララことララ・ザクレブはギルドマスターのアイザック・ザクレブと兄妹だ。これはこの学院メンバーの中では周知の事実である。似ているのは赤毛ということと整った顔立ちという、コウヤが聞けばカール兄妹を思い出す事だろう。

「そうだな、大分治ったとはいえ人見知りのフェリカが普通に接してるから悪い人じゃなさそうだが……」

「うん。でも珍しい鎧着てたね。あと遺物使いみたいだし」

ガリバーはその筋肉質な腕を組み、マイルズはニコニコしながら答

えた。マイルズとフェリカ以外は遺物と聞いてもう一度コウヤを見れば、注文を終えて腰に付いている遺物がここからよく見える席についていた。

「あっ、本当だ。珍しい物見たわね」

「でもあれってもの凄く高いんでしょう？っていうことは、あの人って貴族の方かしら？」

「可能性はあるな。で？フェリカ、結局誰なんだあの人？」

デスクローの件のせいか、コウヤの周りの机には誰も座っていない。それで更に不思議に思いながらガリバーは苦笑しているフェリカに聞いた。

「あの人は今日この学院都市に来たばかりの旅人のコウヤさん。さっきまでマスターと話してたんだけど、なんだか仲良くなったみたい」

へぇ、と全員が軽く驚いた表情をする。それと言うのも、アイザックは基本的に気分屋で皮肉もよく言うので他人から見れば誤解されやすいのだ。よくつるんでいるララの兄ということで、このメンバーはよくアイザックと会っているために慣れたが、初対面の人とこうまで親しくなったアイザックを妹のララでさえ見たことが無かった。

「まったく、目の前にいないと思ったらこんな所にいたのか」

「げっ」

しばらく見ていたコウヤから目を離し、今回の依頼のランクＥＩ、マジカ・ゴブリン――魔術を使うゴブリン――を含めたゴブリン１０匹の討伐のためにさぁ行こう！……とした矢先、先程まで一人で寸劇

を続けていたナルシィ男爵家三男こと、ストデス・ナルシィと取り巻き三人がララ達の前に躍り出た。

「あんたまだいたの……」

「君がいるならどこへでも現れるさ」

「それってストーカーじゃね？」

「言えてる」

ストデスが髪をかきあげながら気障ったらしく言っている中、ガリバーとマイルズはストデスを見ながら肩を寄せあいヒソヒソとドン引きした目で話している。それに気づかないストデスは、うんざりしているララの手をとり、懐から緑色の物体を取り出す。ララは鳥肌がたった。ルーシーに至っては横で口を押さえていたりする。それほどまでに、うざかった。

「今日は君にこれをプレゼントしようと思ってね。とても珍しい物なんだよ？ほら、ここを押すと……」

「……なんか音が出だしたわね」

「見事なまでに等間隔でランプが点滅してるけど……で？」

誇らしげに胸を張るストデスだが、取り繕う取り巻き以外のそれで？という視線が突き刺さる。確かに物珍しい物であり、約２０ｃｍ大の先は尖っており真ん中は太く四つ突起が下についている。そして穴が空いていて、側面には先程ストデスの押したボタンが赤く点滅し、ピッピッと等間隔に音を出していた。しかし、この道具の用途のわからないララ達にとっては、邪魔なものでしかなかった。その後そ

の視線に耐えられなくなったストデスが男爵家御用達の商人から買ったアンティークだと必死に説明していると、奥に座っていたはずのコウヤがこちらに歩いてくるのがララ達に見えた。

「あれ？さっきの人がこっちくるよ？」

「あら、本当ね？でも何だか焦ってる顔してるわよ？」

マイルズとルーシーが最初にコウヤに気づくと、背を向けているストデスのグループ以外はコウヤに気づいた。そして何をするのかと見ていると、いきなり――

「よし、少年。動くな」

「「「なっ!?」」」

――ギルド中が驚く中で、どこからともなくサバイバルナイフを取り出し、ストデスの首筋に当てた。

「コ、コウヤさん!?一体何を!?」

「［ｓｔｒｏｎｇ］あぁ、そのままそのまま。全員死にたくないなら……そこのララちゃん達も動くんじゃない。特にララちゃんと少年は手も足も、指先に至っても絶対に動かしたら駄目だ」

「［成功］わ、わかったわ……」

コウヤのいきなりの行動にフェリカがカウンターから身を乗り出すも、消音器付き１０ｍｍピストルを即座に構えて銃口をララに向け、コウヤのその口調からは信じられない程の重圧を感じる言葉を発した。今丁度この時にこの場にいるのが学生を含め、ランクの低い者

達だったというのも災いし、全員の動きが止まる。特に間近で聞いた９人は最悪だった。ストデス側の人間は特に顔が青ざめ、ララ達も手足が震えるが、ララとストデスはコウヤの命令で指先一つ動かすことが出来ない。

「良い子だ。そのまま絶対に動くなよ？」

コウヤがナイフを収めて、ララに向けていた消音器付き１０ｍｍピストルをホルスターに入れる。そしてコウヤは二人の手の上にある緑色の物体に近づこうとストデスから離れ――

「……うぁ」

「あ」

「馬鹿野郎!!」

――すると、コウヤがナイフを収めたからか、ストデスがいきなり気絶し、ララも銃口が下がって少し気が抜けた矢先だったので二人で支えている形だった緑色の物体がバランスを崩し、落ち始める。しかし、コウヤが飛び込みそれを抱える事に成功すると同時に、音が鳴りやんだ。

十九話目

「ふぅー……」

俺はカウンターに突っ込んで逆さを向いている状態で一息ついた。全員が俺の行動に驚いた顔をしてくるが、とりあえず間一髪……！

「あ、あの、コウヤさん……？」

「ん？あぁ……すまんなフェリカちゃん。怖がらせたか？ララちゃん達も、もう動いて良いぞ」

フェリカちゃんが少し青ざめた顔で恐る恐る聞いてくるのに苦笑しながら、未だに固まっている全員に逆さまで声をかける。すると俺がスキルを使わないで威圧感を無くしたからか、全員が息を吐いた。と同時に、フェリカちゃんの後ろのドアが開きアイザックが手に紙を持ちながら出てきた。

「う～ぃ、見つかったぞコウ……って何やってんだお前？アホなのか？」

「やかましい。それが命の恩人に対して言う言葉か？」

「はぁ？」

逆さまになってる身体を戻して立ち上がり、アイザックに向き直る。そして今起こった事の一部始終を話す。その事にアイザックは頭をかき、俺から目線をずらして横にいる息の荒いララちゃんに目を

向けた。

「まったく、まだこのガキは言い寄ってやがるのか……おいララとお前等！まだこのガキに対処してねぇのかよ？」

「う、うるさいわね！ちゃんとしてるのに勝手に言い寄ってくるのよ！そ、それとあんた！いきなり脅すなんて何考えてんのよ!?」

俺が目を向けると若干ひるんだものの、ビシッと指を指して一気に捲し立てたララちゃん。その後ろの3人も警戒心バリバリの視線を向けてくる。足が震えてビビッているのが丸わかりだが。間にいるフェリカちゃんがオロオロしているのがかなり申し訳なく感じるぞ。

「それに関しては素直に謝ろう。でもな？そうでもしないと君達はコイツを渡さないだろう？」

「コイツが話に出てたやつか……で？コウヤ。それが何で命の恩人なんて大層なもんになるんだ？」

「そうだよ。それは確かに物珍しいけど、ただの音の鳴るアンティークか何かでしょ？」

俺はララちゃんに少し頭を下げて、未だに両手で持っていた緑色の物体こと、ミニ・ニュークをカウンターに立てる。それをしげしげと見るアイザックとフェリカちゃん。ララちゃん達も同様に不思議そうにそれを見ていた。それに加えてマイルズ君が妙に落ち着いた声で疑問を投げかけてくる。

「コイツを知らない君達にはそうとしか見えないだろうけど、コイツはれっきとした兵器だ。それもかなり強力な、な？」

「……嘘だろ？」

俺はＰｉｐ－Ｂｏｙ３０００から何故か入っていた解体用工具を取り出して机に並べつつ、そう言った。ガリバー君が驚いた声を出すが、俺はそのまま作業を開始する。このまま俺が持っていっても良いんだが、またこんなことが起きたら目も当てられないからな。アイザックに渡しておこう。軍事利用されない事を祈るばかりになってしまうけど、気がつけば爆発に巻き込まれて死んでましたとかは嫌だからな。

「これはミニ・ニュークと呼ばれる小型核弾頭だ。遺物の一種で、どの遺物よりも攻撃力、破壊力共に優れている。ここら辺一帯は軽く吹き飛ばせる位はな」

「じゃああなたが命の恩人なんて言うのは……」

「あぁ。すでに起爆スイッチが入っていたんだよ。あの音が出始めたスイッチな？あのまま地面に落ちていたら俺達と街の住民は即死、もしくはギリギリまで苦しんでから死んでいただろうよ」

「「……っ」」

そう。これはゲーム内でも屈指の攻撃力を誇る小型核弾頭だ。ゲームのエフェクトでも凄い威力だったのに、現実であるこの場で使えばここら辺一帯が人の住めない地帯になるのは確定だ。ゲームみたいに建物が壊れない訳がないし、下手をすればグールになってしまう人達も出てくるはずだ……まぁ、この身体がゲーム通りなら直撃してもなんとか生きていそうな気もするけど、試したくはない。

「しかもコイツは化け物共を生み出す放射能……毒って言った方がいいか。それを出すんだ。亜人はどうなるかは知らないが、少なくとも

人間がそれを浴びれば耐性の無い奴等は大抵病気になる。それもかなり酷いものにな。そしてそのまま死ぬか、最悪外にいるフェラル・グールの様になるぞ」

「ちょっと待て。ということは、あいつらは元は人間だったのか？」

「その通り。あれは放射能を浴びて狂った人間の成れの果て……まぁあれは純粋に化け物として処理しても構わんよ。すでに完全に理性は無い」

「……そうか」

どこか納得のいかない様なアイザックだが、俺にはどうすることも出来ない。ただ事実を言って、後考えるのはあいつ自身だ。横にいるララちゃん達とフェリカちゃん、更に話を聞いている恐らく人を殺したことの無いギルド員達が沈んだ顔をするのがわかる。フェラル・グールは単体だとランクが低いので、初心者の相手にもよくされるのだ。だからだと思う。

「あぁ、しかし全部が全部そうなる訳じゃない。意識を残したままグールになる人達もいる。姿形は変わってしまうが、同じ人間ということは変わり無い。差別と偏見により不遇な待遇を受ける人達が多いが、君達がそうならない事を祈るよ……っと。出来た」

「ん？何してたんだ？」

いち早く一応立ち直った様なアイザックが聞いている中、ふぅ、と一息つく。知識やこの身体の経験でどこをどう弄れば良いかわかるけど、俺としては爆弾、しかも核弾頭解体なんて初めてだから精神的に疲れた。とりあえず起爆装置を解除してスイッチを押しても起動しないようにしてはいるが、メガトンの不発弾と同じく強い爆発には

耐えきれずに誘爆する。要は直接銃をぶっぱなされたり、魔法で吹き飛ばされたりしない限りは大丈夫ってことだ。

「コイツの起爆装置を解体してたんだ。これで横から魔法で吹き飛ばされたり、遺物をぶっぱなされたりしない限りは落としたとしても大丈夫だ。ほれ」

「うおぉぉぉっ!?馬鹿野郎！こんな危ないもん投げんじゃねぇ！」

「だから大丈夫だっての」

冷や汗をダラダラ流しながらも両手で見事にキャッチしたアイザックに苦笑しつつ、工具を片付けていく。そして俺がヘルメットを置いている机に目を向けると、頼んでいた料理がいつの間にか置かれていた。

「そいつはアイザックに任せる。ギルドで会議に出すだの取締を強化するだのしてくれ。気づいたら爆死してたとか嫌だからな」

「あぁ、クソッタレめ。面倒事押し付けやがって……まぁ俺もそれだけは嫌だからな。各地のマスター達に話を出しておくさ。信じてくれるかは別にしてな」

「文句はそこで伸びてるガキに言え。あと、信じてくれなかったら俺を呼べばいい。それと本っ当にどうなっても良くて生き物が通らない土地を一つだ」

実際のところ、信じてくれるかどうかは可能性が限りなく低い。ここにいる奴等も本当に信じてくれているかは甚だ疑問だが、少なくとも俺の必死さは伝わったはずだ。それにアイザックには質問の時に遺物の研究者とも言っているので、アイザックとララちゃん達に関し

ては大丈夫だと思う。

「実況見聞ってか？そんな土地があるとは思えねぇがな。それにこのクソガキにも入手ルート聞かなきゃならねぇし、その後は調べて纏めて……あぁ、また俺の仕事が増えるぜ。どうしてくれんだこのタコ野郎」

「それが嫌なら会議で通せ怠け者。遺物に関しての調書位は俺が纏めておいてやるから、これ以上書類が増えたくなきゃ働け。それがお前の仕事だろうギルドマスターさん？」

「あぁ～、やだやだ。お前実力あんだから俺とギルドマスター代われよ。マスター権限使い放題だぞ？」

「生憎俺は放浪癖があってね。そんな書類に囲まれた窮屈な暮らしはする気はない」

「放浪癖とか、何だそりゃ？」

肩を竦めながら言う俺に、くくくっ、と笑うアイザック。それを真横で見ているララちゃん達が何故だか驚いた顔をしているのがわからない。

「あぁ～っと、忘れる所だった。コウヤ、これが言ってたタダ券だ。あくまで一泊だけだから後は自分で金払えよ」

「了解。で？場所は？」

名刺サイズの紙をＰｉｐ－Ｂｏｙ３０００に入れる。紙にはタダ券と有効期限しか書いてなかったからアイザックに聞かないと何処にあるのかさっぱりだ。とりあえず昼飯を食ってから行くつもりだ

が、ハズレじゃない事を祈るのみだな。

「あぁ、そういや書いてなかったか。ここから出てレスト通りの中間点にある宿だ。女将の親の店がバルムンクにもあるって聞いたが……まぁ看板が出てるからわかる。飯屋も兼ねてるリーフレットって所……ってどした？」

「……ゑ？」

アイザックの言葉を聞いて固まった俺は、悪くないと思うんだ。え？系列店？いや、親で女将って事は娘さんでいらっしゃいますか。最初に昼食を自分の金で食ったのもリーフレット、最初の旅の準備もリーフレット……俺はリーフレット家に余程縁があるらしい。

二十話目

あれから飯を食ってギルドを出た俺は、面倒だったので裏路地を通ってまっすぐ突っ切る事でレスト通りに向かっている。パワーアーマーはたまにある狭い道で傷が出来るのが嫌だったので、現在傭兵服・クルーザーに着替えた。これは白い半袖シャツに黒い革ジャケットを羽織り、黒いズボンにブーツというかなり動きやすい服装だ。道中出てきた不良や物取りには鉄拳制裁を加えて、逆に身ぐるみ剥いでやっている。というか、エンカウント率が何故か高いんですが……。

「ヒャッハー！ぶっ殺してやんよ！」

「死にたくなかったら金出しな！」

「またか……」

考えていると、何処かで聞いたようなセリフとモヒカンヘッドをしている物取り共が、口元をにやけさせ舌をべろべろと出しながらナイフを構えて俺の前後を塞いだ。この裏路地は、通りに面した店と店の間とはいってもその間は結構広い。その間にも店とかが幾つか並んでるし、居住区なんかも見つけた。どこかに隠れた名店とかもありそうな雰囲気だから、暇な時にでも見てみるのもいいだろう。

「聞いてんのか「汚物は消毒、だーっ！」びょっ!!」

「て、てめぇ！やりやが「だーっ！」ばぁっ！」

とりあえず邪魔な二人を会話する事なく掛け声と共に殴り飛ばす。この二人で大体３０人程度を殴ったり蹴ったりした俺は、大まかな手

加減を身につける事に成功した。最初は加減を間違えてバルムンクの不良共の如く粉砕骨折をさせたり、『頭ねじ切って玩具にしてやるぜぇ！』的な感じに何人かの頭をポンポン飛ばしてしまったものだが、今は軽い骨折や気絶をさせられるようになった。

「くそっ、てめぇぶっ殺し「だーっ！」てぶぅっ！」

……まぁ力加減が弱すぎると一発じゃすまないから、何度か殴る必要が出てくるんだがね。それと、うっかり殺してしまったやつらは火炎放射器で焼いてそこらに埋めて証拠隠滅し、目撃者は文字通りグールの顔になれるグールマスクをつけてちょっとお話したので多分大丈夫。しばらく夢にグールが出る事になるだろう。

「ふぅ、やっと出れたか」

案外あそこからは近かった様で、あの二人の不良から有りが……もとい、勝利報酬をＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００で巻き上げた俺はレスト通りに出ることに成功した。少し血がついた傭兵服・クルーザーは、また同じのに着替えたので問題ない。後で洗濯しようと思う。

レスト通りは学院側には高級ホテルの様なものが通りを挟んで２つずつ並んでいる。そしてそれから先は大小様々な宿が立ち並んでおり、軽く見て回っただけでも同じ様な店は１つも無かった。まぁ、こういう所の競争に勝ち抜く為にはいかに他よりも優れていてオリジナリティがあるかだしな。ちなみに俺が出てきた場所は裏路地をクネクネ進みながら来たため、中間点にあったギルドから離れて学院側に出てたので少し歩くはめになってしまった。その分見て回れたから良いんだけどさ。

「で、ここが宿屋リーフレットか……中々良いじゃないか」

辺りを見物しながら進んでいくと、周りに幾つかある煉瓦造りではなく木造ではあるが、中々に味のある店構えをした宿屋リーフレットを発見した。木で出来た看板には店の名前の左上と右下の角に植物の彫刻が彫られてあり、どこか気品を感じさせる。それと、バルムンクと同じく飯屋も兼ねている様でオススメメニューの書かれた紙も張られていた。

「まっ、突っ立ってても邪魔になるから入るかね」

同じく木製のドアを開けて入ると、内観はバルムンクの店に似ていて2階が部屋で1階が食事場になっている。しかし本分は宿屋なのか、食事場はバルムンクよりも狭い。その分部屋数が多そうだ。奥には風呂っぽいのも見受けられたので、ここは当たりだ。アイザックが推すだけあるな。ちなみに風呂は必ず宿屋に有るわけではない。魔法で沸かす訳だが、そのための道具がそこそこするそうだ。中にはすでに何人か客がいるので、結構儲かっているんだろう。

「いらっしゃい。そのナリからすると、冒険者みたいだね。ちょっとカウンターにでも座って待っててておくれよ」

俺がこの店に満足していると、お盆に料理を乗せた美人の女性が声をかけてきた。他にも従業員はいるみたいだが、恐らく彼女がアイザックの言っていた女将だろう。他と感じが違うし、何よりかなり美人だ。シエナさんとブラッドさんと同じ茶色の髪を纏めて毛先が上に来るようにブローチで止めている。前髪は右目が隠れる様に鼻先まで伸びていて、左目の方はかきあげている。それに身長も高く、１７０ｃｍ以上はあるだろう。俺が１８０ｃｍ以上なので少し見下ろす感じになる。体系はスラッとしてて色白のボンッキュッボンッ！口調がシエナさんみたいだったから、姉系の人にはドストライクだろう。かく言う俺も当てはまる訳だが。

「待たせたね。で？泊まるのかい？」

「ええ、しばらく泊まるつもりなのでお願いします。お代は？」

「あぁ、朝夕の飯と風呂付きで一泊１８０ギルさ。昼は言ってくれれば別途で作るし、他で食べてきてもいい。味も部屋も抜群さ。どうする？」

先程の料理を客に渡し終えた彼女がカウンターに座っている俺の前にやって来た。一泊１８０ギルか……まぁ金はあるし、なによりこんな美人さんに毎日会えるんだから安いもんだ。今までは金の節約のためにボロっちいけど一応風呂のある安い所ばかりに泊まってたけど、金も手に入ってるし年単位で泊まれるから何の事はない。

「そうですね……とりあえず一月分で。それと、これをアイザックからもらったんですが……使えます？」

「？アイザックってギルドマスターのかい？」

「ええ」

Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００からタダ券を出して彼女に渡すと、何やら怪訝そうな顔をされた。それから2、3度タダ券を見てからため息をつき、俺に見せるように机の上に置いた。

「はぁ……その分じゃあの馬鹿には聞いてないみたいだね。これは『去年』私があの馬鹿も含めた常連客に渡した物さ。『去年』ね」

「……あの阿呆がっ」

やけに去年を強調して言ってくる彼女に恥ずかしくなりながらも、

アイザックに憎しみを込めて小さく愚痴る。期間は丁度今。つまりは丸々一年間放置してたのを掴まされた訳だ。多分あいつには期間とかは見てなくて、タダ券という部分だけしかわかっていなかったんだろう。

「ふふっ、まぁいいさ。私は今機嫌が良いからね。一泊分はこれでタダにしてあげるよ」

「おぉ！ありがとうございます！」

「まっ、その他のお代はきっちり頂くけどねぇ」

カラカラ笑う女将さんに思わず俺もつられて笑顔になる。たまたま女将さんの機嫌が良かったのは運が良かった。俺は一泊分を差し引いた５２２０ギルをＰｉｐ－Ｂｏｙ３０００から出して女将さんに渡した。そして一カ月間お世話になるわけだから自己紹介位しようと思い、女将さんが金を金庫にしまって鍵を渡してくるのを受け取りながら口を開いた。

「俺はコウヤ・キサラギといいます。これから一ヶ月、もしくはそれ以上になるかもしれませんが……お世話になります」

「あぁ、ご丁寧にどうも。私はこの宿を切り盛りするクレア・リーフレット。あんた最近の冒険者共よりしっかりしてそうだね。それに良い目をしてる。気に入ったよ。それにしてもコウヤ……どっかで聞いたような」

鍵を見ればチェーンで繋がれた薄い鉄板に１０４号室と彫られてある。それでふと階段を上がった先を見ればすぐそこだった。これはちょうどいい時に来たのかね。奥の方じゃなくてよかった。クレアさんが顎先に人差し指を当てて考え込むという、非常に可愛らしい

行動に癒されたが、今は精神的に疲れているので部屋に行くとしよう。まだあと一カ月もあるんだ。話は急がなくてもできる。

「じゃあクレアさん。俺は疲れたので部屋に行きますね。夕食の時に呼んでください。多分寝てると思うんで、起こしてくれればありがたいです」

「ん？あぁ、わかったよ。その時になったら起こすからゆっくりしてな」

俺はそのまま階段を上がって部屋に行き、そのままベッドにダイブした。

二十一話目

あれから数日ぶりのベッドでぐっすり寝た俺は約束通りクレアさんに起こしてもらった。起きたら美人さんの微笑んでる顔が目の前にあるというある種の天国を体験できた事をここに報告しよう。

「しっかし、まさか父さんの足を治したのがあんただったなんてねぇ……はい、ガラガラ鳥の唐揚げ」

下に降りてクレアさんに話があると言われたためにカウンター席に陣取った俺は、バルムンクでも食べた今日の夕食であるガラガラ鳥の唐揚げ定食に腹の虫を鳴らせた。部屋から降りる時に少し聞いたんだが、クレアさんはやっぱりバルムンクのリーフレット一家の人間らしく、どうやらバルムンクのザックさん達から速達便で手紙が届いていたらしい。それにザックさんの足の事と、俺に会ったらよろしく伝えてくれと容姿と特徴を事細かく書かれた紙も同封されてたとか。

「ははは、隠す気は無かったんですがねぇ……俺としてもまさかここでもリーフレット一家の人に会えるとは露ほどにも思ってなかったですよ」

「まぁそうだろうさ。普通この学院に通ったり、冒険者だったりしない限りは大抵私らみたいな一般市民は生まれた国で一生を過ごすもんだからね。外は危ないし」

「［ｓｐｅｅｃｈ９８％］へぇ、そういうもんですか。なら、話を聞いても？」

シエナさんの所の味に良く似ているガラガラ鳥の唐揚げを一口食べてバルムンクのシエナさん達を思い出しつつ、俺と対面して座り、

机に肘をついているクレアさんに聞く。クレアさんは普通に休んでいるが、今日は他で夕食を取る人が多かったらしく、店は従業員だけで事足りるそうだ。そしてクレアさん、乗っています。何がとは言わないが、机に柔らかそうなのが乗っています。大事なことなので二回言いました。

「[成功]大したことないよ。私はバルムンクから出て、外の世界を見たかった。家はやりたい事や好きな事は存分にやれってのが主義だからさ、それに対して両親や兄弟は何も言わなかった。寧ろ店の１つも持てなかったら帰ってくるな！って言われたよ」

「あはは！あの人達らしい」

ザックさんやシエナさんがそう言ってる姿がありありと目に浮かぶ。短い間だったけど、底抜けに印象深い人達だったからなぁ。またバルムンクに行くときは、顔を出そう。シエナさんの宿に泊まるのも良いかもしれない。

「まぁ若気の至りってやつさね。おかげでここまで店を大きく出来たけど、未だに独り身さ。こんな性格だしね」

どこか自虐的な風に言うクレアさん。なんだか行き遅れみたいに言ってるけど、まだ２０代前半にしか見えない。それかこの世界では本当にそうなんだろうか？感じとしては中世ファンタジーだし、寿命が短いんだろう。まぁ、どちらにせよクレアさんが落ち込むのは見たくない訳で。美人となればなおのこと！こういうときのスピーチスキル！

「[ＬａｄｙＫｉｌｌｅｒ]あなたは若く、そして美しい。その凛々しく気高い性格もより一層あなたを引き立てるのに役立ってます。今までの男共が見る目が無かっただけですよ。少なくとも俺は、あなた

に好意を持ってます」

「[成功]や、やだねこの子は……年上をからかうんじゃないよ！まったく……もう」

はっ！俺は今なんて歯の浮く様な台詞を……！それに俺はスピーチスキルを選んだと思ったんだが……まさかのＬａｄｙＫｉｌｌｅｒ。また勝手に出てきやがるかこの野郎！しかしすでに口に出した事だし、クレアさんも少し頬を染めて満更でもない様子。これはこのまま進めた方が良さそうだ。俺としても恥ずかしいので顔がかなり赤くなってるだろうが、もう良いさ！ＬａｄｙＫｉｌｌｅｒの暴走はもう知らん！

「ま、まぁとにかく、理由はわかりました。俺も放浪癖があるので、外の世界を見たいという気持ちもよくわかりますよ。危険は伴うけど、それもまた冒険の素晴らしさに一塩ですし。俺はある程度腕はたつから余計に」

これは本心だ。冒険者歴１ヶ月の素人が～とか言われればそこまでだが、この旅は俺を成長させてくれる。それに時たまある危険も見たことの無い魔物もスパイスになり、非常に楽しい。そうして乗り越えた先の街では色んな人との出会いがある。サテラやレオナルド然り、クレアさん然り。俺がそう考えていると、クレアさんは一瞬キョトンとするが、ぷっ、と噴き出して盛大に笑い始めた。

「あっはっは！そうかい！あんた根っからの冒険者みたいだね。それに、腕がたつのは本当みたいだしねぇ……くくっ、母さんがあんたを気に入ったのもわかる気がするよ」

「お気に召しましたか？」

「あぁ、勿論さ。中々どうして、あんたと話してると楽しくてしょうがないよ。それに、見た目だけ見て初対面でいきなり口説いてくる男は何人もいたけど、性格を理解して尚あんな情熱的に口説いてくる猛者はあんた位さ」

「それは今までの男共がチキンだったか、脳筋だっただけですよ」

「あはは！大当たり！今までは優男かガツガツくる脳筋かの両極端さ。あんたみたいなのはいなかったよ」

「それは僥倖」

目に涙を浮かべる程笑っているクレアさん。そこまで喜んでくれるのは嬉しい限りだ。まぁ初日でここまで好意的になれれば御の字どころか大団円だろう。それからしばらくの間、夕食を完食しつつクレアさんと話し込んだ。店を建てるまでの苦労話やナンパしてくる馬鹿共と酷い客への愚痴、対して俺はそれに合いの手をいれながら話を聞くのが基本だった。話し終えた頃にはすっきりした顔をしていたのでよっぽど溜まってたんだろう。時折俺の話になる時は元の世界の事を話す訳にもいかないし、かといって話さない訳にもいかない雰囲気だったのでゲーム内での簡単な話や今までの事をかいつまんで話した。勿論色んなところをぼやかしつつだが。レイダーは盗賊と置き換えたりね。

「へぇ、あんたもその年で結構苦労してんだねえ。それに、まさかあの裏路地の件の実行犯があんただったとは……色々噂になってるよ？」

「あれは正当防衛です。先にふっかけてきたあいつらが悪い。俺は無実です。でも、一応聞いときますけど、噂ってどんな？」

「ギルド通りからレスト通りの裏路地での怪異！不良や物取り、果て

は最近首に値の付いた盗人等々……裏路地のゴミ共の一斉摘発を行おうとようやく動いたこの学院都市の自警団！しかし行ってみれば摩訶不思議！すでにリストのゴミ共は大半が地に伏せていた……ってな感じさ。何人かの首の吹っ飛んだ焼死体も学院の探知魔法を使える何人かの学生や教師と聞きこみで発見されちまったらしいよ。今は原因の調査中だと」

「あ～……やっぱり駄目でしたか」

「ふふっ、残念だったね。それに死後そんなに時間が経ってなくて特定の治癒の魔法を使えば時間はかかるけど死体でも傷は治るんだよ。結構丹念にあぶったみたいだから特定はまだまだかかるだろうけど、時間の問題さ」

やけに演技がかった口調でニヤニヤしながら言ってくるクレアさんに思わず苦笑してしまう。裏路地で何人か不良をぶっ飛ばしたってしか言ってないけど、この人にはまるっと筒抜けだったみたいだ。それにしても魔法ってのは本当に便利な技術みたいだな。探知魔法なんかは元の世界の警察の人からすれば、喉から手が出るほど欲しがるんじゃないだろうか……まぁなんにせよ、残った不良共に直接顔を見られない限りはばれはしないだろう。物や死体の記憶を読み取るとかの馬鹿げた魔法でもない限りはの話しだが。

「はぁ。でもゴミ掃除を楽にしてやったんだからおとがめは無しですよね？」

「さぁ？ここの自警団は真面目だから大丈夫だと思うけど、手柄を横取りされたって言う奴も出るかもねぇ」

「うわぁ、それがないことを祈るしかないですねこりゃ」

はぁ、と出てきてしまうため息にげんなりしながら、俺はグラスを２つクレアさんに頼み、Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００からきれいな水、ウィスキーを出す。そして受け取ったグラスにウィスキーと水を一対一で水割りした、俗に言うトワイス・アップと言われる入れ方をする。ウィスキーは度が高いけど、元の世界でも飲んでたし、Ｐａｒｔｙ Ｂｏｙというアルコール中毒にならないためのＰｅｒｋがあるため俺は全然大丈夫だ。それにこのウィスキーなどの酒には何故だか放射能が入っていないからクレアさんも気兼ねなく飲める。ちなみにこの旅の途中でヌカ・コーラ・クアンタム以外は全種類ちょびちょび飲んでいるから、安全面の保障はする。クアンタムに挑む度胸はまだないが、２００年経った酒とは思えないくらいうまかった。むしろ色々と無視して熟成されてるような？

「ん？見たことない酒だね。私にもくれるのかい？」

「ええ。まぁ、俺の秘蔵の酒とでも言っときましょう」

「ふ～ん……まっ、ありがたく頂こうかね。今日はわたしの出る事がなさそうだし」

「じゃあこの出会いに感謝して、それと今後しばらくお世話になります。っということで」

「「乾杯」」

チンッという音の後、俺とクレアさんは話しながら飲みまくり、なんだかんだで仲良くなった。ある程度の敬語も外れて従業員の人が帰って、他の宿泊客が寝静まってボトル１０本を空にした頃にようやくお開きになった。あと、俺はＰｅｒｋのおかげかやはり酔わなくて、クレアさんは少し酔っただけというほとんどザルの人だったと報告しよう。

ほんのり頬が赤くなって、部屋に戻る際にギラギラ、というか獲物を見つけた肉食獣の目で『いつか襲うと思う、というか襲うからそのつもりで』と言われた。カモンッ！と思うウェイストランド的考えと、いやいや待てよというへたれな元の世界的考えが頭の中でせめぎ合っていたが、5分もしないうちにウェイストランド側が勝利した俺は悪くないと思う。

二十二話目

翌日、と言っても寝たのが日付が変わってからだからアレだけども、俺はＤｅｅｐＳｌｅｅｐというどこでも熟睡出来るＰｅｒｋのおかげで朝にすっきり目覚める事が出来た。一度伸びをしてから時間をＰｉｐ－Ｂｏｙ３０００で確認すると午前7時、丁度いい時間だ。とりあえず俺は寝間着代わりにしている赤くて光沢があり、微妙に高級感の溢れる長袖長ズボンのセクシーなネグリジェから傭兵服・チャームに着替える。

これは少し青みがかった灰色をした長袖長ズボンに革のブーツを履いて、少し膨らんでいる首もとは顎まで覆う様に閉められた襟元に覆われている。ちょっとしたネックウォーマーだ。それにきちんと洗ってあるし、薄そうに見えるがそこそこ防御力はある。

「朝食お願いします」

「あ、はい。すぐにお持ちしますね」

下に降りた俺はまだ人が疎らな店内を歩き、昨日座ったカウンター席に座って近くにいた従業員のお兄さんに朝食を頼む。するとそそくさと奥に入っていったので、今日の予定を考える。

今日は昨日アイザックと約束してたミニ・ニュークの書類を書くための用紙を受け取って、期限を聞く。その後は魔法についてアイザックにどうにかならないか聞いてみよう。昨日の話してた時点では、なんだかんだで仕事は部下に任せていたから暇だったらしいアイザックだが、ミニ・ニュークの件と俺のデスクローの件で忙しいはずだ。両方とも自分が関わってるのがいかんともし難いが……まぁ仕方がないよな。

「あ、女将。おはようございます」
「おはよう。ん？その朝食はコウヤ、いや、あそこのカウンター席でボケッとしてるやつのかい？」
「あはは……えっと、はい。そうですね」
　ミニ・ニュークの件に関してはあの貴族のガキのせいだし、デスクローはそんな手続きがあるなんて知らなかった訳だし。まぁ知ってても出すけどね。
「なら私が持っていくよ。渡しな」
「え？あ、はい。でも、どうしたんですか女将。普段はそんな事しないのに……」
「あんたは昨日いなかったんだっけ……なに、アレは私のお気に入りだからね。朝の挨拶がてら持っていくだけさ」
「……え？えぇぇぇぇっ!?」
　もしどうしようもなかったら、とりあえずこの学院都市をぶらついてみよう。何かしら見つかるかもしれないし、魔法具とやらを見て回るのも良いだろう。それかギルドで依頼を物色するのもありだな。まぁ何にせよ最低でも1ヶ月、もしくはそれ以上滞在する予定だし、気長にいこうかね。
「まっ、考えるだけじゃしょうがない、か」
「何がしょうがないって？」

「うぉっ!?」

あまりに考え事に集中し過ぎていたのか、後ろから顔だけ出して耳元でそう言ったクレアに驚いて身体がビクリとする。センサーに意識がいかない位ボーッとしていたようだ。それにしても、凄く久しぶりに聞く自分の驚いた声だな……そういえばすっかり忘れていたが、じきに治るとか言っていたようなそうでないような……まぁ感情が戻るのは良いことだよね？対して深く考えてなかったからどうでもいいや。

「くくっ、案外可愛い反応するじゃないか。はい、朝食」

「可愛いって……はぁ、朝から驚かさないでくれよ。俺の小さな心臓に悪い」

「どの口が言うか」

からから笑うクレアにやれやれと肩をすくめていると、クレアは昨日座っていた場所と同じ俺と対面の椅子に腰かけた。

朝食はハムみたいなのと野菜のサンドイッチ。そしてホットコーヒーといった簡単だが俺みたいに朝はそんなに食べない人には優しいメニューだ。コーヒーがついてるというのもありがたい。

「あぁ、そうだ。昨日の酒……何て言ったかね。あれはまだあるのかい？」

「ウィスキーか？あるぞ。まだ飲むつもりか？」

「んー、それも捨てがたいんだけど、店でメニューに加えられないもん

かと思ってさ」

「ふむ……」

サンドイッチを一口食べて、少し考える。正直ウィスキーはＰｉｐ－Ｂｏｙ３０００に腐るほどあるから別に問題はないんだが、いくらクレアでもタダでやるという選択肢は勿論ない。となると、売値をどうするかが問題になるが……酒は自前のがあったからこの世界の酒の価格がわからない。そこは交渉か。

「いいよ。とりあえずタダで１０本、試験的に渡そう。それで客の反応見ていけそうなら、取引しようか」

「味もいいし、色んな飲み方がある酒なんて無いからね。売れるよこりゃ。でも試験的にとはいえ１０本もいいのかい？昨日二人で飲んだ分だったはずだけど、結構な量だったじゃないか」

「クレアは気に入ったけど、他の奴等がどうかはわからないからな。甘さが嫌いな奴もいる。それに、クレアと俺はザルだから大丈夫だが、結構度がきついんだよ。だから念のため。余ればクレアが飲めばいい」

「やった！」

この世界の、というかこっち側の人間に合うかどうかはわからない。メニューを見れば酒は果実酒だけなので、売れなければビールやスコッチを出してみてもいい。ワインは赤しかないから特別売れるという事は無いだろうし。とにかくまずは試験運用だ。客に試飲させて好評なら交渉開始だ。

「それじゃまず最初の１０本だ。今日から出してみてくれ。飲み方は

――」

それから少しの間クレアにウィスキーの飲み方を教えた。Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００からウィスキーを出してストレートやハイボール、トワイス・アップと、グラスに入れながらの実演講習を行った。コーラ割りも美味いけど、ヌカ・コーラを出すわけにもいかないのでそこは飛ばした。後は度がきつい事と保存方法、どの酒にも言えることだが飲ませ過ぎない様にとの注意。二人共ザルだし俺なんかは全然問題ないので後処理は楽だった。勿論クレアはこれから仕事だから飲ませなかったけどね。物欲しそうな目に何度も屈伏しそうだったけど……耐えてみせましたよ！ちなみに氷は水があれば魔法で何とかなるらしい。やはり、なんとも便利なものだ。

「――んぐっ、と。まぁこんな感じだ。一応メモは渡しておくけど、わからなければ聞いてくれ。質問は？」

「……」

「質問は無いな……はぁ、夕食の時に何本かやるよ」

「流石コウヤ。話がわかるね！」

無理でした。譲歩しちゃいましたよ……正直あんな美人に物欲しそうな顔されて耐えられる男はいないだろう。いたらそいつは絶対おかしい。もしくは同性愛者だ。

「んじゃ、俺はギルドに行くとするよ。ごちそうさま」

「わかったよ。昼はどうする？」

「そうだな……まぁ今日はいいや。いってきます」

「ん、いってらっしゃい」

クレアの声を聞きながら、俺は少し騒がしくなってきた宿から出た。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

宿を出て裏路地を通らずにギルドに向かったために少し時間がかかったものの、特に何があるでもなくギルドに到着した。中には何人かの冒険者がおり、食事をする者や朝から酒を飲む者もいる。勿論依頼を見ている奴等もいるが。

「あっ、おはようございますコウヤさん」

「おはようフェリカちゃん。早いね？」

「今日と昨日は学院がお休みですからね。バイトです。学院も一応他と同じく一週間に2日お休みがあるんですよ。イベントとかで無くなる時はありますが」

「へぇ」

受付に昨日と同じ所に座っていたフェリカちゃん。ごめん、俺はこの世界に一週間の概念があるなんてのも知らなかった。あれかな？土曜日と日曜日と同じ感じと考えてればいいだろうか。と、言うこと

は今日は日曜日……って、Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００を見たら表示されてたよ。

「まぁ、頑張ってくれ。俺はアイザックに会いに来たんだが、いるか？」

「はい。お話はマスターから聞いてます。今はララが来てますけど、構わないとおっしゃってました。昨日のお部屋へどうぞ」

「了解。ありがとな」

フェリカちゃんに礼を言ってから後ろの扉を開けて中に入る。ララちゃんがいるのか……まぁアイザックがいいと言うなら問題ないんだろう。俺は知らん。

「来たぞ～、アイザック」

「ん？あぁ、コウヤか……少し待ってろ」

従業員以外立ち入り禁止エリアをとことこ進み、昨日のアイザックの部屋に入る。するとそこにはソファーに腰かけて紅茶を飲んでいるララちゃんと、書類を片付けているアイザックの姿があった。そこで俺はララちゃんと対面のソファーに座ってとりあえず挨拶。

「おはよう。そういえば自己紹介がまだだったな。俺はコウヤ・キサラギ。よろしく」

「えぇ、フェリカから聞いてると思うけど、魔法学院一年Ａクラスのララ・ザグレブよ。そこのバカ兄貴の妹。今日何で呼ばれたのかは、知らないけどね」

「そうむくれるな。俺だって面倒なんだ。今から説明してやるよ」

だりぃ、と言いながら数枚の紙を持ってララちゃんの隣に座るアイザック。そしてふんぞり返って俺の方にその紙を置いた。紙を見てみると、アイザックの直筆だろう字で『ミニ・ニュークについての危険性及び専門家の見解と説明』、と書かれていた。

「これが昨日の遺物についての報告書用紙だ。来週には纏めて出してくれ。用紙が足りなければまた来い」

「了解。出来るだけわかりやすく書くとするよ」

Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００からクリップボードを出してそれに挟み、入れると表示が『報告書用紙』に変わる。こういう自動的に選別してくれるのはありがたい。

「おいコウヤ、今の板きれは何だ？」

「ん？クリップボードか？これはここの留め具で紙を留める道具だ。下に板があるから持ったまま書けるし、紙も手で直に持つよりかはよれない……タダじゃやらんぞ」

「ちっ」

Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００から新しく出したクリップボードの留め具をパチパチと動かしながらアイザックに説明する。クリップボードは各種馬鹿みたいに集めたからＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００の中でもクリップボードの数は一番に多い。しかし、例え友人に舌打ちされてもタダでやるなんて馬鹿なことはしない。この世界の筆記用具は羽ペンではあるけど、魔法でインクが羽に固定された物が普及しているらしいので問題はないはずだ。見た目は黒い羽ペンだが、使っていく

と徐々に羽が白くなるというボールペンみたいな物だと昨日学院都市の話を聞いたおっちゃんに聞いた。現にアイザックがさっきまで使っていたのもそうだから、大丈夫なはずだ。値段も手頃だったし。

「そうだな……一枚２０ギルでどうだ？」

「高い。１０だ」

「［Ｂａｒｔｅｒ８５％］今後の実用性を考えてみろ。まけても１５ギルだ」

「［成功］まぁ、そうだな……わかったよ。なら１００枚くれ。金は後で渡す。経費で落ちるよな……いや、落とす」

「毎度あり～」

思わぬ収入に口元が綻ぶのを抑えつつ、クリップボード１００枚を部屋の隅にドサッと置く。ついでにもう６枚取り出し、アイザックとララちゃんの前に置いた。元がウィスキーと同じくタダだから、もうウハウハだ。ゲームで収集家だったかいがあったってものだ。

「アイザックにはまとめ買い特典として更に５枚、ララちゃんには待たせたお詫びであげよう」

「えっ、いいの？やった！これで野外実習とかの時に苦労しないですむわ！ありがと！」

「てめぇ……タダじゃやらねぇって言ってたじゃねぇかよクソッタレ」

「阿呆。期限切れのタダ券渡して恥かかせてくる馬鹿と美少女を一緒

にするな。違いがでて当然だろうが」

「げっ、あれ期限切れてたのか……そういや貰ったの去年だったな」

アイザックのその言葉にララちゃんがやっぱりバカね、とつっこむ。それに言い返す余地が無いためアイザックは一度舌打ちしてから話を変えるため喋り出した。俺が美少女と言った時に当たり前と言うように無い胸を張ったララちゃんがひどく可愛らしく見えたのは余談だ。

「さて、話が脱線したが頼みたい事がある。ララを呼んだのもそのためだ」

「出来る限りの事はしよう。で、何だ？」

「まぁそう身構えるな。ただ昨日のアレを学院の研究室に持っていってほしいだけだ。ララはその道案内をしろ。コウヤが学院内で不審者に思われない様にな」

「依頼の報告の後にそのまま連れていかれて何を言うのかと思えばそんな事？まぁ、コウヤさんにコレも貰えたから良いけどさ。昨日のアレって何よ？研究室に持ってくんだからよっぽどだとは思うけど……」

ララちゃんは知らない様で首を傾げているが、昨日のアレと言えばデスクローしかないだろう。というかそれ位ギルドでやれよ。

「別に暇だから構わないが、何で職員でやらないんだ？」

「皆ビビって適当な理由つけて逃げやがってな。非番の奴等もどこで知ったのかいなくなったし……となれば、討伐して持ってきたお前し

かいないだろ」

ビビってって……まぁ化け物はこの世界じゃ別格で恐怖と死の代名詞的な存在みたいだからな。特にデスクローは最強種に入るし、死体でも十分怖い見た目だし。昨日のコーヒーを持ってきた職員が即行で逃げたのもそのためだろう。そのせいで広がったんだろうけど……ギルド職員としてどうかとも思うがね。

「はぁ、わかった。どうやって持っていけばいい？」

「すでにギルドの所有物になってるからお前の魔法具には入れれないからな……あんなデカイの入れれる箱も今は余りが無いし。よし、そのまま担いで行け」

「マジかよ……」

デスクロー担いで街中練り歩けと？デスクローなんか見せたら子供は絶対泣くぞ。でもかといってＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００に入れたら規約に色々と引っかかる訳で……それに研究室とか本職の学者さんにＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００は誤魔化せる自信ないから、余計に使いたくない。

「マジもマジだ。ついでに学院の図書館にでも行ってこい。ララの招待があれば少し手続きすりゃ入れるはずだ。お前の知りたがってる魔法についても初心者用の物から用意されてる」

「あれ？コウヤさん魔法の勉強したいの？」

「あぁ。俺はあんまり魔法についてよく知らないからな。せっかく学院都市まで来たんだ。これからのためにも基本原理程度は把握しとかないと、今後危なくなりかねん」

「ふぅん。まっ、コウヤさん冒険者だもんね」

ララちゃんが良い終わると、話は以上だとばかりにアイザックが席を立った。俺もここに来た用は済んだので、ララちゃんを即して立ち上がる。アイザックが言うには隣の部屋らしいので、アイザックに挨拶して部屋を出た。そして言われた隣の部屋に入ると、様々な素材が置いてある中心に死体であるにも関わらず異様な存在感を醸し出しているデスクローの死体が寝そべっていた。持ってきた俺が言うのもなんだが相変わらず怖ぇ。

「ね、ねぇコウヤさん。まさかとは思うけど……アレ？」

「あぁ、昨日俺が持ってきた」

「頼みなんて聞くんじゃなか……って嘘ぉ!?」

先程までビビっていたのが嘘のように耳元で叫ぶララちゃん。耳が痛い……。

「デスクローっていえば兄貴が他のギルドマスターと組んでやっと倒せたって化け物よ!? いくら遺物があるからって……！」

「そう言われてもなっ、と」

ララちゃんの言葉に苦笑しながら、俺は中心のデスクローを肩に担ぐ。尻尾や爪が地面に擦れるのは勘弁してもらおう。研究のための検体をこの状態で提供するんだから、ｓｐｅｅｃｈスキルやｓｉｅｎｃｅスキルで文句は言わせないつもりだがね。

「信じられないならアイザックかフェリカちゃんに聞くといい。それ

でもと言うならばギルドカードも見せるが？」

「むぅ……そこまで言うなら、本当みたいね。ごめんなさい。あんまりの事だったからつい」

「ははっ、いいさ。じゃあ気を取り直して、案内を頼めるかな？」

「えぇ、任せなさい！」

またもや無い胸を張って悠々と歩き出すララちゃんに近所の子供的な何かを感じて癒されつつ、俺はデスクローを背負い直してついていった。カウンターのフェリカちゃんと通りの職員に軽く悲鳴をあげられたのは余談だ。

二十三話目

ギルドを出てギルド通りを真っ直ぐ進む俺とララちゃん。そんな俺達の前はモーゼの如く人が割れて、穴が空くほどの視線が注がれている。まぁこのデスクローは通常サイズより少し大きいし、それを楽々担いでいる俺も十分異常なんだけども。

「な、なんだか居心地悪いわね……」

「まぁ、デスクロー担いでるからな。文句は箱を用意してなかったアイザックに言うように」

「そうね。次に会った時は一緒に学食のケーキ全部奢らせてやるんだから！」

やけにテンションの上がり出したララちゃんに思わず苦笑する。この子はそれで結局自分が太って困る事をわかってるんだろうか？多分わかってないだろうけど、言わないでおこう。

「ほら、ついたわよ。ここがフェルナンド魔法学院のギルド方面口。って言っても他と対して変わんないんだけど」

そうこうしている間に門に到着し、門のすぐ横にいた警備の人に許可証を発行してもらってる間に簡単に説明してくれた。白い先の尖った四角い石柱を両端に置き、どこの城だと聞きたい位の巨大な木製の両開きの扉がある。その周りも煉瓦造りの塀で囲まれているため、そう簡単に突破は出来ないだろう。理由を聞けば、まだ学院都市では無かった規模の小さい頃に、時折現れる魔物から生徒を守るためにここまで強固にしたとか。今現在は当時の名残として記念物扱いや防犯用として使われている。それにどうやら各通り毎に門が増設

する形で設置されているらしい。俺としては何で最初に魔物も出る所に作ったのか不思議でしょうがない。

「はい、これ許可証ね。ここにいる間はずっと首に下げてる事。じゃないと不審者扱いされて警備に突き出されるわよ」

「了解。まぁ、外すような事は無いから大丈夫だと思うけどね」

「それもそうよね。じゃ、行きましょ？研究室だから特活棟に行かないと……」

青い紐に『ゲスト』と書かれた紙をぶら下げている許可証を首に下げて、歩き出したララちゃんを追いかける。石で固められて整備された区画、地面剥き出しの運動用っぽい区画、草木の生えた中庭っぽい区画やら……とにかく広い！建物は塔みたいなのから体育館みたいなのまで様々な種類があった。しかも、休みの日にも関わらずそこそこな数の生徒も見かけた。皆ビビって逃げていくか遠目から友達とヒソヒソ話してるかだったけど。

「今日って休みの日じゃなかったか？」

「そうよ？でもそれぞれ専門にしてる学科が違ったりするから、課題とかで学院に来るのも珍しくないわ。薬草学とか治癒魔法とかの医療関係だったり、他の共通筆記科目なら尚更ね。私は冒険者志望だし、魔法剣士タイプだから共通科目以外は依頼の達成報告で来る位かな？」

「へぇ、ララちゃんは冒険者志望か。アイザックも鼻が高いだろうに」

「ふふん、当たり前よ。こんな可愛くて将来有望な美少女が妹なんだもの！それなのにあのバカ兄貴ときたら……聞いてよ！あいつった

ら――」

もうそれから道中延々と、アイザックを誉めてるんだか貶してるんだか良くわからない愚痴っぽいのを聞かされる事十数分。まぁまとめるとお兄ちゃんが構ってくれない、だ。アイザックもあんな性格だし、ララちゃんも強気というか頑固というか……素直になれない性格みたいだから、余計に上手く伝わらないんだろう。でもアイザックも昨日のクソガキとララちゃんを見たときは目の色が変わってたから、あいつもあいつなりにララちゃんを心配してるみたいだった。ララちゃんも何だかんだでお兄ちゃんっ子なんだと思う。次にアイザックに会った時にさりげなく伝えておこうかね？

「――でね？あの時のお兄ちゃんがカッコイイのなんの……っと、ついたわ。話はまた今度ね？ここよコウヤさん。」

「ソウッスカー」

前言撤回。この子は何だかんだではなく完璧にお兄ちゃんっ子、というかブラコンだった！語り始めて数分、最初はアイザックの悪いところばかりで貶してはいたが、まぁ理由付きだったりで許す。みたいな会話をしていた。そしてそこから段々とアイザックが自分を守ってくれてるだの、あの時のお兄ちゃんはかっこよかっただの、ぶっちゃけお兄ちゃん大好きだの……徐々に壊れてきたと言ってもいい。要はただのツンデレかと思えば少しヤんだブラコンだった、というなんとも言い難い事だったわけだ。

「ここが研究室がある場所なんだけど……鍵がかかってるわね」

俺が少しぐったりしているのをそのままに、ララちゃんは特活棟から少し離れた場所にある研究室というか小型体育館サイズの研究所の扉を引っ張った。しかしララちゃんの言うように鍵がかかってい

た様で、ガチャンと音がする。ぶっちゃけヘアピンとおれのＬｏｃｋＰｉｃｋスキルで開けられるタイプの鍵穴だ。不法侵入になるからやらないが。

「どうするんだ？ここで待つっていうのもアリだけど？」

「え～、そんなの嫌よ。私はギルドの依頼こなしてそのままだから、早く帰りたいもの。だから、職員室に行ってみましょう。研究室の先生じゃなくても、誰かいるでしょ」

ララちゃんの一言で行き先を変更し、一路職員室へ。途中まで来た道を戻り、整備された道を曲がって煉瓦造りの校舎に入る。デスクローが引っかかりそうになったものの、ララちゃんのおかげで傷をつける事なく職員室へ。やはり道中生徒が見ていたけど。

「失礼しまーす。１年Ａ組のララ・ザグレブです。研究科の先生いらっしゃいますか～？」

「ん？あぁ！ザグレブさんですか！っとなると、もうお届け物がご到着というわけで!?」

中に入れば席に座っている教師教師教師……会議中だったことがありありとわかる。その中で一番奥にいるよれよれの白衣を着たメガネをかけた優男が興奮気味にこちらに手を振ってきた。しかし一番奥の席からそうすると自然に他の教師の視線も集まるわけで。

「お、おい君。その肩に乗っているのは……」

「デスクローですが、何か？」

「「……」」

俺の言葉にあんぐりと口を開けて固まる教師陣。中には気絶した女性もいるが……もうだいぶ馴れてきたからこれはスルー。俺はそんな教師陣を傍目にそのぼさぼさの白髪を揺らしながら鼻息荒く駆け寄ってくる受け取り側だろう先生に目を向けた。身体の線も細く、若いが完璧に学者型だというのがわかる。彼は俺の前に来ると、おぉ！おぉ！と言いながらデスクローをぺたぺた触っていく。それからクルリクルリと2，3回周りを回ったかと思えば、いきなり肩を掴んできた。

「素晴らしい！ここまで綺麗なサンプルを見るのは初めてだよ！今までは腕だけとか吹き飛んだ下半身だったからね！これは……見事だ！ありがとう！これで私の研究も格段に進むはずだよ！ハッハッハッハ!!」

「は、はぁ……」

血走った眼でかなり早口でまくし立てられて思わずひるむ。そんな俺を見たからか、ララちゃんがクイッと袖を引っ張って耳打ちしてきた。

「この先生こんなんだけど研究科の教授。まだ若いけど化け物研究の第一人者って言われてるわ。今ギルドにある化け物図鑑を作ったのも、この人」

「ほぉ……」

未だに目の前で高笑いしている教授を見て少し疑わしく思ってしまうが、ララちゃんが言うなら本当なんだろう。言われなけりゃ甚だ疑問ではあるけども。

「あ、いや、失礼。私としたことがはしゃいでしまったよ。じゃあ早速研究所に行くとしよう」

「あれ？先生会議は？」

「会議内容はデスクローの完全な死体が届く事の説明と私がそれを研究する事の報告だから問題ない。あとは精々今後の日程位か。まぁそれは後で書類を貰えば大丈夫さ。それよりも早く私は研究を開始したいのだよ。実際に討伐した本人もいることだし、いろいろと話を聞くからそのつもりでいてくれたまえ」

「あ～、了解」

嬉々として話す教授のキラキラとした目を見て、逃げられないとわかった俺は諦めて素直に頷く。横にいたララちゃんが憐憫の目で見ていたのに肩をすくめながら、俺達はデスクローにびびっている教師達をそのままに、職員室を後にした。

二十四話目

教師達をスルーして研究所に戻って来た俺達は、教授が鍵を開けたのに続いて中に入った。ララちゃんもデスクローがどうなるのか気になるらしくついてきている。

「うわ……これはまた」

「どうだい？凄いだろう？」

中に広がっていたのは、この世界において化け物と呼ばれるミュータント達の標本の数々。そして何故かグツグツ煮立っている緑色の液体の入ったビーカーやらフラスコやら……どこからどう見てもマッドです。

「ふっふっふ、これこそ私と部下達の研究のたまものだ！長い年月をかけてようやくここまでたどり着いた。そしてこのデスクローによって私たちの研究は更に進むことだろう。感謝しているよ」

「いやぁ、俺としては出てきたのを倒しただけなので何とも言えないんですけどね」

よっこいしょ、とデスクローを教授に指示された机の上に置き、ぐるぐると肩を回す。バキバキと景気のいい音が肩から聞こえてすっきりした俺は、改めて辺りを見渡す。標本とされているのはフェラルグールにモールラット、バラモン、顔の潰れた傷だらけのミレルーク、更には小型の檻に入れられたラッドローチ……うぇ。まだカサカサ言ってるし。

「……ラッドローチは飼ってるんですか？」

「むっ！ラッドローチという名前を知っているのかね！これは期待出来そうだ……おっと、質問に答えてなかったね。そうさ、私達はこいつらを研究のため飼っている。度々檻を食い破るのがいただけないがね」

「檻を食い破る程度はまだ生易しいですよ。まだ人を食ったとかがなくて良かったです。今度からは何重にも檻をかけた方が……何か？」

俺としては至極当然な感想を言っただけだったが、何やら教授とララちゃんが驚いた顔をしていた。そしてポカンとしていた二人は少ししてから口を開いた。ちなみにラッドローチは３０ｃｍぐらいの放射能で変異したデカいゴキブリだ。しかしゴキブリだからこそナメちゃいけない。何でも食い破るし、やはり生命力が凄い。ピストル位なら何発か耐えるからな。

「……ラッドローチは、人間も食べるの？」

「あれ？知らなかった？」

「私も初耳だ」

……あれ？選択肢ミスった？

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ教授

化け物研究の権威。そう呼ばれていた自分がいかに天狗になっていたかを、私は思い知らされた。

私達がラッドローチの研究を始めてまだ5年も経っていないが、彼、コウヤ・キサラギの――どこか諦めたように――言ったラッドローチの生態は研究結果を見直しても筋の通った完璧なものだった。まずラッドローチは暗がりや狭い所を好むが、基本的にどこにでも生息する。そして雑食で、顎の力がやたらと強く、生命力と適応力が高いというのが私達が時間をかけて研究した結果だった。

しかし彼はラッドローチの生態から起源まで、全てを理論的に語った。曰く、ラッドローチの先祖はこの星に生物が生まれてそう遠くない頃にはすでにいた。適応力の高さは進化の過程で得た物だろうということ。そして放射能という毒にも耐えて進化し、今の姿になったらしい。

他の化け物も同じで、その放射能なる毒に犯された故に変異した者達だとか。しばらく話を聞いていると、研究者たる私が確たる証拠も無く信じるのに疑問を持ったらしい彼がどうしてか尋ねてきた。

「他の人には言った事はないが、私はメガトンの科学者に知り合いがいてね。彼女が君と似たような事を言っていたのだよ。化け物は何かの要因によって変異した生物ではないか、とね。まぁ、その後色々あって彼女は学会を追放されてしまったが……」

「……なるほど。メガトンか」

ぼそりと呟く彼の言葉は聞こえなかったが、私はそれを気にする事

なく思考する。彼女の研究結果を踏まえて彼の話を聞くと、より現実味が出てくる。ここで思ったのは、彼の知識量が私達のそれよりもはるかに多いということだ。彼はあまり気にしていないようだが、ラッドローチと放射能の話だけで1時間弱話し込んでいる。レポートのまとめると10枚単位で紙が必要になる内容だ。それを理論的に、かつ自分の経験も踏まえて話す彼は、私も含め横に居るザグレブさんもその話に聞き入るほどに話し上手だった。

「――と、このように放射能の危険性は生物の構造の根本から変えてしまうほどで、それは人間、おそらく亜人も例外ではありません。この世界に今どれほど放射能が残っているかはわかりませんが、非常に危険だということには変わりないです。まぁ、一介の旅人の話を素直に信じるかどうかはあなた次第ですがね」

「……いや、信じよう。ここまで理論だてた話を嘘だとは思えないからね。穴も無いし、その説が一番合っているはずだ。他の研究者には証拠も見せないと信じてもらえないだろうが、君の話し方なら大丈夫なはずだ。ちょうど研究も行き詰っていた所だし、デスクローを調べるにあたって君の話に乗ってみるのも悪くはないだろう。最も、ここまで達者な嘘つきだったとすれば話は別だが……君には何の利益も無いだろうからね」

正直に言って、ここにある化け物以外の研究は行き詰っていたというよりほとんど無理だったと言った方が適切だ。というのも、これら以外の化け物は大半のギルド員の手に負えるものではないのだ。デスクロー然り、スーパーミュータント然り……これらの化け物は元々効きづらかった魔法が更に効かず、しかもその強靭な肉体でもって斬撃や矢は効果が薄い。そのためもっぱら攻撃方法は打撃や他の衝撃を与えられる何か、もしくは高価な遺物をもってして行う。しかしそのせいでようやく倒した死体は損傷が激しくなる。遺物を使えば楽だがその分金はかかるし、穴だらけで調査出来る部位は極端に少な

い。だから奴らの情報は調査や研究結果ではなく目撃例や実際に戦って生き延びたわずかな者達の意見を参考にしたにすぎないのだ。

そんな状況で彼はこうまで綺麗な死体を持ってきてくれた。そして情報も。これだけの物があれば現在の調査方法でも十分な結果が見込める。彼の説が正しい可能性も研究者の一人が唱えていた事も踏まえて捨てきれない。そして可能性が少しでもあるというのなら、研究者としてやらないわけにはいかないだろう。

可能性を一つずつ消していって真実を導き出すのが、私達研究者の役目だからな。

Ｓｉｄｅコウヤ

まずった。本当に色々とまずった。今目の前の教授は俺をジッと見ながら何やら考えてるし、ララちゃんはララちゃんで俺が言った事をクリップボードに紙を――机にあったのを勝手に取っていた――挟んでメモしてる。

いや、教授にラッドローチと放射能についての説明をするのは良かったんだ。でもそれを本気でガッツリ説明したのがいけなかった。Ｓｐｅｅｃｈスキルもいつの間にか発動していて、向こうからすれば理にかなった信憑性のある話として頭に入った事だろう。俺の微妙に細かい性格が災いしたな……これはもう腹くくるしかないか。

「ふむ……コウヤ君。君の話は大変興味深い。どうだろう？しばらくの間その話を詳しく教えてくれないか？報酬はあまり出せないが……」

やっぱりか。まぁ研究者の息子としてギルドに登録してるからこれくらいは大丈夫だろう。それに報酬ももらえるんだ。やっても別に構わない。しばらくここにいることだしな。

「わかりました。しかし、報酬としては金銭ではなく情報をお願いします。主に魔法の事についての」

「おぉ！引き受けてくれるか！しかし、報酬はそんなものでいいのかい？私からすれば願ってもない事ではあるが、普通冒険者の報酬は金か素材等の形に残る物ではないのかな？」

「金はとりあえず大丈夫ですし、俺は結構田舎から出てきましてね。魔法に触れることがとんとなかったんですよ。今後魔法使いが敵に回らないとも言えないので、1から教えて頂くのが条件です。他にも質問するでしょうからそれも踏まえてもらいます」

「ふむ……君がそれでいいなら構わないよ。まぁ、生徒に教えるのとそう大差はないだろうしね。明後日に君用のゲストカードを用意させるから取りに来てほしい。それから――」

その後しばらく話し合いを進め、明後日に今首にぶら下げている一時的なゲストカードではなく、教授の客として学院に入れるカードを取りに行く事になり、それから化け物について話すことになった。それと、図書館の使用もカードをもらい次第で許可を得るそうだ。一部閲覧不可な所もあるそうだが、それくらいは許容範囲だろう。

俺と教授は他にも色々と契約を交わして、それらを書いた誓約書を3枚書いて互いに持ち、もう1枚はギルドのアイザックに渡す事になった。というのも、俺みたいなギルドの冒険者はギルドに所属している為にこうした正規な個人宛ての依頼でもギルドに連絡する必要がでるんだ。これはギルド側がギルド員の現状把握と、どんな人にどう信頼されて個人依頼を出されたのか、そして俺達冒険者側はギルドがもう1枚の誓約書を持つことで互いに詐称される心配がなくなる。

俺は誓約書の内容を確認し、教授のミハエル・ハーグレーブというサインの下にサインし、拇印を押した。

二十五話目

なんだかんだで夕方まで延びた話し合いと雑談を終え、ミハエル教授と誓約書を交わしてララちゃん経由でアイザックに届けてもらう事を約束したのちに俺は二人と別れて宿に戻っている。というのも、詐称を防ぐためにギルドに出すのに当事者が持っていたら意味がないからだ。まぁララちゃんは疲れたと言って寮に戻ったので提出は明日になるだろうけど。

「うん？コウヤじゃないか。おかえり」

「ただいま」

宿に入ると、丁度クレアがウィスキーを客に出している所だった。それを見て、朝と同じくまた空いていたカウンターの席に座る。ざっと見ただけでもウィスキーを飲んでいる奴らは結構いた。これは客受けは上々と考えていいだろう。そして少しするとクレアが空になったウィスキーのボトルを手に持ってこちらに来た。

「調子はどうだ？パッと見そこそこ売れてるみたいだけど？」

「上々ってところかね。丁度常連の行商人が来てくれたから出してみれば、好評だったよ。そいつは女のくせに無類の酒好きで有名でね。美味い美味いと飲むもんだから、そこから少しずつ広まって、珍しい酒が飲めるって客が集まりだしてるよ」

「そいつは僥倖」

「まぁ、そいつは今日は仕事場に泊まるみたいでいないけど、上手い具合に他にも冒険者のパーティが何組か依頼を終えて戻った所だった

みたいだし、運も良かったみたいだけどねぇ」

そう言ってカラカラと笑うクレアに俺もつられて笑う。規模がどうかは知らないが、パーティが数組戻ったというのはここらの商売人には朗報だろう。特にこういう宿関係にとってみれば待ってましたと言わんばかりのはずだ。

そう考えると昨日よりも宿内の人が多い。酒飲んで帰るやつもいるだろうが、泊まる奴が普段より増えるのは確実なはずだ。クレアがホクホク顔なのも納得出来る。俺は一頻り観察して、Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００から追加のウィスキーを出す。

「朝言ってたやつだ。仕事が終わり次第飲むといい」

「おぉ！ありがとねコウヤ！約束を破らない男は大好きさ！」

そう言って一度俺に抱きついた後、ウィスキーの瓶にキスをした。うん、色々当たっていい匂いがして最高だったと言っておこう。

「それじゃ、約束は果たした事だし、晩飯を頼むよ。なんだかんだで昼は食べられなかったからさ。多めでよろしく」

「ん、わかった。じゃあちゃちゃっと作ってくるから待ってな。今日はヴェスペディと山菜のパスタだよ」

「おぉ、了解。パスタは好きなんだ。頼んだぞ～」

ウィスキーを手に持ってキッチンに向かったクレアを見送り、俺はＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００からミニ・ニュークの報告書と鉛筆を出して頭の中の知識を書き写していく。こういう空いた時間を有効活用しないと来週までの期限には間に合わないからな。とにかく書くのは

こいつの危険性とおおよその被害範囲、被害を受けた後に起こり得るグール化の可能性とグールは《普通》のやつなら外見を除いて人間と変わりない事などなど色々書き綴っていく。そしてフェラルに変わることは無い事も。特にグールの人権的な所を重点的に。この身体でだけど、ゴブやカロンみたいな友人はいることだしね。彼らは結構好きなキャラだったし。

ちなみにヴェスペディとは鳥の一種で柔らかな肉質と飼育のしやすさでこの世界では一般的な鶏肉だ。値段的にも安いし歯ごたえあるガラガラ鳥とは違って少し癖はあるが中々美味いんだ。個人的にはガラガラ鳥のほうが好きだけども。

「はい、お待ち。とにかく大盛にしといたよ」

「おぉ……これはまた」

水と一緒にクレアが持ってきてくれたパスタは、周りの人達のように四角い白の皿ではなく、青い陶器の丼に入っていた。もうなだかパスタとは別な料理に見えてくるのは何故だろう?食えるけども。

「あれ?コウヤ、何書いてんだい?」

「これはギルドに提出する書類。貴族の坊ちゃんが危険な遺物をおもちゃ代わりにしてたもんだから、その遺物の処理さ。一応これでも遺物には詳しいつもりだから、危険性やらなんやらを纏めて提出しなけりゃいけないんだよ。これな?解除済みだから安全だけど、もし見かけたら注意しておくかギルドに報告してくれ」

「ふ〜ん、こんな緑のおもちゃみたいなのがねぇ……まっ、私も気をつけとくよ。店を吹っ飛ばされたらたまらないからね」

Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００から見本として渡したミニ・ニュークを受け取り、一度報告書を片づけて目の前の丼に向き合った。

翌日、朝7時に目が覚めた俺はそそくさと飯を済ませてクレアと雑談し、宿を出た。今日一日は自由なのでとりあえず観光でもしようと思う。ギルドに行っても一日で出来る依頼なんか少ないし、学院には明日行くしだからこれしか選択肢が残ってないともいえるが。宿でごろごろするのにも暇つぶしがないから逆にキツイ。ゲームなんてギャンブルかトランプみたいなのしかないしね、この世界。相手がいればまた別だったんだろうけど。

レスト通りから露天を冷やかしながら移動して、コーシャル通りに入る。日用品や雑貨、レストラン等が所狭しと並んでおり、商人や呼び子の人達の声が行き交っている。冒険者や荷馬車の姿も多く見え、何人かは値切り交渉をしながら買い物している人も見かけた。粗が目立つな……あんな値切り交渉じゃあ安くなる物も安くならないぞ。

「……ん？」

そんな風に色々と見ながら歩いていると、何やら聞き覚えのあるカラコロカラコロというベルの音がする。気になったので探してみると、居並ぶ馬車に隠れて数人の護衛と最前列を歩く女性に囲まれた赤いバラモンを発見した。

バラモンとは、核戦争による放射能により変異した牛の事だ。肌は真っ赤で頭が二つに分かれており、気性は縄張りや子供の近くに入らない限り穏やかで変わらず人に飼育されていることが多い。馬がいないウェイストランドで行商人に連れられたり、食用として飼われていた。今はどうか知らないがゲーム時には数が少なく、野生のバラモンを見るのは希少な生き物だった。最も、Ａｎｉｍａｌ　Ｆｒｉｅｎｄのｐｅｒｋｓのおかげで野生のバラモンの縄張りに入って襲われる事はなかったんだけど。

とにかく、そのバラモンがいて、更に見た目もゲーム同様緑のバッグを下げてベルを付けている。しかも護衛と女性は銃を持っているとなると、かなり気になる。ちなみに護衛と女性を何故分けているかだが、護衛らしき奴らはコンバットアーマーを全員着込んでいるが、女性はチェックのシャツにズボン、ブーツ、茶色のカウボーイハットと明らかに違う格好だからだ。恐らく彼女がこの商隊のリーダーだろう。というか、明らかに現地人だ！話しかけるほか無いだろう！

「……さて、第一現地人はどんな人かな？」

何だか無性にワクワクする気持ちを抑えつつ、俺は先に進んだ彼女達を追った。……一応消音器付き１０ｍｍピストルとコンバットナイフを装備して。だって下手して喧嘩にでもなったら丸腰じゃ危なすぎるし、もし当時とさほど変わりない現地人なら尚更だ。

「……ギルド？」

しばらくカラコロカラコロと何だか異様に懐かしく感じる音を聞きながらついて行くと、バラモンはギルド前に止まり、女性は２人の護衛をバラモンに付けると残りを連れて中に入っていった……なにやらあそこからは見づらいがこちらからは丸見えな脇道に隠れてい

る怪しい男が2人いるが、まぁ俺には関係ないか。あの護衛が何とかするだろう。ふむ、なら俺も入ろうか。

「へぇ、あんた銃使うのか？こっち側で銃使う奴を見たのは久しぶりだぜ。まともに使えんのかは別にしてな」

「え？あ、本当だ。珍しいですね。僕は初めて見ましたよ」

ギルドに入ろうとすると、扉横の壁に寄りかかっていた護衛に声をかけられた。先に声をかけてきたのはアフリカ系の図体のデカい筋肉質でスキンヘッドの男だ。背中から見える銃底から武器はアサルトライフルのようだ。次にその男の横からひょっこり顔を出したのは真っ黒な男の肌と対称的に白人系の爽やかな感じの美がつく少年で、オレンジ色の髪を肩ぐらいまで伸ばしている。腰には．３２口径ピストルと１０ｍｍサブマシンガンを装備していた。パッと見かなり使い込んでるというか、壊れかけ寸前なのがいただけないが。

「ハッ、そんな暴発しそうな銃を装備している奴に言われたくはないな。ウェイストランド人なら赤ん坊でももう少しマシな整備をするさ。まぁ、あんたらが本物のウェイストランド人か、見た目だけの張りぼて野郎かどうかは別にしてな」

「なっ！このやろ「それに！」うぉっ!?」

とりあえずムカついたので言い返すと、デカいのはアサルトライフルに手をかけ、少年はそれを見て呆れて静観にまわるようだ。全く、短気はいかんよ短気は。なんて考えながら俺はデカいのの言葉を遮って消音器付き１０ｍｍピストルを抜いてパスパスと乾いた音と共に引き金を即行で四発分引く。それと同時に彼らの後ろ、バラモンの近くでうめき声が聞こえ出した。

「うぐっ……！」

「痛ぇ！痛ぇよぉ！」

「お前いきなり撃ち……って、あぁ！てめえら何しようとしてやがった!!」

デカイのが文句を言いながらバラモンの方を見ると、そこには先程の怪しい男二人組がうずくまっていた。ようするに、さっきの発砲はこいつらの両足を全て撃ち抜くためだったんだ。なにやら俺に護衛二人が注意を向けた瞬間にこっちに来てバラモンに手を出そうとしたからな。素人なのかどうかは知らないが、タイミング早すぎだし、俺が向いてるのに取ろうとするなんてアホの極みだ。

「うはぁ……お見事」

「どうも。というか、お前ら俺なんかにつっかかってないでちゃんと護衛しろよ。怒られるぞ？」

それを聞いて成り行きを見ていた少年は苦笑しながら両手をあげて降参したとの意思表示をし、デカイのは盗人連中をバラモンから出した縄で縛っている。この学院都市、意外にも治安がいいとはいえないらしい。昨日の裏路地のヤンキー然り、今回の盗人然り、元の世界や他の国と違って自治組織が自警団しかいないのが結構大きいだろう。学院都市は騎士もいなければ常備軍も少ない。その常備軍も傭兵や学院に通っている金持ちの寄付のような形でいる兵士だけ。それでもなんとかやっていけてるのは、ここが交易の拠点である事と、各国の学生が学びに来ているため完全な中立という事、そして学院長が結構権力がある人というのがある。自警団も頑張ってるみたいだけどね。

「えぇ、そうね。ちゃんと荷物番も出来ない隊員にはお仕置きが必要よねぇ……！」

その声に振り返ると、苦笑しているカウボーイハットの女性と護衛3人、そして拳をバキバキと鳴らしながら近づいてくるオレンジ色の前髪をかきあげて後ろで小さなポニーテールにしている護衛の女性がいた。それからしばらく後ろで小さな悲鳴を上げた2人がボコボコにされるのを見ながら、俺はとりあえず合掌した。

二十六話目

「あなた達は何をしでかしそうになったかわかってるんでしょうね!?」

「で、でも未然に防げた訳だしよ「だ・ま・れ!」……はい」

「それは彼のおかげよ!私達みたいなのは信用第一!そしてそれは私達が代々一番気をつけてきた事でしょうが!」

盗人を自警団に引き渡し、2人の物理的制裁が終了した現在。次は言葉による説教が始まった。ギルドの中で邪魔にならない隅の方で正座させられながら叱られている2人は、もう涙目だ。デカいのは反論も許されず、少年はすでに真っ白になって燃え尽きながら悟りを開いたような顔をしている。そんな中で俺はというと、荷物を盗られるのを防いだ事でギルド内の円卓で護衛3人も含めて共に座って昼飯を奢ってもらっている。やはりカウボーイハットの女性がこの行商人、改めキャラバンの持ち主で、今2人に説教している女性が護衛のリーダーだそうだ。ちなみにギルド前で騒いだためにアイザックがダルそうに出てきたが、説明すると「仕事が増えた……」とか言って中に入っていった。今度何かしら詫びの品を持って行こう。

「あはは……あれは長くなるだろうから放っておきましょ。まずは自己紹介ね。私の名前はローズ・オブ・シャロン・キャシディー。長いからキャスでいいわ。形式上もう一度言うけど、このキャシディー・キャラバンの所有者ってとこ。基本的に今回みたいにギルドに物を納めたりしてるわ。他にもあるけどね」

カウボーイハットを脱いで机に置き、よろしくと言ってくるキャス。帽子の下に隠れていた髪は赤いショートカットで、結構美人さん

だ。背中にはコンバットショットガン、腰にはコンバットナイフを装備している。

「それで彼らは私とキャラバンの護衛で、今説教している子がリーダーをしてるわ」

「紹介された護衛のロドリゴだ。このパーティ『ライリー・レンジャー』の副隊長をしてる。本来なら隊長のライリーがここで話すべきなんだが……彼女、説教長いんだよ」

「……ライリーだって？」

コンバットアーマーとヘルメットを被り、黒の短髪に銃身の溶けかかったレーザーピストルを装備したロドリゴの言葉に思わず聞き返す。ライリー・レンジャーといえばゲーム中にも存在し、傭兵稼業をやっていたからだ。クエストでマッピング作業中にスーパーミュータントに襲われてD．C．廃墟のホテルの屋上で身動きの取れなくなった彼らを救出するものがある。俺は一人も欠けることなく救出に成功していたわけなんだが……まさか子孫？そうやって見るとライリーなんかは名前も姿かたちもそっくりだ。

「あぁ、そうだが……どうした？彼女知ってたのか？」

「ん？あ、いや、なんでもない。昔の知り合いに同じ名前のやつがいてな。続けてくれ」

怪訝な顔をしてくるロドリゴに手を軽く振って先を促す。そういえばゲームの会話にも信用大事みたいなの言ってたなぁ……それによく見たらコンバットアーマーの胸の部分にライリーのマークあったわ。これで子孫、もしくはあのライリーから続いてきた組織の可能性が高くなった。傭兵よりもギルドに居た方が稼ぎになるからそこ

ら辺は変えていてもおかしくない。可能性として低いと思うが、ギルドで全く同じ名前でたまたま容姿がそっくりなだけってのもあるけども。

「そうか。まぁ続けると、俺の隣にいるのが重火器担当のネルソン。口数は少ないが、根が優しい良いオッサンだ。んでその隣が狙撃手のカノン。せっかくの美人を台無しにするほど感情出さないが、狙撃の腕はピカイチ」

「……」

「よろしくお願いします」

あのデカいのより凄いコンバットアーマーがはじけそうな程の筋肉と体の大きさ。そして床に置いているボロボロのミニガンでやけに凄みが増している。顔も渋くて整った短い口髭が生えており、無造作に切りそろえた髪と左目に真っ直ぐある縦傷が正直怖い。その道の人と勘違いしそうだ。でも黙礼してからライリーの方を心配そうに見てるんだからロドリゴの言った通りの人なんだと思う。

そしてもう1人の声に抑揚を感じないまるで機械のような女性、カノン。スナイパーライフルを机に立てかけ、背筋を伸ばしてピシッと座っている。肩まである少しウェーブのかかった灰色は少し旅のせいかくすんでいるものの、かなり綺麗だ。顔も微動だにせず、少し不気味ではあるが、陶器のような白い肌をしている美人さん。

「んで、あそこで説教くらってるハゲが弾薬担当のセオ。横の坊主が遊撃でライリーの弟のレオンだ。レオンは今回初参加の新人で、セオも……まだ入ってからそんなに経ってねぇな。セオは実力もそんなに無いくせにすぐに突っかかるアホで、レオンは慎重すぎる。まぁこんなとこだな。今度はあんたの番だ」

指をさしながら説明するロドリゴ。とりあえず、弾薬担当のセオと聞いて思わず止まった俺は悪くないと思う。というのも、ゲームの中で弾薬担当のセオはスーパーミュータントに殺された死体として出てくるからだ。勝手な感情ではあるが、死亡フラグ満載だなセオ。

「俺はコウヤ・キサラギ。今のところここに滞在中の冒険者だ。ギルドランクはCⅢで、ご覧の通り銃全般を使う。あと整備も出来るから、何かしら対価を払ってくれればやるぞ？腕はそこらの鍛冶屋よりは上のつもりだ」

「へぇ、銃の整備も出来るの。凄いじゃない。最近じゃ簡単なもの以外は、メガトンとかの鍛冶屋しか整備の技法が伝わってないのにね……そういうところの出とかなの？」

マジかよ……またミスったな。なんだか最近うっかりミスが多くていけない。まぁこれくらいならｓｐｅｅｃｈスキルでどうにかできる範囲内だが、とりあえず俺は首を横に振って、否定する。

「［ｓｐｅｅｃｈ７８％］いや、親がスーパーミュータントとかの研究者でね。その関係で一番効果の高い銃も扱ってたんだ。生きていくためには必要不可欠だったし、俺はそういうのが好きだったから、自然と覚えたよ［嘘］」

「［成功］なるほど、ご両親と環境による影響と言うわけですか。私も狙撃を父に習いましたので、わかります」

首を僅かに動かして、まるで機械音声を聞いているような抑揚のない声で肯定してくれるカノン。まぁ全部嘘なんだけど。こうも真っ直ぐ肯定されると微妙に罪悪感が出てくるような……止める気はないけど。

「それで、私はあなたに銃の整備及び修理をお願いしたいです。ここフェルナンドでは銃の整備が出来る鍛冶屋はいませんし、あなたの銃の状態と先程の射撃技術、手や腕の古傷を見る限り、整備や銃、戦闘に関する腕前はかなりのものとお見受けします。それにギルドマスターが信用している様子から、あなたは信用出来る方でしょう……すみませんが、銃を見せてもらっても？」

「あぁ」

足のホルスターから消音器付き１０ｍｍピストルを抜いてカノンの方に置く。するとカノンはそれを手にとっていろんな角度からしばらく見て、ありがとうございますと言った後返してきた。ちなみにロドリゴやキャス、ネルソンもそれを見て「ほぅ」とか「へぇ」とか言っている。ネルソンは変わらずしゃべってないが、興味深そうに俺を見てきた。正直怖いです。

「やはり、かなり状態が良い。鍛冶屋に出してもこれほどの状態にはならないでしょう。私もバカ高い新品以外でここまでの物は見たことがありません。しかも、かなり使い込まれて何度も整備した形跡もありますし……報酬は払います。私の銃を整備していただけないでしょうか？」

そう言ってゴトリと置かれたスナイパーライフル。許可をもらって持ち上げれば銃底は何かを殴ったように傷があり、銃身は少し曲がっている。全体的に傷だらけで、正直よく使って来られたなと思う。しかし、パッと見ただけでもいろいろ魔改造されているな。この銃に愛着があるのもよくわかる。

「おいおい、こんな状態でよく今までもって来られたな……素人なりに何とかしてたみたいだから完全に壊れてはいないけど、このパー

ティに整備士はいないのか？」

「以前はいたんだが、魔物に襲われた時の怪我で引退してな。今までそいつにまかせっきりだったばっかりに、全員このざまだ。今回やけに魔物どもに遭遇する回数が多かったのも災いした。いつもならこんなになることはないんだが……運が悪かったよ」

「……なるほど」

引退したなら仕方がない……のか？銃を使う以上もう少しこういう事に目を向けてもいいと思うんだけど。それかよっぽどその人が優秀だったのかね。やる前に状態を察して動けるすごい人だったり。

「まぁ、このくらいならすぐに何とかなるな。いいだろう。やってやる。報酬は終わってから決めよう。バラしてみないとどれくらいなのかわかりゃしないからな。それによって変わるが、いいか？」

「はい。よろしくお願いします。いい整備士にはそれ相応の対価を払わないといけませんしね。いい仕事を期待しています」

「ハハッ！任せとけ。完璧に仕上げてやるよ」

なんだか良いようにのせられた感はあるものの、職人意欲に火がついたので迷わず受ける。そしてカノンから改造している場所や絶対にいじって欲しくない場所などを聞いてメモをしておく。これはＰｉｐ－Ｂｏｙ３０００のＭｉｓｃ欄とメモ欄に表示されるので便利だ。カノンにこれだけ改造していてなんで整備が出来ないのか聞いてみると、これは父親からもらってそのまま使い続けてきた物なんだそうだ。メガトンには父親からの馴染みある店に頼んでいたからあまり知らないとのこと。

しばらくメモをしていき、武器を預かる。互いに誓約書も書いてギルドの職員に渡したので大丈夫だ。仲良くなったとはいえ、初対面には注意するのにこしたことはない。特に銃を預ける向こう側からすれば特に。ちなみに一連の出来事を見ていた他のメンバーにも整備を強請られたのは言うまでもないだろう。誓約書書くのが面倒だった……。

二十七話目

誓約書をギルドに渡して全員の銃を預かり、念のためその間の変わりの装備というか、まんま同じ装備を渡しておく。状態としては、まぁ壊れそうな物を渡して何かあって死んでしまったら元も子も無いのである程度な物を渡しておいた。このことでやっぱり驚かれたものの、誓約書に俺のやることなすことに深く介入しない事と馬鹿みたいに他言しない事を書いているのでそれだけだった。あちらさんもプロだからその辺しっかりしているはずだ。信用第一とかライリーが言ってたし、唯一心配なのはセオ位だろう。

それと、あれから少ししてからライリーと話した。まずは荷物の事への感謝とセオとレオンが俺にふっかけてきたことへの謝罪があって、これまでの事をロドリゴが伝えた。銃の整備云々でまた驚かれたが、そこはパーティリーダーであるライリー。すぐに損得勘定を始めて俺が信用に値するかを一度俺に断ってから仕事の休憩で出てきたアイザックに聞いていた。それと、何故か俺の名前をアイザックから聞いた瞬間にすごい勢いで振り返ってきたのが凄く印象に残っている。何か信じられないものでも見ているかのような目をしていたが……まさか、ね？

「さて、お仕事しますか」

飯を奢ってもらって向こうはまだやることがあるそうなので別れた俺は、とりあえず宿に戻って部屋で修理を開始する。セオ、レオン、ロドリゴ、キャスの銃は特に魔改造されてなかったので普通に楽なＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００の中で直す。二個一修理ですぐ終わった。念のため動作確認とかをする必要があるけどここでは流石に出来ないので明日学院に行った時にどこかグランド的な所が使えないか聞いてみようと思う。無理なら外に出れば良いだけだし。スキルマック

スな俺の目で見た感じとＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００内では大丈夫だったんだけど、ゲームの頃となにか変わっていたり本人の知らないところでいじくられていたりしてたら危ないからな。

そして問題なのがカノンとライリーの銃だ。カノンのスナイパーライフルは言わずもがな。下手にＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００でやって普通のスナイパーライフルになってしまったら目も当てられないので念のために自分の手で整備と修理をする。ユニーク武器が大丈夫だったあたり、大丈夫だとは思うけど……時間はかかるが手でも全然出来るので心配ない。というかむしろそっちの方が色々といじくれるので効果的といえば効果的なんだがね。

で、次にライリーの銃は普通の１０ｍｍピストルと超絶魔改造されたプラズマライフルだ。大体の見た目は同じではあるけど、見た目乾電池なマイクロフュージョンセルを付ける場所が普通のプラズマライフルではトリガーの前に縦に１つの所をその両側に２つ付ける場所が増えており、それに伴って内部構造も激変していた。さらに３つ同時使う事で従来の物の倍の威力を持っているために、言ってしまえば擬似ガウスライフル状態だ。しかも発射エネルギー調整が通常ライフル威力・最大威力・その中間威力と可能になっているという化け物仕様。なんでも御先祖から受け継いで溶けた銃口の取り替えとかいろいろ騙し騙し使っていたようだが、ついに調整部分とマイクロフュージョンセルを入れるマガジン部分諸々がイかれたらしい。

俺としてはよく今まで使ってこれたなと不思議で仕方なかったので聞いてみると、彼女の祖母の代までは修理の出来るグールが生きていて贔屓にしていたらしいが、材料採集をしている時にラッドスコルピオンの群れに襲われて亡くなったそうだ。グールに師事する奴なんて普通いないので技術は受け継げられてないためにそれから銃口を既存の物と取り替える程度で、とうとう……だとか。

「まぁ、俺はただ直すだけだしな」

どうやってこうまで魔改造出来たのか気になる所ではあるけど、俺は仕事をするだけ。無闇に人のプライベートに入っていく必要はない。誓約書に俺からそういうのをするなと書いてるのに俺がやったら本末転倒だし。とにかく俺は、Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００からカノンのスナイパーライフルを取り出して早速修理を開始した。

「ふぅ、完成だな」

すっかり周りが暗くなってようやくカノンのスナイパーライフルの修理が終わった。バラして使えるとこを選別し、他を修理や既存のでパーツを入れ替えたりと、結構疲れた。知識と経験のお陰でここまで早く終われたが、普通なら2・3日はかかる代物だったよ。あとは本人に持ってもらって微調整する位かな？流石に強度を上げたりするのは設備も材料も無いから出来なかったけど、整備と修理は完璧にしたから納得してもらおう。ちなみに残った使えない部品をかき集めると廃棄部品としてＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００に表示された。

部品を片付けた俺は腹が減ったので下に降りる。そしていつもの席に座ろうとすると、近くからついさっき聞いた事のある声が聞こえてきた。

「ん？おぉ！コウヤじゃないか！奇遇だな。お前もここに泊まったの

か？」

「コウヤ～、そんなとこに突っ立ってないでさっさとこっちに来なさ～い！」

陽気な声で呼んでくるライリーに苦笑しながら、いつものカウンター近くの丸机に近づいていく。座っているのはロドリゴとライリー、カノン、キャス、レオンだ。彼らの前には酒が並んでおり、キャスの前にはウィスキーがボトルごと置いてある。すでにライリーは軽く酔ってるみたいだが。

「本当に奇遇だな。まさか同じ宿とってたとはね。俺は2日程前だが、いつからだ？」

「僕達は今日の朝からですよ。昨日の時点で居たんですけど、他の仕事が長引きまして。今日からはキャスさんの知り合いがやってるこの宿に来たんです。ここにいない二人は自分たちの知り合いの所に行ってて、とりあえず今日はあいさつ回りするそうです。ここ、ご飯美味しいですからいいですね」

言い終わるとともに今日の晩飯だろう生姜焼きっぽい肉を口に運ぶレオン。それを見てて腹が減ってきたので近くに居た店員さんに頼んだ俺は、何故だか変わらず空いているカウンター席に座った。ちなみにクレアは今他の客の対応とウィスキーの準備に少し忙しそうだ。飲み方を教えたのはクレアだけだし、まだ店員に教えきれていないんだろう。当たり前だけどさ。

「そうだな。あぁ、そうそう。銃の整備の件だが、とりあえずライリー以外のはすでに動作確認以外は出来あがったよ。今日はカノンの銃で手いっぱいだったんだ。すまん、ライリー」

「いい……って、早っ!!渡したの今日の昼でしょ!?いくらなんでも早すぎるわよ!!」

「あはは……そこは悪いけど企業秘密ってことで、誓約書権限使わせてもらう。とにかく論より証拠。見るだけ見てくれ」

ツッコミまくるライリーと呆然とするメンバーに苦笑しつつ、一人一人に渡していく。唯一まだライリー一家の教育により年齢的に酒が飲めなくて食事をしていたレオンには悪いけど、報告は早い方が良いだろう。全員に行きわたったのを確認して貸していた武器を後程返してもらう事を言う。キャスは部屋に置いてきたみたいだからどちらにせよ後にするにしても、他のメンバーは流石護衛と言うべきか。遠距離のカノンのスナイパーライフル以外はここで皆装備している。さすがに宿で抜き身の刃物の類はないにせよ、よく見ればメンバーの配置もしっかりとキャスを守るようにしていることから、流石ライリーレンジャーだなぁ、としみじみ思ってみたり。それにさっきまでウィスキーがぶ飲みしていたキャスが一気に真剣な顔つきになったのに驚いたけども。

「これは、すごい。完璧ですコウヤさん。頼んだ部分を全て以前の、いえ、以前以上の完成度です。メガトンの贔屓にしている所ですらここまで出来なかったのに……」

「まるで新品じゃないか。あとは動作確認とかだけなんだろう?こいつは期待できそうだな」

「皆言ってるけど、すごいねこれは。私のコンバット・ショットガンがこんなにきれいに帰ってくるなんてね」

弾が入ってない状態で大丈夫な物は空砲を撃ってみたりするメンバー。非常に危ないんだけど、皆嬉しそうなのでとりあえず口には出

さなかった。

それから少ししてから再び銃を受け取り、運ばれてきた定食を食べながらメンバーと話をする。その中でライリー達の冒険録とかキャスの商売の話とかいろいろ聞くことができた。

しかもどうやらキャスは無類の酒好きらしく、ウィスキーをこれでもかと絶賛していたので何本かあげることにした。するとウィスキーをキャシディキャラバンでの個人向け行商の商品にしないかと持ちかけられたが、とりあえず保留とする。クレアに先に渡したんだから、他に渡すとなるといろいろ兼ね合いが必要になるからな。

「へぇ、じゃあクレアから許可取れれば良いってことね？」

「まぁ、そうなるかな。後は今後旅をする俺がどうやってキャスの元にウィスキーを持って行くのか、逆に俺への金はどうやって支払うのかとか決めないといけないが……」

「あぁ、そこは私に任せといて。どうするかは大体頭にあるから」

そう言ってウィスキーを一口飲んだキャスは、客の対応が一段落ついたのだろうクレアを呼びにいく。2人並んで歩いてくるけど、美人が仲良く並んでいるのはなんとも絵になる光景だ。甲乙つけがたいが、個人的にはクレアの方が好きだったり。

「コウヤ、キャスにもウィスキーを売るんだって？」

「あぁ。キャスが気に入ったみたいでさ。店に卸す事はせずに個人向けでやるそうだ。それならついでにこの店で飲める事も告げれば宣伝にもなるだろう。どうするかは任せるよ」

「うーん、まぁキャスならいいか。いずれウィスキーについてとやかく言われる時が来るだろうしね。それなら先に信用できる専売商人を持っているほうがいい。私はいいよ。ただ、売るときにしっかり宣伝することが条件さ」

「勿論！しっかり宣伝させてもらうわ！これでうちのキャラバンの需要も高まるわね。明日は仕事があるし、準備もしないといけないから誓約書とかは明後日ギルドでやりましょ。詳しい契約内容もその時に。コウヤもそれでいい？」

「あぁ。俺も明日は用事がある。それじゃあ明後日の朝食後に一緒に行くって事でいいか？」

「えぇ」

やけにニヤニヤしているキャスにクレアと二人して苦笑するも、互いの利益を願ってウィスキーを乾杯する。正直こうまで買い手がつくとは思っていなかったんだけどな……まぁ結果オーライかね？

二十八話目

全員でウィスキーで乾杯して飲み明かした次の日。俺は教授の約束通りに研究室に来ている。来た時に教授が門の前に来ていたから、許可証はすぐに手に入った。これで好きな時に中に入って行けるわけだ。勿論休日や指定時間外に入る事は禁止されているがね。その場合は俺は勿論の事教授にまで罰則が飛ぶからうっかりなんてことがないようにしないといけない。

ちなみにキャス達は昨日話していた様に仕事と俺との契約のための準備をするようで、二日酔いで頭を痛めながら宿を出て行った。意外なことにキャスは酒は好きだけどクレア程の酒豪ではないらしく、俺は勿論の事、クレアがほろ酔い気分な時には既にべろんべろんだった。ライリー達はその時点で酔いつぶれていたからアルスが頑張って部屋まで運んでいた。朝方になんで俺とクレアは大丈夫なのかと愚痴愚痴言っていたが。

「――と、まぁざっとこんな感じでしょうか。これらの変異や人体への影響は未だに不明な点が多々あり、現状では全て解明できたわけではないんですけどね。それにまだまだ見たことのない亜種もいるはずです。魔物と同様に彼らも進化していきますから」

ふぅ、と言い終えた後に一息ついて教授達へ目を向ける。現在教授への話は勿論、それにつられてぞろぞろやってきた学生や他の教員が俺の話を聞いている所だ。教授が熱心に俺の話を聞いてたから興味持って来たんだろう。正直言ってこんな講義のようにするつもりはなかったんだが、気づいたらこんなに……まぁとやかく言って来るやつらがいないだけマシなんだけど。

「ふぅむ……君の話はやはり実に面白いな。私達が今まで研究してき

たことも踏まえてくれているからわかりやすいし、体験談もある。なにより穴がない。しかし、事例が少ないために少しばかりどうかと思うものはあるがね」

「ははっ、そこは勘弁してください。聞くのと実際に見て体験するのでは違いますから。物的証拠というのもそんなにありませんからね」

「私達化学者が出張っていくわけにもいかないしね」

「なぶり殺されて身体を食われるのがオチですよ」

「「あっはっはっはっは!!」」

笑いながらＰｉｐ－Ｂｏｙ３０００を操作してデスクローの腕、ミレルークの新鮮な肉を取り出す。この一言と今までの話で周りの学生や教師は大半が顔を青ざめさせているのはこの際無視だ。いちいちかまってはいられんのさ。このあと銃の試射をしないといけないからな。教授からは第二演習場の使用許可をもらったし、そういうのを話しているのに興味本位で勝手に来たこいつらが悪い。

「一応これらも置いておきます。こいつのおかげで時間が止まっていますから、鮮度は高いですよ?」

「おぉ!昨日の時点でデスクローの腕をバラしていたから助かるよ。それにミレルークの一部とはいえ新鮮なサンプルが手に入るのは願ってもないことだ。こいつらは群れで移動するか巣を作っているかだから討伐する時は一斉に駆除されてしまうんだ。いいサンプルは中々手に入らないのでね。助かるよ。後ほどこれらの提供サンプルについての追加報酬は誓約書通りギルドの方に支払わせてもらおう。少なくてすまないが、後で取りに行くといい」

「こちらからすれば肉の塊を高値で買い取ってもらうような物なのでいいですよ。正直使い道に困っていたので」

「ははははっ、君にとってはその程度だろうが、我々科学者には宝の山さ。諸君！今日の彼の話はここまでだ！また聞きたいという者は後で私の研究室で手続きをするように！受講申し込み期限は再来週までとする！めったに聞ける話じゃないぞ。少しばかり生々しいがね」

ミレルークの新鮮な肉とデスクローの腕を助手に運ばせて解散を告げた教授は、メモした用紙を俺があげたクリップボードに挟んで片づけた後、ついてくるように言ってきた。何時の間にやら俺の話は完全に講義になっていたのはもう諦める事にする。まぁ、研究室か人のいない所で話せばいいのにこんな人だらけの所で話してしまった俺のミスだからさ。

それから外に出てよく見れば太陽は真上から少し傾いているから、朝に来たから思ったより長く話し込んでしまったようだ。教授と駄弁りながら進んでいくと、食事エリアに着く。ここは教授曰く『馬鹿共のための場所』という意味合いが大きい場所らしい。見れば立ち並ぶオープンカフェに出店、レストランのような所もあるし大衆食堂もあるというごちゃごちゃ具合。外に比べて数は数店舗だ。これは好きな物食えるっちゃ食えるんだろうが、学生にここまでの物が必要なんだろうか。外に出ればいいだけの話じゃない？

「この学院は貴族の子女達を多く預かっているからね。中にもこういう店を作っていたほうが防犯面でも安全だし、その子らの好きそうな物ばっかりだからああいう子達に多いつまらないちっぽけな誇りによるもめごとが一般市民に飛び火するのも防げる。従業員への手だしは罰則付きで禁止されているし、それでもたまに奮発してきた平民の出の子にちょっかいかけることもあるけど、おおむね良い感じに閉じ込められているよ。それでも問題を起こすのが彼らなんだけどね」

「ははは……苦労してるんですね」

「まったくさ」

苦笑して肩をすくめる教授に同情しつつ、教授お勧めというレストランに入る。内装は綺麗で流石貴族用だと思った。味もやっぱり美味かったけど、やっぱりどこまでいっても一般市民な俺にはちょっと合わなかったかな。クレアやシエナさんの飯の方が肌に合ってる。すんなり胃袋に入っていくというかなんというか……特に何も言わなかったけど教授はそこらへんを察していたらしく、次は外で食べようかと言ってきた。なんだか申し訳ない……。

「さて、ついたよ。ここが第二演習場だ。流石に貸し切り、とはいかなかったし授業と同時だが、私もいるから大丈夫だろう。的はどうする？」

「自前のがあるから大丈夫です。じゃあ、始めましょうか」

少し小さい陸上競技場の様な中に入れば離れた所で三人一組で分かれて授業をやってるのを見つけた。教授曰く冒険者育成クラスだそうだ。邪魔するのは気が引けたものの、教授がせっかくしてくれた事なので時間を無駄にすることはできない。俺はＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００からノームの人形（破損）を出して出張った壁の上に置く。とりあえずカノンとライリーの改造銃以外にはちょうどいい高さだし、壁は壊れても魔法で自動回復するらしいので問題はないそうだ。魔法すげー。

「ふぅ、まぁこんなもんか」

順番にテストしていって最後のカノンのスナイパーライフルを撃ち終えた俺は、壊れたノーム人形を片づけて教授にもらったゴミ袋に入れていく。とりあえずの動作確認テストは滞りなく終了することができた。ライリーのプラズマライフル以外とはいえ結構な発砲音がするからちらちら、というかそこそこの頻度で見られてた。ミニガンの時なんか凄かったなぁ。全員何事かって振り向いてきたからな。ちなみにスナイパーライフルはカノン仕様のためにしっくりこなかったが、遠くに人形を置いて撃ったり、観客席から撃ったりと色々やってみた。

「お見事。ここまで正確な射撃技術を持っているとは思わなかったよ。これなら数々の化け物共をその遺物で狩ってきた事も頷ける」

「ありがとうございます。まぁあと一丁残ってますが、そいつは流石にここじゃあ使えないので、近い内に外で魔物相手に使うことにしますよ」

「ふむ、なら明後日から一週間の内に行くと良い。今日と明日の話の情報整理と生徒達の履修登録をしないといけないから、多分君の話を聞く時間が無いのだよ。今日と明日は君の話を授業に当てるつもりではあるけども、いつまでもそうしてはいられないからね」

スナイパーライフルを片付けて装備を消音器付き１０ｍｍピストルに切り替えながら、教授の話を聞いて成る程と思う。今日は結構な

密度で話したし、明日もするならかなりの量になるだろう。ってか教授、俺の話を本当の授業に割り当ててたのかよ……講義になるのは例の履修登録が終わってからだと思ってたのに。

俺は教授に了解の意を伝えて、物珍しそうに見てくる生徒達の視線をスルーしながら宿に向かう。何にせよ、明日が終われば早くも一週間の休みだ。その間に出来る事は済ませておく事にしよう。アイザックへの報告書と修理。そしてキャスとの契約の話もしないとな。あとは出来れば図書館での魔法の勉強。外に行くついでに依頼を受けるのも良いかもしれない。

「こんなところかな……よっ、と」

「いだだだだばふぁっ!?」

とりあえず通りに出た途端に今着ている何も入れてない傭兵服にスリをしようとした少年の腕をひねりあげて地面に投げ捨てて、宿に向かう。流石に人通りの多い所で殺すつもりはないからね～。

二十九話目

スリの少年を投げ飛ばした翌々日。昨日も当たり障りなく簡単な講義を済ませた俺はキャスとクレアと共にギルドに来ていた。護衛としてライリー、カノン、アルスが来ている。他のメンバーは荷物とバラモンの番をしているそうだ。まだ少し仕事の道具が残っているんだとか。あと、あの緑色のバックは最初にこの学院都市に来た時に見た収納の魔導具らしい。容量をバックをつなげることで大きくし、バラモンの負担を少しでも和らげているとかなんとか。見た目以上に大量の商品が入っているらしい。

ちなみにクレアの宿は従業員だけで回している。何かあれば新入り君が飛んでくるそうだから心配はいらないだろうと言っていた。まぁ、クレアがいないでどれだけ上手く回せるかの実験的な意味合いもある。クレアはこれが良い機会じゃないかと考えているそうだ。

「よし、じゃあ契約内容を決めていきましょう。値段は時間がかかるから後に回すとして、運搬方法や互いの連絡方法についてを先にしましょうか。まずはこれね」

キャスがコトンと机の上に置いたのは丸い金属の円盤だ。鈍い金色と銀色の２つで、陣のような幾何学的模様が描かれている。厚さは２ｃｍほどで分厚く、大きさは直径で３０ｃｍ位だろうか？その分厚い側面にはボタンの様なものがあってなにやら無性に押してみたくなる。

「これは酒の転送用魔法具よ。対になっててそこにしか送れないけど、私達には十分ね。側面のボタンを押すと魔法で１ｍ位に伸びてくれるから一気に送る時も大丈夫。送る時には真ん中のボタンを押してくれれば3秒後に転送するわ。１年に一度魔力補充をしないとい

けないのが面倒だけど、それを差し引いても十分使える代物ね。私とコウヤが金色、クレアとコウヤで銀色の2組用意してるから間違えないように」

「ふぅん。なかなか面白い物見つけてきたんだねキャス。でも高いんじゃ？」

「そこら辺は先行投資と専売させてくれることでチャラよ。売れなかったらそこまでだけど、その時は私の見る目がなかっただけね」

「なるほどね」

まぁ商売をやる上で多少のリスクはつきものだ。これがいくらしたのかは知らないけど、キャスがそういうのならお言葉に甘えてタダでもらおう。

「それと、これが連絡用の魔法具よ。連絡先は5つまで登録可能で、それぞれボタンが分かれてるわ。色が違うから間違えることはないでしょうけど、気を付けるように。使い方はボタンを押して、話すだけ。かけられた方はそれが振動して知らせてくれるから真ん中のボタンを押すだけよ。それで相手の姿が魔法で映るわ。まぁ、実際にやってみた方がわかるか」

そう言ってキャスが渡してきたのは手帳のような形をした黒い石だ。そこには赤・青・黄色・緑・白の5つの六角形の石がボタンやのようについており、真ん中には丸い黒のボタンがある。キャスの説明から考えるに、携帯のような物だと思う。なんとも便利なもんだな、魔法ってのは。

「えっと、私のは二人とも赤に登録してるわ。今から私がかけるから取ってみて」

そう言って少し離れたキャス。すると机の上に置いている石の赤いボタンが光りながら振動を始めたので、言われた通りに真ん中のボタンを押す。

「おぉ」

「へぇ……なかなかどうして、面白いじゃないか」

そこには某星戦争ズの通信機のような青白い立体映像姿のキャスがいた。大きさは３０ｃｍ程度だが、かなり精巧だ。しかも見る限りタイムラグは無い。やっぱり凄すぎだろ魔法。

『こんな感じかな。大体の場所ではしっかり動いていてくれるけど、たまに不安定になる場所もあるらしいから気をつけてね』

それだけ言うとキャスは通信を切って戻ってくる。そしてそのあとからは値段交渉の開始だ。それに加えてほかのも一気に決めてかなり長くなったから簡単にまとめると

・供給元へ１本あたり１８ギル。

・まとめ買いで多少割り引き。

・組織・団体への転売不可。あくまでも個人向け。

・上記に違反した場合取引停止及び場合によっては賠償もあり。供給元であるコウヤ・キサラギも例外ではない。

他にも細かいことは多々あるけど、まぁこんなところだろう。これであんまり自由にウィスキーは飲めなくなったが、商売に出す以上仕

方がない。出来ればもう少し値段を釣り上げたかったんだが、これ以上はキャスが梃子でも動かなかった。やっぱり本職の商人にはスキルが効きづらかったよ。

「じゃあこれで取引成立ね。あとは互いにサインして終了。これは売れるわ。いや、売ってみせる！」

ぐっと手を握り締めるキャスにクレアと二人で苦笑する。そして書き終えた誓約書をギルド職員に渡して残りをちゃんとＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００に入れ、ギルドを出た。キャスは宣伝に行くとかですぐに別れたため今はクレアと二人だ。

「んーっ……ふぅ。必要なことだってのはわかってるんだけど、どうも交渉とかあぁいう場は好きじゃないよ。肩が凝ってしかたがない」

「ははっ、お疲れさん。さて、もうなんだかんだで昼時か……御一緒にお食事でもいかがですかレディ？」

頭上を見れば太陽は真上にあり、丁度お腹も空いてきた。なので少しふざけて、仰々しくお辞儀をしながらクレアに手を差し出してみる。するとクレアは一瞬キョトンとした顔をして、小さく笑い出した。

「くくっ、はいはい。では、エスコートをお願いしますね？ミスタ？」

手を取ったクレアと数秒目を合わせ、どちらからでもなく笑い出して通りを進む。店に行くまでに二人でぶらぶらと歩いて買い物と会話を楽しみつつ、目的のクレアお勧めの料理屋に向かう。

一週間休暇の初日はとても満足出来た１日になったのは言うまでもない。

三十話目

パキュンッ、と独特の発射音と共に緑色の光の玉が飛んでいく。それは目視出来る程度の弾速ではあるが、獲物の背後からの発砲のため気づかれる事は無く直撃する。

「ゲグェァ……！」

いきなりだったからか変な鳴き声を出して死んだ獲物ーーまぁ、はぐれゴブリンなんだけどーーと周囲の安全を確認して、今使ったライリーの改造銃を背負い、とりあえず一言。

「何このＭＯＤ」

アーマーからのくぐもった声だし、誰もいないけどとにかく呟いた俺は仕方がないと思う。

あれから宿に戻ってからの時間と翌日を使い、ライリーの改造プラズマライフルを直した。それでその次の日、つまり休み三日目の今日は外に出て魔物相手に作動チェックしているわけだ。ちょっと手を加えたのもあって中々に大変だったけど、それだけの成果は出ている。というか出過ぎていた。

今まさに目の前の光景がそうだろう。相手にしたゴブリンの左半身部分は丸く抉り取られていて、切断面は半ば液状化し、元左半身部分は地面に緑の水溜まりを作っている。更にゴブリンを抉り取って尚進んだプラズマは、進行先にあった２ｍ程度の岩を完全に溶かして消滅していた。

ちなみにＭＯＤとはＰＣ版にある改造アイテムなどを指す。チートしたりネタに走ったりキャラメイクを良くしたり色々あるのだが、それは今回置いておこう。

「……やりすぎた？」

アーマーの中で冷や汗をダラダラ流しながらプラズマライフルの弾であるマイクロ・フュージョンセルを抜いて呟く。エネルギー消費とか諸々を効率的にしようと古い部分を手持ちの部品でなるべく交換しただけでこれだ。完全新品の状態だったらどうなってたのかを想像するだけで寒気がする。

「……ライリーになんて言おぅか」

はぁ、とため息を吐いて俺はフェルナンドに戻って行った。

――

門をくぐり抜け、相変わらず人で賑わっている道をパワー・アーマーでがっしゃがっしゃと進んでいく。やはり珍しいのかチラチラと見られるが、もう慣れた。

「フンッ」

「望みが絶たれたー！」

そして、この路地裏の追い剥ぎとスリも。

何というか、Ｖａｕｌｔ８７にいるスーパーミュータントの如くわらわら出てくる。あれは面倒だった……なんて思っていると、今度は集団で来たのでもれなく全員壁に叩きつけた。勿論戦利品の獲得は忘れない。みんなしけてんなー。

「１５人で１５０ギル……まぁもらうけども」

案外貧しい生活を送ってたりするのかな？なんて思ったけど、貰う物はキッチリ貰います。俺に攻撃してきて余計な時間を使わせたんだから、この程度……死んでるやつ少ないし、良いよね？

「……ん？」

そういえば自警団に探されてたなーなんて思っていると、一人の追剥ぎの腰袋が何やらもぞもぞと動いてるのが目に入った。金を入れるための皮袋にしては大きく、しかし他の何かを入れるには少しばかり心もとない大きさの皮袋が独りでにウネウネ動いている。ついでにうーうーと唸り声まで聞こえてきた。

（確実に生き物的な何かが入ってやがる……！）

なんてこった、なんて思いつつ好奇心に負けた俺はその皮袋をそっと手に取ってみる。すると中のモノがビクンッと硬直し、フルフルと震えだしてしまったではないか。

しょうがないので、とりあえず声をかけてみる。

「［Ａｎｉｍａｌ　Ｆｒｉｅｎｄｓ　＆　Ｃｈｉｌｄ　Ａｔ　Ｈｅａ

ｒｔ」大丈夫だ。俺は君をどうするつもりもないし、かといって放置することもない。今から安全な場所に連れて行って、君を開放する。それからどうするかは君しだいだ。いいね？」

「……！［成功］」

なんかＰｅｒｋｓが発動したが……まぁ、後で考えよう。とりあえず一度頷くような感じで袋が震えたから宿のクレアのところに持っていこう。少なくともここよりは安全だし、彼女は信頼のおける人物だ。それにこの世界でのことに疎い俺よりも知っている人がいたほうが何が出てきたとしても対応ができるだろう。俺は皮袋を改めて優しく抱え込み、宿屋リーフレットのもとへ急いだ。

面倒事は、勘弁してほしいなぁ……。

三十一話目

「で？とりあえず持ってきたと？」

「あぁ」

あれから駆け足で宿まで戻ってきた俺は戦前の春服に着替えて部屋にいた。クレアも仕事を片づけて来てくれたので事情を話している。あと、袋は未だ外さずに机に置いている。うまく座れているみたいなので大丈夫だろう。

「うーん、そういう下種な奴らの持ち物だっていうなら奴隷とかの線が一番強いんだけどねぇ……まぁ、考えててもしょうがない。さっさと開けてみなよ」

「了解」

クレアの言うとおりに袋に手をかけて紐を解いていく。奴隷か……また面倒な。もし奴隷解放とか言われたとしても俺はやらんぞ。パラダイスフォールズはなんとなく壊滅させたけども、ピットはアッシャー側についたからな。ところで向こうには行けたりするんだろうか。もし病気が残ってるなら行けても行きたくないけど。

なんて考えながらばさりと紐をほどいて袋を開けてみる。すると中から出てきたのはまず緑のくすんだ長い髪の毛と前髪に隠れた顔。それから同じく緑色のワンピース。体は細く、後ろ手に縛られているのが見える。足も同様だ。そしてよく見れば口にも小さな布が巻いてあった。

「これは……小人？」

「馬鹿言ってんじゃないよコウヤ。この子は妖精族（フェアリー）だよ。この都市にもそこそこいるんだけど、見たことないかい？」

「……あぁ。初めて見た」

クレアにバッサリ言われて少しグサッとくるものがあったが、本当に初めて見るのでジーっと見ていると向こうもジーっと見つめ返してくる。とりあえずナイフをＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００から出して拘束している紐を切ってやる。すると少しの間手足を動かしていたが、突然へたりと座り込んで俺を見上げてきた。

「立てないのか？」

コクリ、と肯定。

「痛みはあるか？」

フルフルと首を振って否定。

「腹は減ってるか？」

コクコクと勢いよく頷く。よし、ちょっと待とうか。

「何この子かわいい」

くて、と首をかしげてくるこの姿のなんと愛らしいことだろうか。最近戦闘とか話とかばっかだったからなんだか異様に癒される。やさぐれた心にしみわたるというかなんというか……ちなみにクレア

は腹が減ったという確認を取った後に速攻で部屋を出て行った。下で叫んでいる内容からしてこの子の飯を作らせているんだろう。はたして俺の分も作ってくれるんだろうか。

用意が出来たというクレアの呼び出しに彼女を手に乗せて降りた俺は、いつものカウンター席について彼女の食事の様子を見ていた。何度落ち着くように言っても妖精族（フェアリー）用の食器に入ったスープを必死になって食べているのを見ると、どれだけ空腹だったかが見て取れる。クレアが状態を見てスープを選んだのは正解だったな。

「コウヤ、この子どうするつもりだい？奴隷用の刻印や首輪がないから、さらわれたってことなんだろうけどさ」

黙々と食べていく姿を見て優しい笑みを浮かべながら聞いてくるクレア。正直この案件に関しては自分の中で答えはすでに出ている。ゲームの中でもたまに会った奴隷は開放してきたし、こんな可愛らしい子をほっとくわけがない。

「元居た場所に帰してあげるつもりだ。それが最優先。次点は働き口と当面の金を渡してこの都市で暮らしてもらう。クレアの所でもいいし、戦えるならライリーに頼んでもいい。でもそれがうまくいかなければ最悪……俺がしばらくつれていこうと考えてるよ。彼女次第だけどな」

「まっ、それが一番かね」

コクコクと水を飲んでいる彼女を見ながらクレアに言う。どれを選ぶにしてもこれは彼女の自由だ。そしてしばらくの間俺と行動を共にするか、クレアと共にするのかも。どちらにせよ名前とか聞かないといけないし、服とか髪とかもきちっと綺麗にしてあげないといけないな。下手すれば俺がいの一番に反感を買う。

「さて、落ち着いたようだから話しをしよう。まず、俺の名前はコウヤ・キサラギ。こっちはこの宿の女将のクレア・リーフレット。君の名前を教えてくれるか？」

「……リリィ」

静かにゆっくりと、しかし鈴の音のような声で呟いた。変わらずジーッと俺を見つめてくるリリィをしっかりと目を見て言葉を返す。

「そうか。いい名だ。リリィ、君はあのチンピラ共に奴隷として連れられたのか？それとも浚われたのか？」

「……私は、産まれた時から奴隷。首輪は、新しいのに替える途中だったから、ないだけ」

「……そうか」

これはまた、重い話になった。産まれた時から奴隷という事は帰る場所は無いということに他ならない。即行で最優先事項が変わってしまった。

しかし、俺のやることは変わりないわけで。

「今までは奴隷だったようだが、今日今からは自由だ。好きなように生きると良い。俺もクレアも手伝うつもりだ」

「……でも、私は何をしていいのか、わからない」

本当にわからないのだろう、変わらず無表情で見つめてくる。それもそうだった。リリィは『産まれた時から奴隷だった』と言った。つまりはそれ以外、主人に仕えていく事とかしか知らないのだ。

横でクレアがリリィの頭を撫でている。面倒見の良いクレアはリリィが可哀想でしょうがないのだろう。当の本人はよくわかってないみたいだけどな。

「わかった。なら選択肢を出そう。まずはこのクレアの宿で働いてみること。次に戦闘が出来るなら、俺の信用できる知り合いのパーティーに入ること。あとは、最悪俺についてくるか」

とりあえず、俺について来る事も含めて全ての案を出した。後のことは、彼女自身で決めることだ。他にも選択できるものがあるかもしれない、いや、あるのだろうが、俺が出来る範囲でのことはこれが精一杯だ。

俺は少し俯いて考えているリリィを見ながら、そのまま待つことにした。

閑話1

コウヤがリリィと真剣に話している頃、ライリーはキャスの商談の護衛として働いていた。今日は最後の積荷を下す日だ。日用品から武器まで様々な物を扱うこのキャシディ・キャラバンは、行商人の中でも確実に物資を運んでくれると有名だ。盗賊や魔物、果てはミュータントまで蔓延るこの大地では行商という職業はかなり重要視され、報酬も高い。しかし同時に最も危険な部類の仕事に入る。死亡率も高いしその土地に定住も出来ない。

そんな中でキャシディ・キャラバンは積荷を高確率で安全に運搬するとして、商人ギルドの中でも一目置かれている存在となっている。しかも価格をふっかけることもないとくれば、そのキャラバンが有名になってもおかしくない。

「では、今回の積荷はこれで全部です。サインを」

「いやぁ、毎度お世話になります。長旅、ご苦労様でした。これが報酬です。ご確認のほどを」

最後の積荷の確認を終えて、いつものようにサインを受け取り外へ出る。これでもうバラモンの袋の中身はキャスの私物とキャンプ用品程度の物しか残っていない。これで最初の商品の護衛は終了だ。バラモンは厩に預けるので、次の積荷を商業ギルドから受け取るまで、ライリー・レンジャーの仕事はキャスの護衛のみとなる。

「途中どうなるかと思ったけど、無事に終わってよかったわ。宿で片道分の料金は支払うから、もう少し待って頂戴……って、ライリー？聞いてるの？」

「えっ、あぁ、ごめんなさい。なんだったかしら？」

「もう、片道分の料金を宿で支払うって言ったのよ。どうしたのライリー？仕事中に上の空になるなんて珍しいじゃない」

キャスの護衛とバラモンを厩に連れて行くので二手に分かれたライリー達は、宿へと帰路についていた。そしていつものようにライリーに対して護衛料金についての話をしようとキャスが話を振るが、彼女にしては珍しく、上の空だったらしい。

普段の彼女であれば例えどんな時でも周りに目と耳を向けているのだ。そんな彼女が上の空というのは心底珍しい。後ろにいたレオンも普段と違う姉の様子に少し心配そうな表情を見せる。

「いえ、ちょっとね……ねぇ、キャス？『Ｖａｕｌｔ１０１の救世主』の話、覚えてる？」

「当たり前でしょ？ウェイストランド人なら誰でも知ってる英雄譚じゃない。他にもＶａｕｌｔの英雄の話はあるけど、ここらだと一番話されてる話よ。一緒にあなたのおばあちゃんから寝る前に聞かせてもらってたでしょう？ねぇ、レオン？」

「はい。僕もその話好きですよ。当時の話はよく聞きに行ってましたもん。それに、僕達のご先祖も話に出てくるじゃないですか」

「あぁ、あなたはあの人の所によく行ってたものね。あのグールの爺様もいつになったらくたばるのかしらね？」

「本人は『ダチを待ってるんだよ』って言ってましたけどね」

二人が楽しそうに故郷の話をする中、ライリーは黙々と思考を続け

ていた。確かに幼馴染でもあるキャスの言う通り、この話は生粋のウェイストランド人なら誰もが一度は聞いたことのある英雄譚だ。まさしく救世主と呼ぶにふさわしいほどの働きをした男の生き様を、とある雑貨店店主が本にしたものがきっかけとなっている。ある程度はしっかりと調べられているらしいその本は、多少誇張はあれど大まかには彼の偉業をつづっている。当時からの生き証人であり、救世主の友人であったグールがそう言うんだから間違いはない。

――『Ｖａｕｌｔの救世主』

この世界が荒廃した原因となったグレートウォーから約２００年を過ぎた頃、救世主は平和なＶａｕｌｔ１０１で暮らしていた。母親は救世主を出産して死んでいるので、医者であり科学者である父によって育てられた。彼はすくすくと順調に育ち、１６の時に持前の能力の高さを発揮してＶａｕｌｔの最高責任者である監督官の娘の補佐としての仕事に着いた。それから3年の月日が経って、彼の父親がＶａｕｌｔ１０１を脱走した。父親は彼の出産と同時に投げだしたとあるプロジェクトの完成のため、渇きに苦しむウェイストランドの人々のために出て行ったのだが、それを知る由もない救世主はかつてのＶａｕｌｔの仲間達に殺されそうになりながらも逃げるようにしてＶａｕｌｔ１０１を脱出した。皮肉にも安全なＶａｕｌｔを出たここから彼の偉業が始まる。

まず近くのメガトンに向かった彼は街の住人の頼みを解決しながら数日過ごし、誰にも解除出来なかったメガトンの中心地にある不発弾を解除することに成功し、メガトンへの居住権を与えられた。作者である雑貨店店主が出会ったのもこのあたりであると書かれている。その時はＶａｕｌｔの警備員の格好をしていたらしく、ひどく目立っていたそうだ。それから仲良くなった店主と救世主は一つの本を作り上げる。未だ根強い人気があり、一定の周期で新刊の出ている『ウェイストランド・サバイバルガイド』が最初に出来たのも彼の協力

があったからこそだとか。ここで作者の一言を抜粋しよう。

『彼の膝の内側にスマイリーを縫い付けたのはこのあたしよ？』

この一文は多数の学者達の間で一時期議論されたが、かのグールの『マジだ』の一言で片付いた。にわかには信じがたいが、この店主自体頭が少し変だったらしい。

そんなことがありつつも救世主はメガトンを拠点にして活動を始める。アレフの住人を助けて吸血鬼を味方につけたり、ビッグタウンの住人のためにスーパーミュータントの巣くう建物に突入し、囚われた住人を救出後ミュータントを単身で全て駆逐。さらにそのまま奴隷商人の町であるパラダイスフォールズの奴隷商人を一掃し、奴隷の解放をした……等々挙げればきりがないほどの偉業を成し遂げている。

民間放送であるギャラクシー・ニュースラジオでは彼の偉業が毎回流れており、メガトンの住人は自分の事のように喜んで聞いていたらしい。当時の荒廃した時代において彼の行動は、まさしく英雄であり救世主といえたのだ。ちなみに今現在パラダイスフォールズは、元奴隷の子孫たちによって大きな街になっている。商人がよく訪れる街で、ライリー自身も何度か訪れたが活気のある良い街になっている。新たな街の起源が起源だからか、奴隷の販売は即刻死刑となり、出入りする商人は毎回厳重にチェックされている。街の中心には彼のと忠犬の銅像が建てられている。

そしてその中でも彼のもっとも大きな偉業は、これに尽きるであろう。『浄化プロジェクト』の完成だ。彼の父が命を賭して守ったこのプロジェクトは、放射能で汚染された水を完全に浄化し、人体に害がないものにする機械の開発だった。一時はエンクレイブに奪われ、利用されかけた物をB．O．S．とともに奪還し、起動させた。その時

コントロールチャンバーの中は高濃度の放射能で汚染されていたそうだが、彼は迷わず中に入った。共に戦場を潜り抜けた仲間の制止を振り切り、笑顔で。父の教えを受け継いだ、自己犠牲をいとわない他者を想う心。かつて父がそうしたように、人類の明日のためにその身を捧げた。

結果から言えば彼は生き延び、その後の偉業も綴られている。作者が戻ってきた彼にキスの雨を降らせたとかアッチも英雄級で４人でかかっても敵わなかっただったとか子供に聞かせる内容じゃないのもやけに詳しく書いているのだが、そこは大体割愛されている。大抵英雄譚で児童書にもなっている方を買っていくので、詳細の書かれた分厚い方は１５を過ぎてから読むのを許可される。

閑話休題。

その治療の際、かの英雄を死なせてなるものかと、ウェイストランド中から選りすぐりの医者が集まった。更に要塞に搬入されたというのをラジオ経由で知った一般人までもが詰めかけ、要塞はこれまでにないほど人で溢れかえったそうだ。投資者でもあったからか、医療物資の提供もカンタベリー・コモンズの商人が無償で届けに来たという。しかもその治療期間だけではあったが、当時のライリーレンジャーを始めとする傭兵達まで無償で護衛に駆け付けた。その全てが彼に何らかのことで助けられた者達や、純粋にその姿に憧れた者達だった。

「懐かしいわねぇ……あの本まだ取って家に置いてあったかしら。英雄色を好むってあるけど、あそこまで出来る男はそうそういないでしょうね」

「よりにもよって感想はそこですか！もっとこう……カッコいい所いっぱいあったでしょうに！」

しみじみ、といった具合に言うキャスにレオンがツッコむ。その様子に苦笑しながらライリーは口を開いた。

「あはは……で、話は戻るけどその救世主の名前ってキャス知ってる？」

「いや、文面上では常に旅人だったり救世主だったりで名前は書いてなかったはずよ？あの爺様やパラダイスフォールズの人なら知ってると思うけど……それがどうかした？」

「いえ、そうよね。何も書いてなかったわよね。ごめんなさい、気にしないで」

「……そう」

それ以降口を噤んでしまったライリーに、キャスは長い付き合いからこれ以上聞いても無意味だと判断し、レオンに絡みながらそそくさと歩き出した。本当に悩んでいるのなら自分に相談するはずだし、気長に待とう、と。

（あの名前、実力、そして腕にあるＰｉｐ－Ｂｏｙ３０００……人間としてありえないと思うけど、まさかって考えてしまうわね。彼を一度メガトンに連れていった方がいいかしら？）

ライリーの脳裏に浮かぶのは、カウンターにあるラジオの横でいつも佇んでいるグールの姿。ひねくれた性格をしているが、彼女自身何度も世話になったとても心の優しいおじいさん。しゃがれた声が何だかとても懐かしく感じる。

そうしてしばらく考えて、考えのまとまったライリーは一人頷き、

前を見る。しかしそこには誰もおらず、慌ててライリーは遠く離れたキャス達に向けて走り出した。

三十二話目

「……これ」

「わかった。おっさん、これとこれを彼女のサイズでよろしく」

「あいよ！すぐに調整済ませるからちょいと待ってな！」

ギルド通りの武具屋兼魔術師の店主のおっさんが奥に消えたのを見送り、近くにあった椅子に腰かける。リリィは俺の頭の上でぐでっと寝転がっていて、丁度いい重さが頭にある。最近の彼女の定位置はここだ。丁度いいサイズで楽が出来るし落ち着くとかなんとか。

あれから結局、リリィが選んだのは俺と行動を共にすることだった。クレアとの生活も悪くないとは言っていたものの、俺の方がいいそうだ。懐いてくれたのは素直にうれしかった。それで俺が引き取ることになったので、奴隷階級を平民階級まで戻す手続きも役所で行ってきた。いくらか金がかかったが、アイザックと教授の手助けもあって何とか無事に処理出来た。代わりと言ってはなんだけど、教授には研究材料を、アイザックには酒を5本ずつセットで渡してお礼とした。本当にお世話になりました。

「……コウヤ、のど渇いた」

「ヌカ・コーラでいいか？」

「ん」

ぺしぺしと頭を叩かれて催促されるがままにヌカ・コーラとストローを出して渡してやると、嬉々として飲み始めた。一度ためしに飲

ませたらよっぽどハマったのかいつも飲みたがるので、今では一日多くて二本までにさせている。それでも彼女の体の大きさからすれば十分すぎるほどなんだけど……目の前で魔法によって宙に浮いたヌカ・コーラがあるのはなんだか変な感じだな。

閑話休題。

それで、それらの作業を行いながら過ごしていくと一週間の休暇なんてすぐに過ぎていくもので。俺はミニ・ニュークについての調書を提出し、キャス達の武器も返して今では学院の臨時講師という名目で週二回の講義をしている毎日だ。ギルドの依頼も時々こなして金も余分に稼いでいる。ちなみに武器の報酬は俺をメガトンまで案内することと、今のメガトンについてとかを教えてもらうことにした。もちろんそれだけだと全然元が取れないのでその間の食事とか護衛とか全部含めてだ。それでも十分お釣りがくるんだから、俺ってば優しい。

「けふっ……ん、とりあえず保留」

「もう三分の一も飲んだのか……いつかお前の体の血が全部ヌカ・コーラに変わるんじゃないかと心配だよ」

「私はコーラで出来ている。もう手遅れ」

「おい」

こんなコントみたいなことをしつつ待っているのはリリィの装備品だ。彼女は魔法を主軸にして戦うことが出来るため、その威力を高める杖と集中力を高める付呪のされた衣服を買ったんだ。属性は風と土で、これは遺伝的なものらしい。鳥が飛ぶことを知っているように、この魔法は妖精族（フェアリー）特有の遺伝で、彼らはどう使えばいいのか小さ

いころから誰からも教わることなく知っているそうだ。もちろん各自で保有する魔力量は違うし、知っているからと言って必ず成功するわけじゃないんだけど。

そうそう、魔法についても勉強した。この世界の魔法にはオーソドックスに属性で分かれていて、大まかに分けて五つある。火・土・風・水・雷。ここからさらに派生して、水が氷になったりしたりするんだけどそこは割愛。長すぎる。

そして魔法自体にも分野があって、攻撃系の破壊呪文・魔力で防御を上げたり出来る補助呪文・回復系の神聖呪文などいくつかに分かれている。大体の人はその知識量から、どうしてもその分野に特化してしまうのだという。ある程度そつなくこなせる人も器用貧乏になりかねないし、こういうのはパーティでも組んでいけば戦闘も何とかなるというのが大きい。神聖呪文なんかはそれ専用の癒やし手と呼ばれる人達がいるらしい。会ったことないけど。

そういうわけで今後旅をすることは確定なので装備を整えに来たというわけだ。魔術品ということでどれも高かったけど、こういうのに金があるのに出し惜しみをしてピンチになったら元も子もないので好きなのを選ばせた。薄緑の生地に金の装飾のなされたフード付きのローブのような物で防寒にそれと対になっている物も買った。杖は上向きに捻じれた五本の木が絡まり、頂点で広がってそこにエメラルドのような宝石のある特注品。リリィの属性の魔法の威力を高めてくれるとか。他にも数点の替えの服や彼女用のバックとかも用意した。心なしか、Ｐｉｐ―Ｂｏｙ３０００が少し軽くなった気がする……。

「待たせたな、これで調整は終了だ。この子の大きさに合わせたから、動きにくかったりしたら後々教えてくれ」

「わかった。じゃあこれ、代金な」

「おぅ！毎度あり！」

荷物をＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００に入れて店を出る。これで彼女の使うものは大体そろえただろう。後は趣向品とかになってくるのでこれは今後そろえていけばいい。

そうしてホクホク顔のリリィと外に出ていくと、なにやら周りが騒がしい。行きかう人々があっちへ行ったりこっちへ来たり。いつもの騒がしさとはまた違う感じがする。切羽詰まっているような、そんな感じだ。

まぁ、だからと言ってどうすることもないのでリリィと共に首を傾げながら進んでいく。行く先はギルドだ。講義もないし、これから暇になるからな。依頼の一つは受けて暇つぶしと金の補充をしておこうと思う。で、到着したギルドではいつもより多くの職員が走り回っていた。

「あ！コウヤさんにリリィちゃん！良い所に！」

「おぉ、フェリカちゃん。何だか騒がしいけど何かあったのか？」

「そ、それが大変なんです！」

あたふたと駆け回っていたフェリカちゃんは俺を見て即行でこっちに来て事情を説明してくれた。慌てすぎていろいろ聞き取りずらかったが、そこはｓｐｅａｋスキルで何とかなった。

で、要約するとスーパーミュータントの群れとミレルークの群れが争いながらこっちに向かってきているのが確認されたらしい。近く

の川に新しく住み着いたミレルークと移動していたスーパーミュータントが偶然鉢合わせしたのが原因とみられているとか。数も互いに１０はいて、今の戦力ではかなり厳しい状況だそうだ。

「ミレルークは普通の群れ。スーパーミュータントに関しては近接系の武器を主体とした編成ですが、長い筒状の遺物を持った個体と黒い箱を背負った個体が確認されています。コウヤさん、何かわかりますか？」

「あー、ミサイルランチャーにミニガン持ちか……こりゃマスターもいるな。この情報は全員知っているのか？」

「一応通知は出していますが、威力や詳しいことまでは……って！名前知ってるってことはご存じなんですか⁉」

「あぁ、もちろん」

俺が返事をすると、どたばたしていた職員が一斉に俺を見た。ちょっとビクついた俺は悪くない。というか、銃器の情報なさすぎだろ……まぁ、ミュータントの情報もそんなに無かったから今まで大っぴらに確認されてない物なのかもしれないな。ライリーたちは持ってたけど。

「両方広範囲の殲滅が可能な銃だ。普通に剣や槍で突っ込んでいけば、まずみんな木端微塵か蜂の巣になるだろうさ。逆に離れていても普通に同じ結果さ。殺るなら気づかれずに一発で仕留めないと被害が増えるぞ」

「そ、そんな……」

俺の答えに聞いていた職員共々顔を俯かせるフェリカちゃん。だ

が、俺が言ったのは普通に近接武器で突っ込んでいったときの話であって、同じく銃を持っているやつには必ずしもそうであるわけではない。というか、俺が行かないこと前提で話しているみたいなので行く旨を伝えると、フェリカちゃんは驚いた顔になった。

「何そんな驚いた顔をしてるんだ？俺はそんな薄情なやつじゃないぞ」

「い、いえ！そんなつもりじゃないですよ！でも、いくらデスクローを倒せるコウヤさんでも、群れとなると一人応援が駆け付けたくらいじゃ……」

どうやらこの子は俺が負けると思っているらしい。確かにこの世界の住人からしてみれば、ミュータントの群れに当たるなんてのは死と同義だ。肝心の魔法と剣が効き辛いのなら勝ち目は薄い。単体でそれなのに群れなんて……という感じだろう。だが、俺やウェイストランドの人間（昔）からすればどうということもない。今はどうなのか知らないし、ウェイストランドの人間でも厳しい部分は大きいが、こうまで悲観的にはならないだろう。俺だけなのかもしれないが。

なので俺は一度頭を小突き、言った。

「俺にとってスーパーミュータントやミレルークがいくら群れようとどうということはない。まぁ確かに危険度は跳ね上がるし死ぬかもしれないけど、やってやれない敵じゃないのは確かだ。で？報酬は幾らもらえるんだ？」

「緊急招集のため、参加金に少しと倒した数によって変わりますけど……本当に行くんですか？」

「あぁ、どちらにせよ行かないとここが危ない。まだ滞在時間は短い

けど、結構気に入ってるんだよここ」

俺はそう言ってリリィと共にギルドを後にする。装備はエンクレイブファイヤーアーマーをフル装備し、ブラックホークを足元に着ける。そして両手にミニガンを出し、弾薬を背負った。なんというか、もの凄いことになった。

「……私に何か手伝えることは？」

「リリィは魔法で相手の動きを止めていてくれ。足を固定するなり腕を動かなくさせるなりでいい。俺の後ろでとにかくそれをしてくれ。後は俺が撃ち殺す」

「了解」

じゃらじゃらと音を立てながら人の集まっている門まで進んでいく。俺の装備のせいか、俺を見る人見る人が道を開けてくれるので心底助かる。俺はそのまま順調に都市の外に向かっていった。

三十三話目

じゃらじゃらと銃弾を鳴らしながら門前の人ごみをかき分けていくこと数分。ようやく門の外に出た。ここまで来ると遠くから炸裂音や銃声が時折響いてくるのがわかる。それにいちいちビクついている学生込の低ランカーの冒険者もいるが、無視。こいつらはもしもの時のための時間稼ぎ要員だろうからな。

「コ、コウヤさん！」

「ん？おぉ、ララちゃん達じゃないか」

そんな中をのろのろ進んでいると、横からララちゃんを筆頭とした何時ぞやのメンバーが顔色悪く立っていた。よく見ればここら一帯は似たり寄ったりな状態の学生が多い。もちろん指揮官として教員や上位ランクの冒険者もいる。しかし、そんなに経験のない学生には当然といえば当然の反応なわけだ。もうちょっと堂々としていてほしかったと勝手に思ってしまう。リリィなんか俺の頭の上でぐでってるのに。

「それだけの重装備ってことは……ギルドマスターのいる最前線に行くつもりですか？」

「あぁ。とりあえずこいつをぶち込んで来ようとな」

「なっ!?だ、ダメよ！いくらコウヤさんでもあの数の化け物には勝てないわ！兄貴だって手をこまねいてるのに、そんな中に行くなんて自殺行為よ！」

マイルズの問いに素直に答えると、ララちゃんは俺に掴み掛かって

くる勢いで止めてくる。まぁその心配もわからんでもない。後ろのルーシーやガリバーも続くようにして止めてくるが、俺は止まる気が無いわけで。というか、あんだけフェリカちゃんにかっこつけて来たんだからここで帰るなんて選択肢は男が廃る。

「[ｓｐｅｅｃｈ　９８％]やかましい。Ｖａｕｌｔの救世主なめんなよ。あれくらいならＤ．Ｃ．の廃墟のビルにレンジャーを助けに行ったのに比べれば、簡単なことだ。だから、邪魔するな」

「「……」」

何を言おうにもぎゃあぎゃあ返されることにイラついたからか、スピーチスキルがかかってしまった。しかも脅迫に入る部類を言ってしまったようで、学生チームは俺の変わりように顔を青くして道を退いてくれた。何故か知らんが、周りの冒険者も同じように動いてモーゼの如くといった具合だ。まぁ、俺が実際やったわけじゃないけど、なんかこれが口から出てきた。。

だが、楽に移動できるのには変わりないのでこのまま堂々と中心を進んでいく。途中ライリー・レンジャーの連中も見たが、何故か俺を凝視したまま固まっていたのでＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００を見せるようにして軽く手を振っておく。これで俺だとわかってくれるだろう。この恰好はあいつら見たことないだろうし、誰だかわからんだろうからな。

少し進んで、最前線。すでに発砲音も大きくなっており、位置も大体わかってきた。発砲音の数と大きさからみても、報告に間違いはないだろう。爆発音もするのでかなり用心しないといけないが。

「よぅ、来てやったぞ」

「あん?……あぁ、コウヤか」

最前線も最前線。一番先頭部分で腕を組んでいるアイザックの元にようやく到着した。その横には何度か見たことのあるギルドマスター補佐と連絡係、他にもランクA以上の冒険者が集まって俺のミニガンを見ている。物珍しさもあるんだろうが、まず誰だこいつと言わんばかりの視線だ。

「ここにフル装備で来たってことは、アレを何とか出来んのか?」

「あぁ、あれくらいどうってことはない。すぐにミンチにしてやるさ」

「うっし、行って来い」

「ちょっ!マスター!何普通に行かせようとしてるんですか!確かに装備は凄いですが、人間とフェアリーだけで何とかなるわけないでしょう!?」

なんてことなく特攻かまそうとしたら他の冒険者に止められた。解せぬ。

「何だよ、何が気に入らねぇんだ？」

「気に入る気に入らないの問題じゃないです！化け物相手に誰とも知れない奴を特攻させるなんて、自殺行為です！それにそれでこっちに化け物の気が向いたら、どれだけの被害が出るか！」

それを聞いてアイザックは至極面倒くさそうな顔をしているが、他のメンツはこの冒険者の言う言葉に同意しているためか、頷いている。ギルドマスター補佐以外のギルド職員も苦い顔をしているため、似たような考えなのだろう。

この冒険者の言い分は間違ってはいない。この世界の魔法に慣れた連中にとって魔法は切り離せない存在であり、それが効かないミュータントはまさに天敵と言っても差し支えないほどだ。かといって他の遠距離は弓とかになるのであまり効果が見込めない。放射能の影響のせいか、毒とかも効き辛いし。遺物と呼ばれる銃なんてまず魔法側の連中は魔法にこだわって使わない。よくわからんが、プライドみたいなものがあるんだろうさ。

「こいつはデスクローを単体で倒せる実力者だ。それに今は学院で化け物についての講義も受け持っている。いわば化け物に対するスペシャリストと言っていい」

「なっ！」

「それに、こうして手をこまねいていても意味はねぇ。あの戦いもそう時間がかからねぇ内に終わるだろう。そうなればどちらかの勢力が必ずこっちに来る。だったら相性の一番良い奴が行った方が良いだろうよ。それとも、お前が行くか？あ？」

「うっ……いえ、私は、その……」

面倒くさすぎてイラついているアイザックを横目に俺は黙々と戦いの準備を進めていく。正直今ここで俺がしゃしゃり出ても逆効果になりかねん。ギルドマスターたるアイザックが黙らせてくれたほうが俺も動きやすいしね。

「リリィ、きつくないか？」

「……うん、だいじょぶ」

Ｐｉｐ－Ｂｏｙ３０００からレザーベルトを取り出して後ろ腰にリリィを括り付ける。そして彼女は魔法によってそのまま全身を隠すように丸いドーム状の樹で出来た結界を張った。見た目は腰に蜂の巣を着けているようになってしまったが、仕方がない。

戦闘中は必然的に激しく動き回るだろうし、何より流れ弾に当たって死にましたとか洒落にならん。故に結界の中で発動媒体となる杖の先だけ出して戦闘に参加してもらうのだ。ちなみに視界に関しては、魔法で共有できるそうなので問題ない。これは両者の心からの同意と一定の距離にいるときに発動できるそうで、フェアリー等の体が小さい種族は結構重宝しているそうだ。

「ったく、おい。準備出来たか？」

「あぁ、バッチリだ。そこらのミュータントだったら一瞬でぶち殺せる」

「本当に出来るんだから嫌になるな……俺達に飛ばしてくるなよ？」

「わかってるさ。それにこんな状況は何度も経験してきたんだ。この程度造作もない」

ミニガンを背負い直してがちゃがちゃと歩き出す。リリィの視界も良好で、これならばいい足止めをしてくれることだろう。彼女には攻撃を頼んでいないし、発動した樹で相手を転がしたり、スーパーミュータント数体が装備している棍棒のネールボードなんかを使えなくしたりだ。

そうして彼女に準備させつつ近寄っていくと、より状況が鮮明に見えてくる。報告通り数はそれぞれ十体前後。互いに消耗してそれなんだから本来はもっといたんだろう。そこら中に死体が転がっているから数はわからない。こちらにまだ気づいていないのが幸いだが、お互いのリーダー格はほぼ無傷でいるのだからタチが悪い。

ミレルーク側には異種個体であるヌカ・ラークがミレルーク・ハンターと共に数体。スーパーミュータント側には上位個体であるスーパーミュータント・マスターの存在が確認できた。さらにこいつは倒した冒険者から奪ったのか、本来鉄くずだった防具が色々と新調されていてごつくなっていた。しかもミサイルランチャー持ち。

……あれ？ちょいキツくね？ミレルークは普通の群れじゃなかったのか？ギルド諜報員馬鹿なの？死ぬの？

「うーむ……でも、やらないといけないんだよなぁ」

あれだけ啖呵きっといて戻るのはまずないから、行くしかない。とりあえず長距離武器から潰していくしかないだろう。だが何もせずに真正面から突っ込んでいくのはダメだ。ここは平地だから最終的にはそうなるが、開幕は奇襲も兼ねているので大切である。

と、くればだ。相手を驚かせつつ牽制して尚且つ殺さなければならない。

「……派手に行くか。リリィ、耳塞いどけ」

俺はＰｉｐ－Ｂｏｙ３０００を起動して中からグレネードを持てるだけ出し、他にもいくつか地面に置いておく。出した時点でわかると思うが、とりあえず爆破して混乱中に一気に駆逐する作戦だ。こんな平地だと砂埃が目くらましに大いに役立ってくれるだろう。まぁ、ほとんど突っ込んでいくことに変わりはないのだが。

「まさかゲームと同じ事をする羽目になるとは……俺のキャラはこんな気分だったのか」

手持ちのグレネードのピンを一気に抜いて盛大にばら撒く。追加分もそれに続いて一回目が爆発する前に投げ込んでおくのを忘れない。そして爆発までの数秒の内に急いでミニガンを担ぎなおして銃身をいつでも撃てるように回転させておく。戦闘中の彼等からすれば、石ころが飛んできたのと変わりないだろう。現に気づいておらず、戦闘は続行中である。

そして数秒後、連鎖するようにして各所から一気に爆発が起きた。それによりスーパーミュータントとミレルークの前線部隊は爆発四散。直撃したやつは木端微塵になっている。だが、腐ってもミュータント。対して影響が出ていないのも少なくない。ミレルークハンターやマスターなどはほぼ無傷だ。

しかし、混乱はしている。俺はその隙を見逃すわけもなく、両手のミニガンの一斉掃射を開始した。

三十四話目

最前線から少し離れた開けた場所にて、ライリー・レンジャーは一様に口をぽっかりと開けて戦闘の様子を眺めていた。それぞれがこぞって双眼鏡を手にし、固まっている様子は酷く滑稽であるが、同じウェイストランド人ならば誰もがこの状態になるであろう。それほどまでに、衝撃だった。

――――Ｖａｕｌｔ１０１の救世主が帰ってきた。

物語の伝説が、英雄が、今自分達の目の前で自分達と民衆を守るために戦っている。圧倒的な戦力を前にしても一切怯まず、それどころかこちらに手を振ってくる余裕さえ垣間見れた。つい先日までは感じることもなかった覇気と共に前へと進んでいく背中は、あの幼い頃の物語を追体験しているような錯覚に陥らせた。

「まさか……本当に」

「いやいや、確かに凄いし聞いた通りだけどよ！グールや吸血鬼でもないのに生きているわけないだろ！何歳だってんだ！」

「だが、あいつは自分でそう言ったんだぞ。それにあの強さは本物だ」

双眼鏡の先にいるコウヤは、両手でそれぞれミニガンを振り回しながら全体を牽制しながらも一体ずつ確実にミュータントを仕留めていく。時折相手の動きを止めるように出てくる木の根は腰につけているリリィの魔法だろうか。一人ではどうしても出てくる綻びを見事に抑えている。そう長くはないが、コウヤにはそれで十分だった。

「凄い、スーパーミュータントとミレルークの群れをあんないとも簡

単に……！」

レオンはその様子をきらきらした目で食いつくように見ていた。ライリーはそれに苦笑するが、自分もそう変わらないことに気づき、また苦笑した。自分達もミュータントを相手取れるが、ここまでの規模と強力な武器は普通に逃げるしかない。改めて彼の規格外さに驚かされる。

ここにいないキャスも、おそらく同じような顔をするんだろうなと思いながら。

「ミニガンってあんな使い方でしたっけ？」

「いや、少なくとも俺には……というか、普通は出来ない」

開幕から派手にぶっ飛ばしたコウヤの攻撃は見事に双方のミュータントに打撃と混乱を与えることに成功した。これにより冒険者達もうろたえたが、ギルドマスターや上位ランカーの一喝でなんとか抑えることが出来た。

しかし、直撃したミュータントはそうはいかない。混乱している中に完全整備されているミニガンの正確な一斉掃射だ。これにより ミュータント前線部隊は一気に壊滅した。そうしてコウヤはまずスーパーミュータントから片づけることに決めたのか、砂埃に紛れていつの間にやら腰にくくっていた地雷をミレルーク側に向けて死体に隠すようにばら撒き、後方の防衛を完璧にしていた。それでも突貫してくるものはいずれも地雷で吹き飛んだため、ミレルーク側は攻めあぐねている状況だ。

それから少しして砂埃も晴れてきた頃、ようやく片方のミニガンの弾薬が尽きる。これ幸いと突っ込んでくるミュータントだが、それは

悪手であった。

「グアァァァッ!!熱ィー!!」

「ヤメロ！ニンゲン！」

なんと得意の接近戦に持ち込もうとしたミュータントに対して、撃ち過ぎて焼けた銃身を勢いよく顔面に打ち付けたのだ。特に目に入るようにして入れ込んだため、スーパーミュータントは顔を仰け反らせてわめき、その隙にスレッジハンマーで殴ろうとした個体は腕をクロスさせるようにして振り向かずに放たれたミニガンによって蜂の巣にされた。

しかしそれにより片方のミニガンはおしゃかになり、もう一つも完全に弾切れだ。両手に持っている以上リロードは出来ないので、コウヤは素早くＰｉｐ―Ｂｏｙ３０００を操作すると、ミニガンを納めて右手にパワーフィスト、左手にブラックホークを装備する。そしてリリィを上空に離脱させてミレルークの足止めを任せると、単身スーパーミュータントの群れに飛び込んだ。

「ドォラララララァァッ!!」

コウヤは叫び、思いっきり勢いの乗った拳を次々にスーパーミュータントに叩きつけていく。近距離は格闘で、遠距離はマグナムで、相手に息を吐かせることなく攻め立てていくその姿はまさに英雄と言わんばかりである。すでに十体いたスーパーミュータントはマスターを除いて三体のみだ。しかも奪った近接武器のスーパースレッジやネールボードを後ろに思いっきり投げ捨てることでミレルークも数体潰している。一見ごり押ししているように見えて、その実的確な動きを見せているのだから見事と言うほかない。

しかし、いくらパワーアーマーを着ているからと言っても一般的な肉体には不可能な芸当を成し遂げてるコウヤにライリー達は疑問符を浮かべていた。

というのも、スーパーミュータントという個体は戦前のスーパーソルジャー計画によって作り出された人間の上位個体とも呼べるものだからだ。そこらの銃弾や刃物など通さない強靭な肉体に圧倒的な体力、二メートル以上の体格差も相まって、普通の人間が体術で勝てるなどありえないように作られている。実際、歴戦のウェイストランド人でさえ体術では絶対にかなわない。

だが、よく思い出してほしい。コウヤがこの世界に来る時に欲した能力は善と中立のＰｅｒｋｓ全部だ。その中には自身の肉体を改造し、人外に作り替えるＰｅｒｋも存在する。そのおかげで今のコウヤはアダマンチウムの骨格を持ち、他にも主要器官以外をサイボーグに変えている。そのくせ対ロボット武器であるパルス系の効果は変わらないのだ。これだけの肉体を持ち、スキルが全てＭＡＸであるのだから、スーパーミュータントを殴り倒せるのも不思議ではない。

そして彼らは忘れているようだが、英雄譚にはこんな一文も記載されている。かのグールも笑いながら頷き、奴隷商人やタロン社の人間をも避けさせるに至ったことだ。

『彼を同じ人間だと考えてはいけない』

そんなことはすっかり忘れてしまっているライリー達だが、まぁコウヤだから仕方がないと今までの事も思い出して、次第に考えることをやめた。

スーパーミュータントをちぎっては投げを繰り返し、反撃の銃弾でパワーアーマーをボロボロにしながらも、さっきからミサイルを飛ばしてきていたマスターと対峙する。仲間ごと吹き飛ばさんとしてきたのでお望み通り普通のスーパーミュータントを盾にして防いで来たが、もうイライラがマックスである。

ちなみにミニガンを持っていた個体はブラックホークで速攻で撃ち殺しました。マスターだったとはいえ、流石にブラックホークの集中砲火を顔面にV．A．T．S．でくらわせれば爆発四散！スッキリしたところでミサイル持ちと対峙したわけだが、こいつだけB．O．S．のパワーアーマー着けてんだよ。

もちろん幅が足りないから全面と背面を切って紐で結んでいるだけなんだけど、普通に殴ったらこっちの腕がイカれちまいかねない。ブラックホークも試しに数発撃ってみても、へこみはしたけど貫通はしなかったからな。これ以上は弾の無駄だ。

「まぁ、ミサイルごと吹き飛ばせばいいんだけど」

こちらの攻撃が効かないことが分かったからか、マスターが笑いながらミサイルを撃って来ようとした瞬間にV．A．T．S．発動。ミサイルランチャーの中のミサイルに標準を着け、発射。すると、

まぁわかりきったことなんだが爆発して、その真横にいたマスターごと吹き飛んだ。ミサイルランチャーは肩に担ぐものだから必然的に頭から吹き飛んでくれたのは幸運だったな。奴の体力が減っていたとはいえ、これでゲームみたいに耐えられたらどうしようかと思った。

「これであとはミレルークか……」

後ろを見れば、宙に浮いているリリィがほぼ惰性で足止めしていた。ミレルークも空中にいては反撃出来ないと悟ったのか退却を始めていたが、それを逃がすリリィじゃないわけで。転がしたりつついたりして惹きつけてくれていた。とくれば、後は俺の仕事なわけで。

「さってと、一気にいきますか」

ＣＮＤの減ったブラックホークとパワーフィストを二個一修理し、ミレルークに向けて一気に駆け出す。その際にパワーフィストからダーツガンに切り替えておくのも忘れない。流石に奴らに向けての殴りは難しいし、伸びきった腕を鋏でやられたらお終いだ。だから見た目玩具のダーツガンで足を動けなくしつつ毒で体力を減らし、安全に止めを刺す。それを見て逃げ出す個体もいたが、今回俺は一匹も逃がすつもりはない。

ミレルークは蟹が変異しただけあって硬い甲殻持つ。故にそこを殴ったり撃っても効果が少ない。唯一の弱点部位は甲殻や鋏に守られた小さな顔だ。初めて見たときは口に見えたものだが、Ｖ．Ａ．Ｔ．Ｓ．でズームしたり死体を観察するとよくわかる。だからここを慎重に狙わないといけないんだが、普通は群れで行動するために焦って狙いが定まらなかったり適当に撃ってリロード中にダメージを負わされたりする。この世界の場合だと普通に焦って死ぬ奴も多いんじゃないだろうか。

「はいドーン」

「ギキッ」

「……鬼畜」

まぁだからと言って俺は特に焦る必要もないし、弱点も分かっている。逃げる奴らをダーツガンで転ばせたり、無視って毒で殺しつつ、蹴ってひっくり返してから確実にブラックホークで顔を撃ち抜いていく。しかしハンターとヌカ・ラークは流石に硬かった。足は破壊出来たから何とかなったけど、あいつらだけこっちに特攻してきやがったからだ。

距離はあったし、ゲームみたいに足が駄目になっても走ってくることもなかったので普通に倒したけど、少し驚いた。だがこれですべてのミュータントを片づける事が出来た。センサーを見ても周りに敵性反応は無い。

俺は余った地雷を撤去し、念のためＶ．Ａ．Ｔ．Ｓ．を発動して確認するも、変わらず反応は無し。その際にこっちを双眼鏡で見ているライリー達が選択できたので、そちらに全て終わった意味を込めながらボロボロのヘルムを外して手を振る。

「おーい、終わったぞー」

「私頑張った。コーラ１０本分の働き」

「……安いな、お前」

なにはともあれ、ミュータント軍団は確かに脅威だったし普通に恐

怖もあったんだが、改めて『Ｖａｌｔ１０１のアイツ』って凄いんだなと実感した一日だった。

三十五話目

長い、とてつもなく長い夢を見た。

『ほら！可愛い男の子だ、キャサリン。お前は将来どんな大人になるんだろうな……』

『ジェームス……ジェームス……』

『キャサリン！』

それはとても暖かくもあり、辛い記憶でもあった。でも、それを忘れてしまうことは、絶対にないだろう。

『誕生日おめでとう！プレゼントは何だと思う？』

『彼女の友情に期待しすぎるな』

運命のあの日、安全なはずのＶａｕｌｔ１０１からの脱出、友人の死。俺はいきなり一人で生きていくことを余儀なくされた。

『早く逃げて！』

『やはり外からの人間を入れるべきじゃなかった！早く出て行け！』

それからの本当に、本当に辛い毎日。人を人とも思わない残虐なレイダーやタロン社、奴隷商人を相手に戦う日々は、確実に俺を摩耗させていった。食事も清潔な物は無く、水は基本的に汚染された物。前の生活からは考えられないことの連続で、精神的にも参り始めていたが、それでも新たな友人達の助けがあった。

『お前は……俺を殴らないのか？』

『お前、あの時の赤ん坊か？』

『人類社会の再建のために働いてみる気はない？ねぇ、いいでしょ？ちょっとだけ！』

それからは怒涛の展開だ。父を捜して各地を回り、ラジオ局をB．O．S．と共に助けたり、D．C．の端っこにあるリベットシティまでへろへろになりながら行ったり、グールズシティたるアンダーワールドでグール達と飲み明かしたり。まぁいろいろありすぎた。その途中に女性関係も色々あったが、父曰く『お前は俺の息子だな』とのこと。

そんな辛くも楽しい毎日は、父と再会し、全ての人に綺麗な水を与えるための浄化プロジェクトを稼働させようと奮起していた時に終わりを迎える。エンクレイブの浄化プロジェクト襲撃だ。

彼らは父に暗号コードを言うように迫ったが、父は閉鎖したコントロールチャンバーの中で彼らごと機械をオーバーロードさせ、放射能の海に沈んだ。誇り高い自己犠牲の精神。悪用するのが目に見えている彼らに渡すくらいならば、自身と共にでも使わせるのを防いだ。

『――――生きろ、息子よ』

父に泣きながら別れを告げ、あの場所をなんとか脱出できた俺と研究チームは、B．O．S．の助けを借り、要塞へと逃げ込むことに成功した。そこから、父の願いを叶えるための新たな旅が始まる。

父の教えに従い、旅の途中で連れ添った一匹の犬と共に人々を助け

ていく中で、思想を同じくする同志とも巡り会えた。彼の強く、誇り高い精神と肉体と共に戦場を駆け抜けた。それが人間でなかったことは、少々の違いでしかない。

『友よ、お前と共に行ける事を誇りに思う』

『ワンワン！』

彼等と共に過ごした日々と偉業の数々は筆舌に尽くしがたい。その中でも奴隷解放は上位に入る働きだっただろう。パラダイスフォールズが元々気に入らなかった俺と、奴隷商人に憤る彼ことフォークスは奴隷商人とそのつながりのある連中を皆殺しにした。そこから彼等奴隷が十分に生きられるようにユニオンテンプルにいる連中と共に手配した後、パラダイスフォールズは奴隷の奴隷による奴隷のための町になった。エンクレイブから奪ったタレットＭａｒｋ．Ⅱや化学兵器を防衛に設置したのはやり過ぎだったかもしれないが。

他にも久々に赴いたアンダーワールドでライリーが倒れていたり、宇宙人の侵略を防いだり、仮想現実から何故か持ってこれた武器に驚いたり、とあるレイダーの女にストーキングされたり……記憶が次々と頭の中に流れていく。そして――――

「最後もうちょっと詳しく」

ふと急に目が覚める。しばらく呆然と天井を見上げたが、何の意味もなくすぐに切り替えた。窓の外を見れば小鳥が飛び交い、市場はすでに開いており、活気が出始めている。すでに時間は朝を通り越しているのは明白だろう。久々に寝過ごした。

「だが、あれは一体……」

先程の夢の数々。あれはまさしくゲーム内の俺がやった行動とほぼ同じだ。細部で違いはあれど、あそこまで生々しいものは夢とは言い難い。まさしく記憶の追走と言えるだろう。まさかこの俺身体の記憶とでも言うのだろうか。だが、他人の記憶が入ってきているにも関わらず、俺には何の弊害もない。むしろ自然にそれを受け止めている。急な流入による頭痛はあるが、すでにあったことだと心から認識できている。

「……コウヤ、どうかしたかい？」

「あぁ、すまん。起こしたか」

考えていると、後ろから布の擦れる音と共に声がかかる。ここで改めて周りを見れば、散乱した衣服とべたべたした身体。独特の匂いのする部屋にベットで死んだように寝転がる三人の女性とくれば、わかるだろう。前にもこんなことあったなぁなんて記憶の同一化が顕著に出ながらも、俺は寝ぼけ眼でこちらを見るクレアにキスをする。

「んっ……あれ、もう朝？」

「いや、昼近い。最後のころには朝日が出てたの覚えてないか？」

「えーっと、最後ら辺は記憶が曖昧だね。よがり狂ってたのは覚えてるけど。あー、恥ずかし」

そんなことを言いながらベットに腰かけた俺に絡んでくる辺り、まだ余裕がありそうだ。だが今現在腰が抜けているらしい彼女は未だ死んだように寝ているライリーとキャスを突きながら甘えてくる。

さて、何故この状態になっているのかと言えばだ。あれから俺はボロボロになったヘルファイアーアーマーをそのままにみんなの元に帰還した。と同時に上がる歓声と称賛の声。中にはこちらを化け物のように見てくる者もいたが、当たり前の反応だとわかっているので特に相手はしなかった。というか、そうなって出ていくしかないとも考えていたのでこの待遇は予想外でもあった。

そしてギルドに帰り、またもや高額の報酬を受け取った後にライリー達と合流。もみくちゃにされたが、俺がＶａｕｌｔの救世主だということがバレた。ってか自分で言っていたことを忘れていた。なんでも俺の冒険譚はモイラが本にしていたらしく、ウェイストランド人なら誰もが知っている話とのこと。通りであいつ俺の話をメモっていたわけだ。これで彼女の場合本当に金目的じゃないんだから笑えてくる。

興奮冷めやらぬライリー達と共に宿に戻ると、慌ただしい宿内で俺がいつもいる席に座りこむクレアとその横で声をかけているキャスがいた。ライリー達にリリィを任せ、パワーアーマーからレギュレーターロングコートに着替える。そして二人の肩を抱き、間に顔を入れ

るようにしてただいまを告げると、二人から熱烈な抱擁を受けた。クレアはその後も小さく震える手で俺の頬をなでてくる。後から聞いた話では、二人とも共通の友人をミュータントに殺されたことがあるらしい。俺が前線に出た事を聞いたクレアとキャスは気が気じゃなかったとか。

『ただいま』

『おかえり、コウヤ』

それからはもうどんちゃん騒ぎだ。俺が一掃したことを何故かレオンが伝えると、宿内は宴会になった。そしてまた明かされる俺の正体にキャスと話を知っていたクレアが呆然とするのを笑い、他の集まった冒険者や従業員と共に騒ぎまくった。しばらくして時間が夜遅くなると酔いつぶれる面々が目立ち、ぶっ倒れているライリーレンジャーは元より他のメンツも大体が机に突っ伏した。だがまだ起きていた酔いの回ったクレア、キャス、ライリーに終始絡まれていた俺は、共通財産認定を受けると共に寝室へと拉致られた。

と、まぁここまでくれば後はわかるだろう。クレアのかつての宣言通り、襲われました。だがこの肉体のスペックはそこでも発揮され、三人朝まで相手にしても精力的にはまだまだイケた。実質はライリーとキャスが飲み過ぎのせいで真っ青になり、途中退場したためクレアとの一対一だったけど。だがやっぱり戦闘で疲れていたし、クレアが限界だったのもあって朝方に終了したが。

「っていうか、本当に絶倫だったんだね。三人がかりでよがり狂わされるとか、もうあんた無しじゃあこの先やっていけない身体にされちまったよ」

「俺もさ。でも……」

「わかってる。あんたがこの先も旅を続けるってことはね。それにＶａｕｌｔの救世主だってわかった今ならあんたにここらの常識が無いのも納得したし、この世界を見てきたいんだろう？それに、あんたの力を貸してほしい人もいるはずだからね。なら、私は待ってるさ。そんでたまに帰ってきて、抱きしめてくれればいい」

「すま……いや、ありがとうな。クレア」

「ふふっ、わかってるじゃないか。でも、あんまり待たせるんじゃないよ？」

「もちろん。愛してるよ」

ぎゅっとクレアを抱きしめて、キスをする。なんというか、彼女といると落ち着くのだ。知らない世界に自分からとはいえ放り出された身としては、こうして帰りを待ってくれる人がいるのはとてもうれしいことだ。存外俺は寂しがり屋だったのかもしれない。だが彼女はそれごと包み込んでくれて、尚且つ俺のわがままにも付き合ってくれる。出会ってまだそんなに経っていないが、俺は彼女に惚れていたようだ。こんないい女は他にいないと断言できる……体の相性もお互い抜群だったし。

いやはや……スリードックじゃないが、人の人生ってのはわからないものだな。

それから少しして。俺はクレア達の介抱を済ませた後、教授の助手に教授が呼んでいると伝言を受けた。まだ少し頭痛がするが、クレアのおかげで少し緩和されつつある。なので俺はそれを承諾し、裏路地ショートカットを使って学院へと向かった。ちなみにリリィは起きてはいたものの、ライリーレンジャーと一緒に酒ではなくコーラの海に沈んだため動けないとのこと。げふぅと満足げにげっぷしてたからほっといてもいいだろう。もちろん放射能除去のためのＲＡＤアウェイも接種させている。

「えー、急遽参加になったために裏路地から来ましたが、途中カツアゲかましてくるヤング達いたんで、壁の中に埋めてきました。みんなは裏路地の近道する時には十分注意するように」

(((うわぁ……)))

そして着いた俺を待っていたのは教授と教材を持たされているガリバーだった。なんでも今から講義らしく、俺を呼べと生徒からの要望が多かったのだとか。今回は学院側から臨時報酬も出るらしい。そして昨日のことから目が輝いている生徒達相手に講義している現在。結構な大広間で後ろの方では立って聞いている者もいるという

大盛況ぶりだ。しかも大人の冒険者達までいるんだから笑えてくる。ここの卒業生なんだとか。

今回の内容は昨日戦ったスーパーミュータントの撃退方法を聞きたいとのこと。正直そんな話せることはないし、普通の人間や亜人では倒せないことも前置きで伝えておく。弓矢や剣は余程でないとまずもって効き目が薄いし、魔法は俺がよく知らないから何とも言い難い。なので教授がサンプルとして持って帰ったスーパーミュータントの肉片や、頭だけ吹き飛んだ個体を持ってきて詳しく解説することに。

「あとから手袋着けて触ってもらっていいから、よく聞いていてくれ。まずもって彼らの強靭な肉体に傷をつけることは難しく、並大抵の攻撃では通らないことは皆が知っているとおりだ――――俺？俺は除外してくれ――――で、まず初めに諸君らが運悪く出会ってしまって考えることは逃げる、もしくは隠れることだ。想像しにくいなら君たちの考える……そうだな、ドラゴンとかの最強種に対して檜の棒と布の服装備で突っ込むようなものだと思ってほしい。それでも俺はこの溢れんばかりの才能で勝てるなんて考えている馬鹿な奴は、いくら成績が良くても死ぬだけだ。連中はしゃべるが、何のためらいも容赦もなく君たちをずたずたに引き裂くだろう。運が良ければな？」

ここに集まっている生徒達に身振り手振りでｓｐｅｅｃｈスキルも使いながら話していく。時折質問に答えて、スーパーミュータントが使う主な武器も実物付きで紹介しておく。こうやってずたずたにされますよーと言ったら青ざめていたが、そのおかげもあって逃げ方や隠れ方への質問が多かった。俺がミニガンを昨日使っていたせいもあるだろうが。ｓｎｅａｋ・Ｇｕｎ系スキルで効率よく教えられたのであとは実戦経験で掴んでほしい。

そんなこんなで講義をこなすと、生徒や冒険者から先生と呼ばれ

た。正直、まんざらでもなかったのでしばらく質問に答えていたら夕方になってしまったよ。

でも将来的に、クレアと暮らしながら学院で先生をやるっていうのも悪くないかもなぁ、なんて。